
ドラえもん のび太の聖杯戦争奮闘記

青空の木陰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラえもん のび太の聖杯戦争奮闘記

【Nコード】

N0015T

【作者名】

青空の木陰

【あらすじ】

ひよんな事からアーサー王が実在する事を証明するため、のび太は“タイムマシン”でアーサー王のいた時代へと旅立つ。しかし時空間には折悪しく、『時空乱流』が発生して……！？

のび太以外のドラえもんキャラクターはあまり出てきません。主にのび太を主軸に話が展開していきます。もう一つの小説がメインであるため、こちらの更新はかなり不定期となります。もう一方の更新が煮詰まった頃に更新する予定です。その点をご了承の上、閲覧ください。なお、『Arcadia』にも投稿しております。

第一話 「事の始まり」 (前書き)

劇場版ドラえもんを固めて見ていた折、ふと思いついたので書いてみた作品です。

もう一方の作品放っぽっていったい何書いてるんだろう……と自己嫌悪。

そんなこんなで、一話目です。

第一話 「事の始まり」

「ドラえもん……ん……!!」

すべてはこの少年、野比のび太の涙混じりの絶叫から始まる。

足音も荒く階段を駆け上がると、自室へと飛び込むように入り込んだ。

「聞いてよ聞いてよ!! スネ夫とジャイアンがさあ、アーサー王なんてただの伝説でそんなのいる訳ないって! それにしずかちゃんも……ってあれ? なんだ、いないのか」

無人の六畳一間を見た途端落ち着いたのか、頬を掻き掻き、一人ごちるのび太。

事の起こりは数十分前、空き地での事。

いつもの四人でワイワイ話していた時、ふとした事からアーサー王伝説の話題が上った。

騎士の代名詞であり、いつの日か死から目覚めるとされる最強の剣士、アーサー王。

頭が致命的に残念なのび太でも、アーサー王だけはよく知っていた。信じられないかもしれないが、伝記だって昔読破している。

「それで、アーサー王はねえ……」

ここぞとばかりにうんちくをたれるのび太に対し、仲間の一人であるスネ夫が突如噛みついてきた。

「でもアーサー王って結局は架空の人物だよ。元になった人物が二人いて、それをモチーフに描かれたんじゃないかっていう説が今のところ有力だね」

「なんだそうなのか。あーあ、つまんねえの」

スネ夫の言葉に仲間の一人、ガキ大将のジャイアン（本名、こうだたけし剛田剛）が座っていた土管に仰向けに寝転び、盛大に欠伸をする。

のび太はそれが信じられず、必死になって言葉を並べ立てる。

「そ、そんな事ないよ！ アーサー王は実在してるよ！ お墓だつてイギリスにあるんだろ！？」

「のび太さん。お墓があるからって、その人がいたって証明にはならないのよ。遺品やお骨なんかがあれば別だけど、それが見つかったって話は今のところないみたいだし」

「し、しずかちゃんまで……！？」

仲間の一人である紅一点、源しずかの否定の言葉で固まるのび太。

確かにお墓があってもそれは存在の証明にはならない。

勝手に誰かが建てて、それをアーサー王のお墓だと言ってしまえばそれまでだからだ。

『鰯の頭も信心』という言葉のをび太が知っているかどうかは知らないが、いや間違いなく知らないだろうが、世間でそう認知されていても実は偽物でした、という事も十分にあり得る。

「うつつうつ……！ わかった！ 見てろよ！ アーサー王が実在の人物だって事、証明してやるからな！！」

敬愛するアーサー王の存在を否定され、怒りでブルブル震えていたのび太は、突如ビシッと指を突き付けて啖呵を切ると空き地を飛び出し、一目散に家へと駆け戻る。

空き地に取り残された三人は、普段ののび太からは想像もつかないようなその態度にしばらく呆然としていた。

——ここで話は冒頭へと戻る。

「いなんじゃしょうがないか。よし！ 今から“タイムマシン”でアーサー王の生きていた時代に行ってみよう！ あ、でもアーサー王の時代って戦争してたんだよね……絶対危険だぞ。うーん……そうだ！ ドラえもんには悪いけど、念のために“スぺアポケット”を借りて行こう」

パチンと指を鳴らしてそう言うのと押入れの戸を開き、何やらゴソゴソとしていたのび太だったが、やがて突っ込んでいた上半身を引っ

こ抜くとおもむろに右手をポケットに突っ込む。

そして戸を閉めると方向転換、サツと机の引き出しを開け、持ってきていた靴を履くとその中に身を投げ入れた。

22世紀からやってきたネコ型ロボットの親友、ドラえもんの所持品である“タイムマシン”はのび太の机の引き出しにセットされているのだ。

「よし、着地成功！ さてと、アーサー王の時代は何年前だったかな……あれ？ なんだろう、なんか変な感じがするな」

四角い板に機械が乗ったような形の“タイムマシン”に飛び乗ったのび太。

計器を操作する傍ら、ふと疑問を感じて視線を上げる。

何かが……違う。

いや、どこがどう違うとははっきりと言えないのだが……やっぱり普段の雰囲気とは違っているのだ。

そこはかとなくイヤな気配が漂う……のだがそこは良くも悪くものび太である。

「ま、いつか！ ……うん、よし！ セット完了！ それじゃ、アーサー王の時代のイギリスへ、出発〜！！」

深く考えないまま思考を打ち切りデータを入力、発進スイッチをポチツとな。

『エイエイオー』と腕を振り上げ、時空間の大海原へと漕ぎ出してしまった。

唐突だがここに一枚の紙切れがある。

丁寧に折りたたまれたこの紙切れ、中には何か文字が書き込まれている。

そして……これはなんとのび太の机の隅に置かれているのだ。

中にはこう書かれている。

『のび太君へ　ちょっとドラ焼きを買いに行ってください。あとタイムマシンはぜったい使わないように。どういうわけか時空乱流が

発生していて、まともに時空間航行出来ないんだ。さっきタイムパトロールから連絡がきたからホントの話だよ。わかったね！ ドラえもんより』

果たしてのび太は漢字をすべて読めるのか！？

……どうかはさておいて、とにかくのび太はこれを見る事なく、時空の海へと旅立ってしまったのだ。

もう少し目立つところにメモが置かれていたら、せめて紙切れが折りたたまれていなかったら。

結果は自ずと違ってきていただろう。

だが自分の考えに集中するあまり、メモの存在にも危険の匂いにも気付かずのび太は自分から飛び込んでいってしまった。

——運命という名の、血と涙の雨が荒れ狂う生死を賭けた大航海へと。

第一話 「事の始まり」 (後書き)

もう一方の小説『運命と出逢う野球少年』の方もよろしく願います。

一応そちらがメインなので。

この後もう一話投稿します。

第二話 「時空乱流」 (前書き)

二話目です。

第二話 「時空乱流」

「ふんふん」 一体アーサー王ってどんな顔してるんだろうな？
時代にもよるだろうけど、やっぱり出木杉くんみたいにかっこいいんだろうか？ それとも渋いおじさんなのかな？ いやいやそれとも…… 予想に反して実は可愛い女の子だったりとか！？ …… っ
てそれはないよね」

鼻歌交じりで未だ見ぬアーサー王に思いを馳せるのび太。

今のところ時空間航行は順調に進んでいる、何の問題もない。

さっき僅かに感じた違和感も既に忘却の彼方だ。

「ねえタイムマシン。あとどのくらいで着くの？」

『ピピッ、モウ、マモナクデス』

のび太の質問に電子音のような声で返答する“タイムマシン”。

“タイムマシン”には22世紀の高性能AIが組み込まれており、ガイドやコンピュータ管制をマルチタスクで行っている。

このように搭乗者と会話する機能も付加されているのだから、ある意味至れり尽くせりの機能だ。

だから“タイムマシン”にお願いすればデータ入力や時空間検索などといった諸々を一手に引き受けてくれるのだが、のび太はなぜか全ての入力をマニュアルで行っていた。

そこは……まあ、のび太という事でひとつ、理解してもらいたい。

ちなみにこれは当初から付属していたものではなく、後から組み込まれたものである。

これはドラえものの“タイムマシン”が比較的型遅れの代物であるためだ。

新しいものを購入しようにも、タイムマシン自体かなり高額な代物であるため手っ取り早く、しかも安くグレードアップさせようと思ったら、必然的に改造に走らざるを得ない。

この辺りにドラえものの財布の悲哀が見え隠れしているような気が……というか、ドラえものの財布事情って一体どうなっているんだろうか？

少なくとも新しい型の“タイムマシン”を乗り回している彼の妹、ドラミよりも貧乏なのは確かだろうが……。

『アト十秒後、目的地ニ到着シマス……ピッ！？。ピピッ！！！？。』

「え、え！？ タイムマシン、どうしたの！？」

と、もう少しでワープアウトするといところで突如“タイムマシン”が異音を発し始めた。

気になったのび太が声をかけると、機械らしからぬ切迫した電子音で回答する。

『警告！ 警告！！ 時空乱流ノ気配デス！！ 急接近、急接近！
！ コノママデハ、巻キ込マレマス！！』

「えっ、時空乱流？ 何それ？ ……あー、でもどっかで聞いたような気もするけど」

『ピピッ、時空間内ニ発生スル、台風のヨウナ物デス！ 巻キ込マレバ、最悪次元ノ狭間ニ放リ出サレ、永久ニ亜空間ヲ彷徨ウ事ニナリマス！！』

「な、なんだってーっ！！！？」

『運ガ良ケレバ、ドコカ別ノ空間ニ出ル事モアリマスガ』

「冗談じゃない！ どっちにしろ元の時間に戻れないって事じゃな

いか！　ねえ、何とかならないの！？」

かなりの危機的状況である事を悟ったのび太は、必死な顔で“タイムマシン”に打開策の伺いを立てるが、

『ピピッ、トニカク、機体ニシガミツイテイテクダサイ！　既二回避不可能ノルートニ入ッテイマス！　接触マデ、アト十秒！！』

帰ってきた答えはまさに最悪にして非情の物、のび太は涙目になりながらヒシと計器にしがみつく。

「うわーん！　ドラえもーん！ーん！！！」

『3、2、1……突入！！』

瞬間、のび太の視界がブレ、凄まじい振動が全身を襲った。

「うわわわわわっ！！！？？」

時空間に吹き荒れる暴風に“タイムマシン”が振り回される。

ガクンガクン、と身体を揺すられ、のび太の身体のアちこちが計器

に叩き付けられていた。

ぶつけた痛みがズキズキと襲い掛かってくるが、必死なのび太は泣きながらそれらをグツと堪え、全身全霊で以て身体を“タイムマシン”に張り付けた。

揺れる視界の先では稲光が轟音と共に幾条も走り、黒々とした風が唸りを上げて渦を巻いている。

まさにここは台風の中だ。

一瞬の気の緩みが、全てを終わらせる極限の牢獄。

だが、

「うつうつうつ……もう、ダメだあああっ……!!」

そんなものがなくても、所詮は低の低スペックの身体能力しかないのび太。

拙い足掻きもアッサリと破られ、身体が虚空へと投げ出される。

「うわあああああ……っ!!……!!」

『アアッ……ノビ太サン!』

悲痛な叫びの余韻だけを置き去りに、のび太の姿はあっという間に漆黒の空間に飲み込まれ、そこから消えた。

後に残されたのは、今だ暴風と雷を的確な姿勢制御で耐え凌ぐ“タイムマシン”のみ。

感情を表さない筈の鋼鉄のボディに、僅かに悲しみと悔しさの色が滲み出ていた……ような気がした。

第二話 「時空乱流」(後書き)

『時空乱流』の詳しい説明については大長編『ドラえもん のび太の日本誕生』をご覧ください。

第三話 「出口の先には」(前書き)

若干短いです。

第三話 「出口の先には」

「……う、うん」

何も見えない漆黒の空間。

のび太は僅かに意識を取り戻した。

（あれ？ ぼくは……どうしたんだっけ？ えーと……うん、その前に起きなきゃ）

目を開こうとするが、瞼が動かない。

まるで接着剤でガッチリと固定されているかのように。

（……おかしいな？）

それならばと身体を動かそうとするが、やはり動かない。

首も、肩も、腕も、脚も、口さえもだ。

辛うじて声だけは出るみたいだが、口が開かない以上は大して意味

がない。

結局数度試行錯誤してみた後、のび太は全ての運動を放棄した。
諦めの極致で、ゆったりと全身を弛緩させその場に身を委ねる。

（はあ……それにしても、ここは一体どこなんだろう？）

目が開かないので確認の仕様がないうが、幸いにも五感は生きていた。
使えない視覚と味覚はさておくとして、残った三つの感覚で今いる
ところを理解しようと試みる。

聴覚……何も聞こえない、完全な無音。

嗅覚……何も匂ってこない。完全な無臭の空間みたいだ。

触覚……身体には何も触れてないみたいだ。ただ感覚からすると、
仰向けに浮いてるのかな？

現状把握……終了。

結論……何も解らない、どこだよここ。

（って、これじゃダメじゃん！ もっと何か、他に……あれ？ 何

だこの感覚？)

自分で出した身も蓋もない結論に自分でダメ出しをした直後、のび太は突如奇妙な感覚に襲われた。

暖かいような冷たいような、明るいような暗いような、そんな矛盾した感触が全身を駆け巡る。

(ううう……な、何この変な感触!?)

のび太はその気味悪さにゾワワと鳥肌を立たせていた。

すると今度は身体全体が異常なほどの圧迫感に襲われる。

(ぐえっ!？ こ、今度は何だ!?)

まるで元からはまらない型に、力任せに無理矢理指で押し込んでいくような。

のび太の身体能力はスネ夫やジャイアンとは比べる方がかわいそうな程の開きがあり、実は女の子であるしずかよりも低い。

とどのつまり、同年代の女子平均よりも劣った身体能力しかのび太は持っていないのである(その割には129・3kgもあるドラえもんを抱え上げたり、犬に追いかけられた際、犬より速く走ったり

しているのだが……まあそれは火事場の馬鹿力、という事だろう。

そんな脆弱すぎるのび太にとってこれは堪らない。

必死に耐える傍らのび太の脳裏には、車に轢かれて潰れたカエルのイメージが浮かんでは消えていく。

（つ、潰れちゃう……！ やめてやめてやめ……あ、あれ？ 消えた！？）

と、始まった時と同様唐突に、フツとその感触が終わりを告げた。

あまりの展開の不可解さにのび太は内心で首を傾げる。

だがその疑問が解消されないうちに、状況は再び急展開を見せた。

（え？ 何だこれ！？ わ、わ、わ！ 引っ張られる……いや、吸い寄せられてる！？）

何とのび太の身体がどこに向かって動き始めたのだ。

未だ身体が思うように動かないのび太は、触覚からそれを感じ、ただ慌てる事しか出来ない。

やがて閉じた瞼の向こうに、光が見えたような気がした。

それと同時に身体がどこかに放り出される感覚が走る。

次の瞬間、のび太の身体は猛烈な勢いで急降下、垂直落下運動に入
った。

「————ああああああ————っ！……！」

既に声も出せるし、手も足も動かせる。

当然目も開けられるのだが、自分が空中から落下しているという実
感に伴う恐怖のせいで目は開いていない、いや開けない。

手足をバタバタと動かして必死に身体を浮かせようとするが、そん
な事が出来れば人類は飛行機など発明してないだろう。

「助けて————！ ドラえも————ん……！」

当然ながら、声の限り叫んだって件の本人が助けになど来れる訳が
ない。

そのうち声も上ずり、声帯を震わせながらも声が出ない、無発声の
ような状態に陥る。

空中でもがきながら、叫びにならぬ叫びを上げて紐なしバンジーを
強制敢行するのび太。

やがてそれも唐突に終わる。

「ああ、追って来るのなら構わんぞセイバー。ただし——その時は、決死の覚悟を抱いて来——」
「ごふあああつ！！？」

「ああああ——ぐえっ！！？」

自分の身体の真下にいた、青い男の上に頭からダイブする事によって。

第四話 「邂逅」

「あいててて……」

ドスン、と地面に尻餅をつき、ぶつけた頭をさすりながら涙目で呻くのび太。

頭には見事に大きなタンコブが出来ている。

ちなみに落下した距離はざっと換算して100mはあった。

普通だったら間違いなく、頭蓋がザクロのようにはじけ飛んで即死している筈だ。

だがどういふ訳かのび太はコブひとつの負傷で済んでいた。

長い間ジャイアンに殴られ続けたせいで、異様なタフネスを身につけてしまったのか……？

こう見えて意外にのび太は頑丈であった。

もつとも、それだけでは説明がつかない気もするのだが……それは今はさておく。

「はあああ、助かった……それにしてもここは一体「動くな」……」

ヒッ!？」

無事に助かった事に安堵する傍ら、周りを見渡そうとしたのび太だったが、突如首筋に感じた冷たい感触に背筋を硬直させる。

おそろおそろ振り返ると、そこには……、

「痛っ、まだ頭が痛みやがる…… あん？ 何だ、ガキか。なんでガキが空から俺の頭の上へ落ちてきたのかは知らねえが…… しかしお前、運が悪かったな。見られたからには死んでもらわなきゃならねえんだ。せめてもの慈悲だ、苦しまないよう、一瞬で命を止めてやる」

青いボディースーツと銀の軽鎧を纏った、長身の男がいた。

そしてのび太の首筋に突き付けられているのは……血のように真っ赤な槍の穂先。

瞬時に命の危機だと悟ったのび太は顔を青く染め、へたり込んだままの姿勢で後退りする。

「あわわわわ…… な、なんで？ どうしてさ!？」

唇を戦慄^{わなな}かせながら理由を問いただそうとするが、目の前の男はそれらをきっぱりと無視し、スツとのび太の首から引き戻した槍を再

び構える。

その穂先は濃密な殺気と共に、ピッタリのび太の心臓に合わせられていた。

相手の目はどこまでも真剣そのものの、男の言葉は嘘や冗談なんかではない事をのび太は悟る。

いきなり自分の身に降りかかってきた死の気配に、のび太の歯がガチガチと音を鳴らし始めた。

『ああどうしてこんな事に』、『こんな事ならあんな大見得張るんじゃないかった』、と頭の中ではこの不可解すぎる状況と今までの己が行動に、激しい疑問と後悔の念が渦を巻く。

——だが、

「え………？」

事態は思わぬ推移を見せ、のび太の思考は更なる混乱の渦に放り込まれた。

「……どういっつもりだ。何故このガキを庇う？」

「く……っ、如何な理由があろうと、たとえ“聖杯戦争”の最中と言えども………」

突如のび太の眼前に何かが立ち塞がった。

まるでのび太を男から護るように。

頭を抱えて震えていたのび太はその凜とした声に、そっと顔を上げる。

そこにいたのは……。

「——年端も行かぬ、無垢なる子供の命を徒に殺める事、騎士として、剣の英霊として……見過ごす事は出来ません！」

青のドレスに、銀の鎧。

月明かりを受けて輝く金砂の髪に、強い意志を秘めた深緑の瞳。

「その体たらくで言われてもな……チツ、面倒な事をしてくれる……
セイバーよ」

左の胸を血潮で真っ赤に染めた……だがどこまでも気高く凛々しい、騎士の少女だった。

「セイ、バー……？」

のび太は恐怖も疑問も忘れ、ただただ目の前のその背中を呆然とした表情で見つめていた。

「どけ、セイバー。“魔術は秘匿するもの”ってのが魔術師の鉄則。ましてや“聖杯戦争”に関しては言わずもがなだ。それぐらい知ってるだろう？ 後々のためにも消しておいた方が……」

「くどい。退くのならさっさと退きなさい、ランサー……ぐっ!？」

男を凄まじい眼力で睨みつけながら、男の言葉を真つ向両断。

セイバーと呼ばれた騎士の少女は、背後ののび太と眼前の敵に気を払いながらも、鮮血に染まった左胸を抑え低く呻き声を上げていた。相当深いケガをしているんだなあ、とのび太はどこか他人事のように思う。

そして互いに睨み合う事しばし。

やがてランサーと呼ばれたその男はフウ、と溜息をひとつ漏らすと槍を降ろし、徐にクルリと踵を返す。

「……ふん。まあ、どう転ぼうが俺には大して関係ねえ事だしな、勝手にしやがれ。もっともそのガキは、“こっちの事情”に関しては何にも知らねえみたいだが、さてさてどうすんのかねえ……ま、それこそ俺の知った事じゃねえがな」

そして一気に跳躍し、塀の上へと飛び乗るランサー。

その一連の動作で、のび太はここがどこかの家の庭なんだとようやく理解出来た。

「ああそうだ、もう一度言っておくが、追ってきてても構わんぞセイバー。但し、その時は決死の覚悟を抱いてこい！」

そんな捨て台詞を残して、ランサーは再度跳躍。

民家の屋根から屋根へと次々飛び移り、そのまま夜の闇へと消えていった。

「——な、なんなんだあれ！？ 人間が屋根から屋根に飛び移った！？」

一連の光景にのび太の頭は混乱の極みに達し、オーバーヒートを起こしかけていた。

あまりにもトンデモ展開がポンポンと続いたため、脳の処理能力が許容量を越えたのだ。

まあ、のび太の貧弱すぎるアレではそうなるのも無理はない。

「——大丈夫でしたか？」

と、のび太の眼前にいた少女……セイバーが振り返るなり、そう尋ねてきた。

月明かりに照らされたセイバーの顔は、整いすぎている顔立ちと相まって、いつそ幻想的なまでの美しさを醸し出している。

一瞬、その美貌に見惚れていたのび太だったが、その心配そうな声音に思わずカクカクと首を上下に振っていた。

「は、はい！ あ、その……ありがとうございます。えっと、ところでここは一体」——お前、何者だ？」……え？」

お礼ついでに質問をしようとしたのび太だったが、横から響いてきた声に中断を余儀なくされる。

フ、と横を見ると、そこには高校生くらいの少年が立っていた。

どこかの学校のものらしい制服を着込み、左胸はどういう訳か赤い

血でベツタリと染まっている。

その視線は一瞬だけのび太を捉え、次いで今度はセイバーの方にピタリと向けられた。

表情に疑問と猜疑、そして僅かの羞恥を滲ませて。

「何者も何も、セイバーのサーヴァントです。貴方が呼び出したのですから、確認をするまでもないでしょう?」

「セイバーのサーヴァント……?」

「はい。ですから私の事はセイバーと」

「そ、そうか。俺は衛宮士郎っていう。この家の人間……って、や、ゴメン。今のナシ。そうじゃなくてだな、ええと……」

「……成る程。貴方は偶発的に私を呼び出してしまった、と。そういう事なのですね」

「あ……! ? え、えと……た、多分?」

「しかし、たとえそうだとしても貴方は私のマスターだ。貴方の左

手にある令呪がその証拠。警戒する必要はありません」

「令呪……ってちよつと待て！ その前にセイバー……だっけ？ お前、さっき槍で突かれてただろ！？ 左胸血塗れだし、大丈夫なのか！？」

「既に表面の傷は修復されています。ですが、完全ではありません。マスター、治癒魔術が出来るのならばお願い……ッ！？」

「ど、どうしたんだ？」

呆然としているのび太を余所に語り合っていた二人だったが、突如セイバーの顔が厳しく引き締まった。

衛宮士郎と名乗った少年は、その様子に？マークを浮かべる。

「……外に新たなサーヴァントの気配が。マスター、迎撃の許可を」

「きよ、許可って……！？ それにケガは完全に治ってないんだろ！？ そんなもの……」

「ッ！？ 動きが速い……！ もう猶予がありません！ 出ます！」

「あつ、お、おいセイバー！ 待て！」

言い置いて身をかがめ、塀の外へと一気に跳躍するセイバー。

士郎は慌てて門へと走る。

その後しばらくして、

『止まれセイバー！ 人を無暗に傷付けるのは止めるんだ！』

『マスター！ 何を言っているのですか！？ 敵がいるのなら即座に討ち果たすのが当然の事でしょう！？』

『事情が全然分かってないのに殺すなんて事、許可出来るか！ それに敵って一体何なんだよ！？』

『——そう、貴方がセイバーのマスターって訳。そんな寝ぼけた事を言っているところを見ると、本当に何も解ってないみたいね。アーチャー、霊体化していなさい』

『……いいのか？』

『ええ』

『……了解だ』

『お、前……遠坂！？』

『こんばんは、衛宮くん』

そんな緊迫した一連の会話が、塀の向こう側で展開されていた。

そして一人、庭にへたり込んだまま、蚊帳の外へと置き去りにされ

たのび太はというと、

「一体、何が、どうなってるのさ……!?!」

ポカンとした表情を晒したまま、天に向かってそうぼやくしかかった。

——時間を超えて探し求めていた件の本人がすぐ目の前にいた、
という真実にのび太が気付くのは、まだまだ先の事である。

第五話 「現状確認」

「やあやあ、ゴメンゴメン、のび太君。買い置きのだら焼きが切れたのをすっかり忘れてて……あれ？ まだ帰ってないのか」

ここはのび太の部屋。

入ってきたのは青いタヌキのような形のロボット「誰がタヌキだ！ぼくはネコ型ロボット！」ゴメンナサイ……青いネコ型ロボット、ドラえもん。

手に好物のだら焼きの入った袋を携えて、たった今帰ってきたのだ。

早速袋からどら焼きを取り出し、幸せそうな顔で齧り付く。

「……それにしても、どこで油を売ってるんだろう？ 学校はとつくに終わってる筈なのに」

ドラえもんは疑問混じりにそう言つと、机の方を見る。

机の横にはランドセルが掛けられており、のび太が一旦は帰ってきた事を示していた。

「空き地にでもいったのかな？ それとも……まあいいか。それにしても、突発的な時空乱流が起こってるなんて……何かの前触れかなあ？」

モグモグとどら焼きを頬張りながら、宙に視線を彷徨わせるドラえもん。

そのままふと“タイムマシン”のある机の引き出しに目をやった。

ほんの少しだが開いている。

「あれ？ ちょっと開いてる……ま、まさか“タイムマシン”を使っちゃったとか！？ ……なんて、それはないよね。使っちゃってメモを置いてたんだし。夕飯になれば帰ってくるでしょ」

頭をよぎった不吉な予想をあっさりと一蹴し、再びどら焼きに没頭するドラえもん。

その“まさか”が現実の物であるなどとは、露ほども思っていないかった。

机の上をよく見てみれば、ドラえもんが置いたメモの位置が置いた時と1mmも違っていない事に気づいただろうが……。

のび太が時空間で行方不明となった事実が露見するのは、まだまだ先のような……。

一方、その頃ののび太はというと……。

「せ、聖杯戦争!？」

「そう、七組のマスター・サーヴァント主従による聖杯を巡る殺し合い。最後の一組になった時、願いを叶える聖杯が与えられる」

「そんな、本当なのかセイバー？」

「……はい。聖杯を手に入れ、願いを叶えるために私は召喚に応じた。そして他の六騎のサーヴァントも。先程の槍の男がランサー……相手が宝具を用いたため真名が判明しましたが、ケルト神話の英雄『クー・フーリン』。そしてリンの隣にいた赤い外套の男が……」

「わたしのパートナー、アーチャーのサーヴァントよ。いい、衛宮くん？ 信じられないのは解るけど、認めなさい。貴方はもう逃げる事は許されない。殺し合いに勝ち抜いて聖杯を手にするか、他の主従に殺されるか。そのどちらかしか貴方の選択肢はないわ」

「そんな……」

「——ねえ！　僕を忘れないでよ……！」

話の性急さと高度さと突飛さに、見事に置いてきぼりにされていた。

ここは衛宮邸。

文字通り士郎の家であり、のび太が落ちたのはこの家の庭先だった。のび太は士郎の勧めでセイバー、それから先程まで外で何やら言い争いをしていた士郎と同年くらいの少女と共に衛宮邸の居間に上がり込んでいた。

しかしいざその少女が話し始めると、次第に話についていけなくなった。のび太は蚊帳の外となってしまうたのである。

流石はのび太！

残念すぎる程のおツムの鈍さ！

そこに痺れる！ 憧れぬう！

「うるさい！ 余計なお世話だ！ 痺れて欲しくなんかないし、そもそも憧れ“ぬ”ってどういう事さ！？」

「な、何だ！？ いきなり叫び出したりして？」

「え！？ あゝ、いえいえ何でもありませんよ。ただちょっと腹の立つ電波が来たというか何というか……」

「「「？」「」」

慌てるのび太の意味不明な誤魔化しに、そこにいた三人は首を傾げるしかなかった。

バツが悪そうに頭を掻きながらも、のび太はしめたとばかりにそのまま言葉を続ける。

両手の指先をツンツンとつつき合わせながら。

「あのおく、出来れば僕の事忘れないでほしいなあ、話を聞いてほしいなあ、なんて思ったり思わなかったり……エヘヘ」

「あー、うん、そう言えばまだお互い自己紹介もしてなかったな。ゴメンゴメン。じゃ、改めて。俺は衛宮士郎っていうんだ。君の名前は？」

「あ、はい。僕、野比です。野比のび太と言います。小学五年生です。それで、えっと……」

のび太は士郎から視線を外してそのすぐ横、テーブルについている二人を見やる。

二人はその意図に気づいたようで、すぐさま口を開いた。

「ああ、わたし？ 遠坂凛よ」

「……知っているでしょうが、改めまして。セイバーです。さつきは危ないところでしたね」

「はい、あの時はありがとございました」

「ところでのび太君……君はあの時、ランサーの頭の上に落ちてき

たよな。どうして空から落ちてきたんだ？」

「えーと……あ、ちょっと待ってください。その前に……今は西暦何年ですか？ それから、ここは何県ですか？」

「はあ？」

のび太が『ストップ』と手を出し、静止させられた士郎が質問の意図を図りかねて首を傾げる。

今のび太が何よりも知りたかったのは、現在が一体何年の、どの場所なのかという事だった。

時空乱流に巻き込まれて、運よく別の場所に放り出された事だけは解っていたが、ここが西暦何年なのかまでは当然ながら解らなかった。

僅かに理解出来るのは、目の前の相手が日本語を喋っている事からここが日本のどこかであるという事。

それから建物や家具、電化製品などが自分の時代の物とあまり変わっていない事から、自分がいた時代からそう遠くない未来の時間軸に放り出されたのだらうという事だった。

それならドラえもんとの連絡を取って助けてもらう事も不可能ではないかもしれない。

のび太はそう考えていた。

頭の上に『？』マークを浮かべながらも、士郎は答えを口にする――が。

「ええっ！？ 十年以上も未来なの！？ しかも東京じゃない！？」

「な、何だ？ どうした？」

のび太はその答えに愕然とした。

なんとこのび太のいた時代とは数十年も離れており、しかも場所は住んでいた東京・練馬とは大きく離れた西日本地域だと言うのだ。

後者はともかく、前者はこのび太にとっては重すぎる事実。

この時代には未来の自分はともかく、ドラえもんはいないかもしれない。

のび太はドラえもんがいつか未来へ帰る事は知っていたが、いつ帰るのかまでは正確に知らないのだ。

だがのび太はそれでも一縷の望みを賭けて、更に言葉を重ねる。

「あ、あのもう一つ、お願いが！ 電話を貸してもらえませんか！？」

「…………？ あ、ああいいけど」

のび太の必死な表情に気圧され、士郎は思わず首を縦に振る。

そして士郎の案内の下、廊下の電話の前に赴くとのび太は自宅の電話番号をプッシュする。

もしかしたら、と心の中で祈りを捧げながら受話器を耳に当ててみると、

『—— お掛けになった電話番号は、現在、使われておりません』

のび太の希望を木っ端微塵に打ち砕く、無情の宣告が聞こえてきた。

電話がつながらないという事は、少なくとも自分の知る場所に未来の自分はいないという事……つまり行方不明。

こうなってはもはやドラえもんの存在どころの話ではなく、それ以前の問題だ。

仮にドラえもんがこの時代にいなかったとしても、未来の自分ならばあるいはドラえもんと連絡がつけられるかもしれないとのび太は踏んでいた。

かつて“タイムマシン”で未来の自分に会いに行った際、それらし

い事を匂わせる発言をしていたからだ。

だが未来の自分の行方が分らないとなると、その希望の前提条件が木っ端微塵に砕け散った事になる。

勿論、小学生であるのび太にとって行方を追う事など論外の極み。

まともな手段で元の時代へ帰る事は、事実上不可能となったのだ。

「そ、そんな……」

のび太は呆然自失の体で受話器を取り落とし、その場にへたり込んでしまった。

第五話 「現状確認」(後書き)

のび太のいた年代は漫画版連載開始当時、F a t eの年代はP C版発売当時という設定です。

第六話 「事情説明」

「……落ち着いたか？ のび太君」

「は……はい。すいませんでした」

場面は再び居間へ。

その後、へたり込んだまま『どうしよう、どうしよう！？』と涙声で取り乱すのび太を士郎がどうにか宥めすかし、居間へと戻ってきたのだ。

僅かにしゃくり上げつつ、真っ赤に泣き腫らした目を擦りながらのび太は士郎に頭を下げる。

士郎は居たたまれなさそうにポリポリと頬を搔きながら、再び口を開いた。

「しかし、君はなんであんなに取り乱したんだ？ さっきも変な事を聞いてきたし、何か訳があるんだろう？」

「それは……あの……」

言いよどむのび太に、士郎をはじめとする三人は疑問の表情を浮かべる。

のび太は迷っていた。

本当なら何もかも喋ってしまいたい。

喋って楽になりたいと心の中で考えていた。

しかし、いざどう説明するかというところになると、どうしてもそこで考えが止まってしまふのだ。

そもそも「アーサー王に会いに“タイムマシン”に乗ったら事故に遭って、ここに落ちてきてしまいました」などと説明したところで、信じてくれる人が果たしているだろうか？

まず間違いなく信じてもらえない、単なる子供の妄言だと切り捨てられる事だろう。

もしくは所謂『厨二病』の一種かとも。

まあ、のび太の年齢からいえば後者はやや不適當なのでありえないのだが。

いずれにしても、ドラえもんのいる自分の時代と地域ならともかく、ここではそれを正直に説明したとしても常識的に通用しないだろうという事を、のび太はうつすらと悟っていた。

流石に自分の周囲が甚だ異常であるという事を自覚してはいたよう

だ。

その逡巡する様子をジッと見ていた土郎だったが、やがて間が持たなくなり、今度は頭を掻きながらのび太に尋ねた。

「どうした？ 言いにくい事なのか？」

「いえ……その……言っても、信じてくれないと思うから……」

心細げに呟くのび太。

頼りにしているドラえもんが存在が隣にない事で、情緒が不安定になっている。

支えを失った心が、折れそうになっているのだ。

さながら知己も縁者もない遠い異国の地に荷物もなく、突然置き去りにされた少年。

絶望的なまでの孤独感を、のび太は心の底で味わっていた。

曲がりなりにも今喋れているのは、単になけなしの勇気を振り絞っているからに過ぎない。

と、土郎の隣にいた凜がジロリとのび太を睨みつけながら、苛立ち混じりに言い放った。

「いいから、さっさと喋りなさい！ 貴方もさっきこっちの話は聞いてたでしょう！？ こっちは貴方一人に構っていられる程暇じゃないのよ！」

「ヒツ……！？」

あまりの剣幕にのび太の背筋は伸び切り、顔色は蒼白になる。

凜の形相はのび太に、テストで0点を取ったと知った時の母親の、あの鬼の形相を思い出させていた。

「お、おい遠坂！？ そんな言い方はないだろう！？ のび太君はまだ小学生なんだぞ！ もうちょっと優しく……！」

トラウマを抉られたように縮みこむのび太を見かね、慌てて士郎が庇うが、

「……あのね衛宮くん。アナタ、人の事に気配り出来る程の余裕があるの？ 聖杯戦争の何たるかもまだ理解出来ていないくせに、更に荷物を背負い込む気？」

「う……」

凜的确すぎる鋭い舌鋒には何も反論出来なかった。

だがそれでも指摘を無視してのび太の方に向き直り、出来るだけ優しい声音で問いかける。

「えっと、まあとにかく……話してみてくれ。君は困っている。そうだろう？」

「は、はい……」

「困っている人を簡単に見捨てるほど、俺は腐ってないつもりだ。だから、困ってるなら力になる。そのためには、君の事情を知りたいんだ、たとえどんなに出鱈目な話だとしても。……無理に、とは言わないけどさ」

のび太はそつと顔を上げ、士郎の顔を見る。

その眼はどこまでも真剣で、嘘を言っているようには見えない。

のび太は、その眼を信じてみたくなった。

極限まで精神が削られて、気を張っているのも限界に近かったというのも一因としてはあるのだが。

とにかく、士郎の一言でのび太の意思は固まった。

（この人になら……話してみよう）

のび太はそう決意し、ひとつ力強く頷くと口を開いた。

「あの、最初に言っておきますね。今から話す事は、嘘みたいな話かもしれませんが本当の事なんです。だから、とにかく最後まで話を聞いてください。実は僕……」

——そして十数分の後。

「「「タイムマシン」で過去から来た!？」」」

「は、はい……正確には時空間を移動していた時、『時空乱流』に巻き込まれて事故に遭って、偶然こっちの時代に来ちゃったんです」

のび太の説明に、土郎・セイバー・凜の三人は半ば呆れた表情を晒していた。

無理もないだろう。

……この世界の常識では計り知れない事が、のび太の口から齎されたのだから。

「未来から来たロボットの持つてる“タイムマシン”……ねえ。とても信じられないわね」

「凜さんの言う事も分かります。僕も最初ドラえもと会った時は信じられませんでした。でも本当の事なんです。信じてください！」

「と言われてもねえ……何か証拠はあるのかしら？ アナタの言っている事が本当だという証拠は」

「しょ、証拠って言われても……」

そう言われてしまえばぐうの音も出ない。

既に“タイムマシン”の出口は閉じてしまっているだろうし、ドラえもんどころか未来の自分もどこにいるのか解らない始末。

のび太には自分の言葉を証明する事が出来なかった。

諦めたように目を伏せ、座った体勢のまま何とはなしにポケットに手をつ込む。

すると何故かハツとした表情で急に顔を上げた。

どうやらポケットに何かが入っているようだ。

「んん？　なんだろう……あ！　こ、これは！？」

首を傾げながらのび太はポケットからブツを取り出すと、先程までの表情とは打って変わって心底嬉しそうな表情をする。

その手には、何やら白い袋状の物が握られていた。

「そうだ！　これを持ってきてたんだっ！　“スぺアポケット”
！！」

まるで神器を振りかざす神官のように、のび太は“スぺアポケット”を握った手を宙に突き上げる。

さっきまでの意気消沈振りとは180度真逆の潑刺としたのび太に、三人は一様に呆氣にとられてしまう。

その中であって、いち早く再起動を果たしたセイバーがのび太に向かって尋ねた。

「あの……ノビタ。何ですか、それは？」

「ドラえもんが持つてる、未来の道具を入れているポケットのスペア、予備です。この中は四次元空間になっていて、いろいろな道具が入ってるんです。例えば……えーと」

のび太はそう言うつと“スペアポケット”の中に手を突っ込み、ゴソゴソと漁る。

「うーん、室内だから“タケコプター”は危ないし、“ビッグライト”もそうだなあ……よし、じゃあこれだ！ “スモールライト”……！」

そしてのび太が取り出したのは、小型の懐中電灯のような形をしたひみつ道具“スモールライト”。

のび太自身、今まで何度も使っている代物である。

「何だ、それ？」

「名前の通り、物を小さく出来るライトなんです。ちょっとやってみますね。それっ！」

のび太は掛け声と共に“スモールライト”を士郎に向け、スイッチを入れる。

ライトから光が照射され、それを浴びた士郎の体はみるみるうちに小さくなっていった。

いきなり周囲の景色が変わった事に、士郎は驚きを露わにする。

「え、うわっ！？ 何だこれ！？ のび太君が大きくなった!？」

「アハハ、違いますよ。士郎さんが小さくなったんです。“スモールライト”ですから」

「何と……」

「まさか……」

残る二人は、その非現実的且つ非科学的な光景に目を丸くしていた。明らかに質量保存の法則を完全に無視しているこの現象。

魔術という、科学とは真逆のベクトルの力と関わりを持つこの三人でも事態をよく呑み込めないでいた。

こんな現象、大魔術に類する魔術でも果たして実現出来るかどうか。それをただか懐中電灯のスイッチひとつで成し遂げているのだから、こうなるのも無理はない。

「どうですか！　これで僕の言った事が本当だって事、信じてくれますよね！」

再び“スモールライト”を士郎に向けて大きさを元に戻したのび太は、勝ち誇ったように凜に詰め寄る。

凜はしばらくの間、難しい表情をしていたが、徐に息を一つ吐くと、

「……そうね、解ったわ。信じてあげる。流石に今を見たら、ね」

渋々といった表情ながらも『降参』と諸手を挙げ、のび太の言葉を全面的に認めた。

第六話 「事情説明」(後書き)

士郎がのび太の兄貴分的存在に。

そして凜が“怖いお姉さん”になってしまいました。

……まあ、これはこれでアリ……かな？

第七話 「状況解説、そして絶望へ」

「おおよその事情は解ったが……それで、のび太君はこれからどうするんだ？」

「出来れば元の時代に帰りたいんですけど……」

「アテはあるの？」

「それが……思いつかないんです」

その問いかけにしょんぼりとするのび太。

一頻りの事情を納得してもらったのはいいが、これからどうすればいいのかまではさっぱり判断がつかなかった。

当初の目的はアーサー王に会う事だったが、それもおじゃんになってしまっている。

これ以上、この時代にとどまっても意味はなく、かといって帰る手段もない。

“タイムマシン”を使う以外に時間を遡れる方法を、のび太は知ら

なかった。

「君の持つてる未来の道具で何とか出来ないのか？」

「と言われても……確かに魔法みたいな効果のある道具がたくさんありますけど、僕はドラえもんじゃないから道具の全部を知ってるわけじゃないし……あれ？」

と、唐突にのび太は疑問を感じて首を傾げた。

聖杯戦争の話を聞いた時から頭の片隅に引っ掛かっていた事が、ふと自分の言葉で形になったのである。

「どうしたんだ？」

「あの、士郎さん。士郎さんは、あと凜さんですけど、魔法使い……じゃなかった、魔術師なんですよね？」

「え？ あ、ああ。遠坂はともかく、俺は半人前の魔術使いだけだな」

「魔術使い？ 違いがよく解らないんですけど、どう違うんですか？」

「え、そうだな……まあ、ちょっとややこしい話だから、それはまたいずれな。それで？」

「あ、そうだった。えっと、僕のいた時代には魔術とか魔法とか、そういったオカルトチックなものはありません」

そう、のび太はその点が不可解だった。

かつてのび太はドラえもんの道具“もしもボックス”を使い、魔法があつて、且つ科学ではなく魔法が発達した『もしもの世界』を創り出したことがあつた。

それはまさしくパラレルワールド……平行世界を創り出し、行き来していたという事。

所謂『第二魔法』を科学の力で実現していた事になるのだが、その点はまた別の話なのでさておく。

ここで大事な点は、のび太のいた所には魔法・魔術といったオカルトがまったく存在していなかったから、“もしもボックス”を使ってパラレルワールドを創り出したのだという、この前提である。

そもそもオカルトがあつたのなら、ドラえもんがその存在を認知していなかったとは思えない、とのび太は考えていた。

普段はあんなでも、22世紀の万能（と言える程のひみつ道具を持

っている）ネコ型ロボットなのだ。

あらゆる可能性を。と×で100%判断する“○×占い”や、この世の森羅万象を全て網羅している『宇宙完全大百科』に繋ぐ端末“宇宙完全大百科端末機”といった、オカルトの存在を証明出来る道具も持っている。

その上でドラえもんはオカルトの存在を否定していたのだから、間違はなくオカルトは存在しなかったと言っている。

そうでなければ“もしもボックス”を使用する事もなく、直に探しに行った筈だろう。

魔術がたとえ“秘匿するもの”であつたとしても、ドラえもんの道具から完全に隠しきれるとは思えない。

のび太の時代でないとされていたオカルトが、地続きの時間軸上……数十年後の未来である筈のここでは昔から秘密にされながらも存在しているという。

この違いが示す物は一体何なのか、のび太の疑問はそこに尽きた。

のび太は学校の成績等に関しては底辺を這う程の頭脳レベルだが、決して頭が悪いという訳ではなく、むしろ意外な程のひらめき力を有している。

そのため僅かの疑問点からここまで考える事が出来たのであつた。

仮に納得がいなくても、決して疑問を感じてはいけな——のび太の名誉のために、あしからず。

「どういう事なんでしょうか？ 魔術が存在してるのなら、過去の僕の時代にあってもおかしくはない筈です。でもドラえもんはそんな事全然言ってなかったし……」

「う、うーん……と言われてもな。正直、俺にもよく解らん。さっきも言ったけど、俺は半人前の魔術使いでな。その辺の知識は欠片も持っていないんだ。遠坂、何か解るか？」

のび太の疑問に答えられなかった士郎は、さっきから瞑目したまま黙っている凜に水を向ける。

数秒の沈黙の後、徐に人差し指をピンと立てて目を開き、言葉を発した。

「——考えられる可能性がひとつだけ、あるわ。……正直、かなり腹が立つけどね」

「……あ、あの。その可能性って、な、何です？」

苛立ち、剣呑な雰囲気醸し出す凜に、のび太は士郎の背中に隠れながらおそろおそろ尋ねてみる。

どうやら凜に対して苦手意識が芽生えたようである。

相変わらずの臆病さ、やはりのび太はどこまで行ってもものび太であった。

まあ、最初の対応が対応だったので、これも致し方ないところではあるだろう。

「のび太、アナタ……平行世界へ迷い込んだのよ。少なくとも、わたしではそれくらいしか考えつかないわ」

「——それで、なんで目の前にホワイトボード？」

「う……さ、さあ？ 俺に聞かれてもなあ……というか、どこから持ってきたんだこれ？ ウチにはこんな物ないぞ？」

居間の中、目の前にデン、と置かれたホワイトボードに疑問を投げかけあうのび太と土郎。

頭の上には、大量の『？』マークが盛大にラインダンスを踊っている。

「ほらそこ。何をごちゃごちゃ言ってるの？ 解説を始めるから、無駄口叩いてないでこっちを向きなさい」

そしてホワイトボードの横には、どこから取り出したのか黒縁の伊達眼鏡を掛けている凜。

服装は赤の上着に黒のスカートのままだが、雰囲気はさながら女教師か、やり手の塾の講師のようだ。

何かが彼女の琴線に触れてしまったのか……とりあえず触らぬ神に祟りなし、と疑問を封殺して二人は正面に向き直った。

ちなみにセイバーは既に居間のテーブルに坐して、行儀よく続きを待っている。

「いい？ まず平行世界の概念を説明するわね」

そう言つて凜はペンでホワイトボードに一本の縦線を描く。

「この線を今、わたし達のいる世界だとしましょう。そして時間の流れは下から上へ、過去から未来へと流れている」

線の横に、下から上へ向けて矢印が書かれた。

「そして未来に向かうに連れて、この線はいくつも枝分かれするの。まあ運命の分岐、とも言い換えてもいいけれどね。例えばどこかで地震が起きた・起きなかった、誰かが死んだ・死ななかった、といった可能性が枝分かれする。それがこれ。未来は不定形で、どう分岐するかは誰にも解らない。ちなみに未来を見通せる能力者……偽物は除くけど……そういった人達はこのいずれかのうちの一つを見る事が出来る、というのが大半ね。ここまでは分かる？」

線の上の部分に、枝分かれした幾つもの線を描いた凜は生徒陣三人に視線を送る。

「ん……まあ大体は。説明が解りやすいからな」

「ええ」

視線を受けて士郎とセイバーは素直に頷いている。

だが、

「す、すみません……よく解らないです」

肝心要ののび太はというと目をグルグルと回し、頭から煙を噴き上げていた。

放っておくと知恵熱で脳がオーバーヒートしそうな勢いだ。

どうものび太が理解するには高度すぎる話だったようである。

凜はピクピクとするこめかみを抑えながらも、もっと解りやすいように噛み砕いて説明を始めた。

そして数分の後。

「——そして、枝分かれした未来は先では決して交わる事はなく、互いに平行線のまま続いていく。これが平行世界って訳。解ったかしら、のび太？」

「……は、はい。何とか。自分の世界を中心にして、同じのようできて何かが決定的に違う世界のひとつひとつが平行世界だっていうのは解りました……」

へロへロになりながらも、凜先生の言わんとする事をのび太はようやく理解する事が出来た。

頭の上からは、今だ煙がブスブスと燻りながら立ち上っている。

某首相の名言を借りれば、『よく頑張った、感動した！』と評したいほどの苦労をしたようだ。

あくまでのび太基準の、ではあるが。

「ま、上出来ね。じゃ、次のステップに移るけど……」

だが凜はのび太がやっと話を理解したと見るや、すぐさま次の話題へと切り替えた。

のび太にとってこれは堪らない。

さながら死人に鞭打つようなものである。

「ええ〜！？ ちょっとぐらい休ませてくれても……」

「却下よ却下！ 言ったでしょう、こっちは暇じゃないって！ わざわざ貴重な時間を割いて説明してあげてるんだから、むしろ感謝してほしいくらいよ！ ここからが本題なんだから、少しくらい堪えなさい！」

「……は、はい……ガクッ」

凜にバツサリと斬り捨てられたのび太は意気消沈しながらも、渋々静聴する姿勢を整えた。

士郎がポンポンと慰めるように頭を撫でているが、ちょっと……いや、えらく情けない光景である。

「それで、最初に言ったようにのび太は平行世界に迷い込んだ、というのがわたしの見解。その根拠の一つが魔術の存在の有無。のび太のいた世界では存在しておらず、わたし達の世界では秘匿されながらも厳然として存在している。同じのよういて何かが決定的に違うという、平行世界の定義に当て嵌まっている」

「はい、それは解ります」

「そしてのび太の言っていた『時空乱流』、だったかしら？ それに巻き込まれたっていうのが二つ目の根拠。“タイムマシン”のナビゲーターの話だと、巻き込まれた場合、運が良ければどこか別の場所に出るかもしれないという話だったわね」

「はい」

「その“どこか別の場所”が、ある地点から地続きでない、平行世界である可能性は捨てきれない。本来なら平行世界の移動なんてのは『第二魔法』の領域で普通ならまず不可能なんだけど、そもそも“タイムマシン”って、のび太の話の通りなら“時空間”っていう超空間を通ってる訳でしょう？ そんなトンデモ空間なら台風が起きれば平行世界の壁を簡単に越えられるかもしれないからね。我が家系の悲願のひとつをあっさり達成してる事には……まあ、百歩譲って許してあげるわ」

「え、それはその……どうも？　ってちょっと待ってください！？
普通ならまず不可能って………どういう事ですか！？」

凜の言葉の示すものに勘付いたのび太が凜に詰め寄る。

凜はそれを一瞥すると事もなげにこう告げた。

「言葉の通りよ。結論として、アナタは元の世界に帰れない。移動も含めた『平行世界の運営』は、魔術では到底為し得ない事。まさに奇跡の業なのよ。無限に存在する平行世界、その中の繋がりのない二つの世界の座標をピンポイントで特定し、無理矢理風穴を開けて行き来するなんて、どれだけの対価を支払っても実現不可能。酷なようだけど、あなたの持つ未来の道具でも多分無理でしょうね」

「そ、そんな……嘘だ、嘘だ！　そんな事……あつてたまるもんか！」

突き付けられた残酷な結論が受け入れられず、頭を掻き篁りながら慟哭するのび太。

元の時代、いや世界に帰る方法はない。

そう宣言されて平静を保てるような図太い神経を、のび太はしていなかった。

一頻り喚いていたのび太だったが、突如ハツとした様子で抱えていた頭を上げる。

ショックのおかげで、天啓が浮かんだのだ。

「そ、そうだ思い出した！ “スピアポケット” はドラえもんのポケットに繋がってたんだ！ これなら……！」

かつてのび太は“スピアポケット”の四次元空間を通って、ドラえもんのお腹にあるポケットから出てきた事がある。

悲壮感を背負った必死の表情で、のび太はポケットから“スピアポケット”を取り出すと“スピアポケット”の中に無理矢理頭を突っ込んだ。

ああ、書いていてややこしい。

「お、おいのび太君！？ そんな事して大丈夫なのか！？」

既に“スピアポケット”の中に上半身が消えてしまっているのび太に向かって、士郎が心配そうな表情で声を掛ける。

だがのび太は士郎の声など聞こえていないかのように、一心不乱に“スピアポケット”の中へと潜り込んでいく。

やがて足首の辺りまで潜り込んだところで、“スぺアポケット”の隙間から怪訝そうな声が聞こえてきた。

「おかしいな……？ もう向こうに出ていてもいい筈なのに……ま、まさか！？ この四次元空間は、もうドラえもんのポケットと繋がってないの！？」

くぐもった、だが絶望的な声が居間に響き渡る。

“スぺアポケット”の四次元空間と、ドラえもんのポケットの四次元空間の繋がりは寸断されていた。

向こう側は存在しておらず、漆黒の空間だけがただ広がっている。

無理もない。

この世界と、のび太のいた世界とは何の繋がりもなく互いに平行線、完全に断絶しているのだ。

四次元空間同士がリアルタイムで繋がるのは同一世界上に、ホワイトボードの線に例えるなら一本の線の上に二つが同時に存在している時のみ。

いかに空間も時間も超越し、網羅する“四次元ポケット”といえども、存在する世界……線が異なってしまうてはどのようなものかい。

そもそも“次元”が違うのだから。

ここに今、ドラえもんをはじめとする『のび太のいた世界』との縁は完全に断ち切られた。

「そんな……こんな事ってないよ!! ドラえもーーーーーん
! ! ! !」

頭を抜き出し、瞳に溢れんばかりの涙を浮かべながら親友の名を叫ぶのび太。

居場所と希望を失った少年の悲痛すぎる絶叫は、居間に立つ三人の表情を暗く沈み込ませた……。

第七話 「状況解説、そして絶望へ」（後書き）

改めて考えてみると、ドラえものの道具って大概ですよね。

よっぽどバカな事をしなければ、普通に完全犯罪が成し遂げられま
すし。

しかしそれでいて開発元の22世紀の世情はかなり安定している…
…一体どういふこっちゃ（笑）。

第八話 「教会前にて（前編）」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

のっけから三点リーダー四行では誰が誰だか解らないだろう。

上からのび太、士郎、セイバー、凜の順である。

四人は今、夜の新都の郊外を徒歩にて移動中。

新都郊外の丘の上にある教会へ向かっているのだ。

そこには聖杯戦争を監督している神父がいるとの事。

聖杯戦争について無知である士郎に、聖杯戦争についての諸々を知ってもらったため凜がそこへ向かうよう勧めたのである。

一応凜が一通り説明したのだが、それだけでは士郎の覚悟を決める

には不足だった。

だからこそ、そこへ連れて行って士郎にこの戦争についての心構えを着けさせようというのが凜の狙いだ。

しかし今、この四人の間に会話はなく、まるでお通夜のように静まり返っていた。

原因は言わずもがな、のび太である。

三人が出払った衛宮邸に一人居残って留守番はさせられないため、一緒に連れてきたのだ。

「うう……ドラえもん……しずかちゃん……ジャイアン、スネ夫、パパ、ママ……」

「のび太……」

ベソをかきながら、トボトボと足取り重く歩くのび太。

シヨンボリと意気消沈したのび太の放つ暗い雰囲気、四人の周囲の空気を息苦しいまでに重苦しくしていた。

勝気な凜すらも、この雰囲気吞まれてしまっている。

なんだかんだ言っても、のび太は小学五年生。

よく言えば繊細且つ純粹、悪く言えば幼稚且つ懦弱なのび太の精神構造、情け容赦なく降りかかる絶望に耐えきれぬ筈もなかった。

時折士郎が慰めているが、はつきり言って効果の程は薄い。

やがて坂道を登りきると、四人の前に荘厳な雰囲気醸し出す教会が現れた。

「着いたわよ……ここに聖杯戦争の監督役、似非神父・言峰綺礼がいるわ」

「似非神父って何だよ、遠坂」

「似非で十分なのよ、あれは。性質が真反対の“聖堂教会”と“魔術教会”の二束草鞋なんだから。行くわよ、衛宮くん」

「あ、ああ……あれ？ セイバーは行かないのか？」

「はい。いかに監督役とはいえこの身を徒に晒す必要性も、そのつもりありませんし、何よりノビター人をここに残す訳にもいきませんから」

「そうか……なら頼む。じゃ、のび太君。行ってくる」

そう言葉を残して土郎と凜が教会の中へと消えると、後にはセイバーとのび太の二人だけが残された。

「……ノビタ。そろそろ泣くのはお止めなさい。気持ちはこちらからありませんが……」

「……………うう」

セイバーの言葉にも沈黙と嗚咽でしか返答を返せないのび太。

ドンヨリと暗い影を背負ったその惨めったらしい姿は、のび太が精神的に相当疲弊している事を物語っている。

セイバーはただただその様をじっと見つめるのみ。

この年頃の子供と接した経験があまりないのだろう。

何一つ思いつかない様子で立ち竦み、狼狽こそしていないものの顔には「私、困っています」とはつきりと書かれていた。

「……ふう。ん……そういえば、ノビタは“タイムマシン”でどこに行こうとしたのですか？」

と、このままでは埒が明かれないと思ったのか、意を決したようにセイバーが口を開いた。

のび太は「友達とちょっとした事で口論になって、見返すために“タイムマシン”で時を遡ろうとした」と大雑把にしか説明しておらず、何のために“タイムマシン”に乗ったのかまでは説明してはいなかったのだ。

「え……と……実は、アーサー王に会いたくて……」

「……アーサー、王？」

悄然と呟かれたのび太の返答に、セイバーは僅かに目を見開いていた。

だがのび太はその様子に気づく事なく、視線を下に落としたまま言葉が続ける。

「皆が……アーサー王なんてただの伝説で……いないって言うから……だから、僕は……」

「アーサー王が実在の人物だと証明するために……アーサー王の生きていた時代へ向かって時を遡ろうとした、と？」

「うん……でも事故に遭って……それでここに……」

コクリ、と頷くのび太を見て、セイバーはほんの微か、表情を歪めた。

その瞳には、何とも言いようのない不思議な感情の光が瞬いている。

だがやはりのび太はそれに気づかない。

それだけの精神的余裕がないのである。

「貴方は……アーサー王が、好きなのですか？」

「……昔、アーサー王のお話を読んで。こんな風になれたらなくて、憧れてた。僕は、臆病で、弱虫だから……」

滲んだ涙を拭い、そして再び溢れ出してくる涙を堪えながらのび太は呟く。

臆病で、非力で、何事からもすぐに逃げ出し、困った事が起これば即座にドラえもんへ泣きつく。

胸を張って人に自慢出来るような事など一つとしてない。

テストはいつも0点、野球をすれば三振にエラーの山。

かけっこだってビリの常連で、ケンカでジャイアンにボコボコにされた回数は数えるのもウンザリする程。

カッコ悪すぎて、情けなさすぎて涙が出てくる。

だからこそ、自分とは真逆の存在に、かつて伝記で読んだアーサー王に憧れた。

強く、気高く、聡明で、勇敢な最高の騎士。

のび太ではどう足掻いてもなる事の出来ない、崇高なる存在。

アーサー王は、のび太の理想だった。

「だから、僕は見返したかった。アーサー王はホントにいたんだぞ、って。いないって言われて、悔しかった。アーサー王は、僕にとって、ヒーローだから……」

「……そう、ですか」

セイバーはそれだけ言うと、サッと踵を返してのび太に背を向け、言葉を切った。

絞り出すように出された声……その訳は、本人のみが知っている。

だがのび太はそのセイバーらしからぬ様子に終始気づかぬまま、近くの植え込みのブロック部分に力なく腰を下ろした。

するとその時、

「——ふん。少年、そう気を落とすな。諦めるのはまだ早い」

「——ッ！？　だ、誰！？」

虚空から低い、男の声が聞こえてきた。

驚いたのび太は顔を上げ、周囲に目を配るが男など影も形もない。

「事情は大方聞き知っている。にわかには信じがたいが……まあそれはいい。ともかく、自らが持っている手段での帰還が不可能になったのだろう？　それこそ奇跡でも起きない限りは。ならば奇跡を願い、起こせばいい。幸い、君は参加者ではないとはいえ、その奇跡が降臨する現場の只中にいるのだからな」

再び男の声が木霊したかと思うと、近くの木の陰から長身の男が闇から滲み出るように姿を現した。

褐色の肌に白い短髪。

赤い外套と黒のボディアーマーを着込み悠然と、だが油断なく自然体で佇んでいる。

だが何より特徴的なのがその鈍色の眼。

「ヒッ……！？」

獰猛な鷹を思わせるような眼差しで見据えられたのび太は、金縛りにあったかのように身を固くした。

まるで蛇に睨まれたカエルのように、顔が見事に恐怖で彩られている。

「アーチャー、いたいけな子供を怯えさせるような真似をしないでください。ましてノビタは傷心中ですので」

「……そんなつもりはなかったのだが……何故だ？」

「顔が怖かったからではないですか？」

「……そうなのか？」

セイバーからの指摘を受け、首を傾げつつのび太に視線を移す赤い男……凜のサーヴァント・アーチャー。

若干だが柔らかくなった眼差しにのび太は僅かに硬直を解くと、何故か土下座せんばかりの勢いで頭を下げた。

「あの……その……ご、ごめんなさい！ おじさんが、いきなり怖い目で睨みつけてきたからつい……」

「お、おじ……っ!？」

物凄く失礼にすぎる、のび太の率直な発言。

哀れアーチャー、初対面早々に『怖いおじさん』という不名誉極まりない認定をもらってしまった。

子供は良くも悪くも素直で、正直である。

だがそれ故にタチが悪い、ともいえるのだが……。

「……い、いや、すまない。睨んだ訳ではなかったのだ。この通り、謝るからどうか許してほしい」

アーチャーは表情を強張らせながら、こちらも土下座せんばかりの

勢いで頭を下げた。

見かけ二十代かそこらで『おじさん』……しかも枕詞に『怖い』な
どと、英霊とはいえそんな評価はゴメンなのだろう。

精悍な顔つきと屈強な体躯とは裏腹に、心は硝子の如く繊細なアー
チャーであった。

第八話 「教会前にて（前編）」（後書き）

小学生から見れば、二十歳以上の男性なんてみんなおじさんに見えます。

実際問題、当時小学生だった筆者にはそう見えました。

ちなみに、のび太から見たランサーは『怖いお兄さん』です（笑）。

第九話 「教会前にて（後編）」

「それでおじさん。諦めるのはまだ早いってどういう意味ですか？」

「……すまんが、出来れば“お兄さん”と呼んではくれまいか？
これでも一応肉体年齢は二十代なのでね」

「——ええゝっ！？ 嘘でしょ！？」

のび太の驚愕の声が周囲に木霊する。

偽らざる、本心からの叫びだった。

それを聞いた途端、アーチャーの背中がブスブスと黒く煤け始める。

その背後には肩が重くなりそうなほどの哀愁が漂っていた。

「……、なあセイバー。私はこんな時、どうすればいいのだろうな？」

「私に振らないで欲しいのですが……そうですね、事実をありのまま、受け入れるしかないのではないですか？ “おじさん”」

「君までそう呼ぶのか!? ……くっ、爺さん。今まで“爺さん”と呼んでいた事、今この場で誠心誠意、謝罪したい。年齢以上の呼称で呼ばれる事が、まさかここまで堪えるものだったとは……!」

『ブルータス、お前もか』 ばりの絶望感。

アーチャーは遂に膝をつき、天を仰いで二人の与り知らない人物に祈りを捧げ始めた。

訳の解らない事態の展開に、のび太はただただ目を丸くするだけだ。

「……ねえセイバーさん。この人一体どうしちゃったの?」

「私の事はセイバーで構いませんよ。まあ……とりあえず、ご希望通り“お兄さん”と呼んであげてはどうですか? このままでは話が進みませんので」

自分がトドメを差した事を見事に棚に上げ、素知らぬ顔でいけしゃあしゃあと言つてのけるセイバー!。

果たして故意か天然か……真意の程は解らないが、いずれにしろ性質が悪い事には変わりはない。

閑話休題。

「……つまり、この戦争でその、『聖杯』……でしたっけ？　を手に入れれば元の世界に帰れるんですか？　おじ……じゃなかった、お兄さん？」

「ま……まあ、そういう事だ。願いを叶える聖杯ならば、平行世界の壁など物ともせずに帰還する事も可能だろう。数ある伝説にもあるように、元来聖杯とは万能の杯。そういう代物なのだからな。それから……あー、何だ。呼びにくければアーチャーでいいぞ？　のび太少年」

気を取りなおしたアーチャーからの説明に、のび太の表情は少しだけ熱を取り戻す。

だが話にはまだ続きがあった。

「——しかし、君はあくまで迷い人であり、参加者ではない。当然、令呪もサーヴァントも持つてはいない。であるからして、君が聖杯を手に入れる事は不可能だ……本来ならばな」

「え〜っ！？ それじゃ意味ないじゃないですか!？」

期待を持たされたところで逆方向に話を覆されたのび太はアーチャーに食って掛かる。

しかしアーチャーは落ち着き払ったまま、手で のび太 を制した。

アーチャーの話はまだ終わっていない。

「落ち着けのび太少年。“本来ならば”と私は言ったぞ？ 要は、君が手に入れられなければ誰かに手に入れてもらうまでの話だ。それから、その人物に一人、心当たりがあるだろう？」

「……シロウ、と言いたいのですか？ アーチャー。……しかし、首尾よく聖杯を手に入れたとして、シロウがノビタのためにすんなりと聖杯を明け渡しますか？」

「明け渡すさ。間違いなく——躊躇いなくな」

断言するアーチャー。

その迷いなく言い切る様に、セイバーは訝しげに眉根を寄せる。

それに気づいたのか、アーチャーは瞑目しつつ、腕組みをして言葉を続けた。

「私もそれなりに人生経験を積んでいるのだ。人を見る目は多少なりともあると自認している。そして、あの小僧は極度のお人よしだ……いっそ病的なままでにな。少年が助かるのなら聖杯ひとつ、安いものだと思っだらうさ」

アーチャーの言葉は、まるで揺るぎない確信を得ているかのように自信に満ち満ちている。

セイバーは何故こうも断言出来るのか腑に落ちないという様子で頻りに首を捻っていた。

それから待つ事数十分、教会の扉が開き士郎と凜が姿を現す。

そしてのび太の前に立つと開口一番、こう宣言した。

「のび太君、俺は聖杯戦争に参加する。そして聖杯を手に入れたら……君を元の世界に返してあげるよ」

「……………え？」

のび太の目が点になる。

それは士郎の言葉が意外だったからではなく、アーチャーの宣告通りの発言を士郎がしたからに他ならない。

そしてセイバーとてそれは例外ではなかった。

「シロウ、貴方は……それでいいのですか？ あらゆる願いが叶うのですよ？ いえそれ以前に、先程まで貴方は参加したくない素振りでしたが……」

「……いいも何も、俺には叶えたい願い事なんてないし、そもそもこの聖杯戦争、偶然とはいえセイバーを召喚してしまった時点で逃げ出せるようなものじゃなかった。そして、勝ち上がっていくしか選択肢がない事も、よく解ったよ。……それに、あの言峰つて神父の話じゃ俺にとって、この戦争は因縁のあるものらしいからな」

「因縁……ですか？」

「ああ……ん、いや、何でもない。とにかく、他のろくでもない魔^マ術師^{スター}が聖杯を手に入れたら大変な事になる可能性があるし……なら、そうならない様にこっちが手に入ればいい。それに聖杯なら、のび太君を元の世界に返す事だって可能な筈だ」

「……そうですか。貴方がそう決めたのなら、私からは何も言う事

はありません。貴方の左手の令呪がある限り、貴方の剣として戦う事を誓いましょう」

そう宣言し、セイバーは士郎に右手を差し出す。

共に聖杯戦争を戦う主従としての意志、互いのそれを改めて確認するため。

「よろしくな、セイバー……ハハ、頼りない主^{マスター}だけど」

士郎はしっかりとセイバーを見据え、同じく右手でその手を固く握り返した。

そして握手を終えると、今度はのび太に向かって右手を差し出す。

「そういう訳だから、少しの間だけ辛抱してくれるかな？　なに、大丈夫だよ。きっと元の世界に返してみせるから」

そう言って、実に頼りなさそうな笑みを浮かべる士郎。

それはあまりにも儂い、蜘蛛の糸の如き希望の光。

「士郎さん……あ、ありがとうございます！」

だがそれは確かにのび太の目に光を取り戻させた。

失った道が再び照らしだされ、感極まったのび太。

震える両手で士郎の手を握り返すと、人目もはばからず涙を流した。

その様子を、ジッと見つめる者が一人。

無機質なような、それでいて熱が籠ったような不可解な視線が一行に注がれている。

それは、つい先程士郎と凜が出てきた扉の陰から送られていた。

「——ク。始まりの鐘は鳴った。さて、今回の聖杯戦争は一体どのような様相を見せてくれるのか……興味は尽きんよ。なあ、衛宮士郎」

微かに笑みを含んだ声。

ただそれだけを漏らすとサッとカソックの裾を翻し、戦争の監督役

たる神父は自らの聖なる堂の闇へと消えていった。

希望と絶望が入り混じる、凄惨且つ高貴な五度目の争いは、こうして幕を開ける。

——しかし、この黒幕の予想をも上回る『闇』がこの戦争において跳梁跋扈しよう事など、誰の推測にも埒外の事であった。

第九話 「教会前にて（後編）」（後書き）

感想待ってます。

第十話 「宵闇に輝く勇氣（前編）」

「はっ、はっ、はあっ……………！！」

走る、走る。

ただ必死に、ただ只管夜の街並をひた走る。

その顔には色濃い恐怖がありりと描かれ、息せき切って全力疾走するその姿はある種の焦燥感すら漂っていた。

それも仕方がない。

およそ平和な世界で生きてきた平凡な人間であれば、アレを見た瞬

間、一つの猛烈な予感に苛まれるのはむしろ自然な事だ。

“死”

アレならば誰もがそれを感じ、そして思わず後退りする。

人間に限らず、生物ならば自らの生命に危険を感じれば、すぐさま逃走を図る。

それは生存本能の為せる業……一つしかない自らの生命を守るとい
う、ごく当たり前の衝動であり行動。

夜の街を駆けるその少年は、ただそれに忠実に従っているにすぎない。

誰も責めはしない、誰も非難はしない。

当たり前の衝動を、当たり前の行動を本能の赴くまま、素直に実行に移しただけなのだから。

「——っ、うつ……くっ！」

だが、少年は誰よりも責めていた。

己自身を。

表情が歪んでいるのは恐怖の感情だけではない。

情けなかったのだ、恐怖に負けた自分自身が。

許せなかったのだ、あの場から逃げ出した自分自身を。

それでも脚は勝手に動き続ける。

自身の生命を守るために、たった一つしかない何よりも大事な物を
護るために。

だからこそ、少年は己自身を責めるのだ。

眼鏡の奥のその眼には、じんわりと透明な雫が浮かんでいた。

「はっ、はっ……う、うわっ！！？」

と、少年はアスファルトに猛烈な勢いでキスをする。

そしてその一瞬後に、カランカランと乾いた金属音が鳴り響いた。

どうやら道端に落ちていた空き缶を踏み付けたようだ。

固いアスファルトに四肢をしたたか打ち付け、ゴロゴロとその上を無様に転がってゆく。

やがて数メートルほど進んだところで、ようやく少年の全力疾走にピリオドが打たれた。

「う……うう……グスッ」

後には静かにすすり泣く声。

ペタンとその場に座り込み、両の膝から僅かに赤い液体を滲ませて。

力なく頭を垂れたその姿は、まるで生きる氣力を失った癌の末期患者のようだ。

「ドラえもん……」

蹲る少年——のび太は呟く。

自分の傍らにいない、親友の名を。

ただそれだけしか、出来なかった。

ほんの束の間、微かな嗚咽のみが夜の闇を支配する。

「——はっ、随分辛気臭えツラしてんなあ、クソガキ」

「——ッ！？　だっ、誰！？」

唐突に響き渡る、その声。

思わず溢れ出る涙を止め、パツと顔を上げたのび太。

慌ただしくキョロキョロと周囲を見渡す……が、どこもかしこも闇、闇、闇。

月が雲間に隠れた闇夜、人並みにしか夜目のきかないのび太では声の主を見つける事は出来ない。

「——ったく、いい切っ掛けが落っちてきたと思ったらどうしてどうして、このザマかよ。期待外れ、とは言わねえが……ちつと情けなさすぎやしねえか？ ま、オレが言えた義理じゃねえし、ある意味正しい判断だけだよ。ケケケ！」

再び木霊する、その声。

まるで人を小馬鹿にしたような、ひどく乱暴な物言い。

某真っ白になったボクサー同然の燃えカスになっていたのび太も、流石にこれにはムツときた。

「うるさい！ クソガキって言うな！ 姿を見せないで話しかけてくるヤツよりマシだろ！？ コソコソしてないで、ここに出てきて話せよ！」

「あーあー、うつせえのはどっちだよ、声を荒げんじゃねえよ。近所迷惑だぜ？ 今何時だと思ってるやがんだ。草木も眠る丑三つ時、子供はもう寝る時間……ってそりゃ無理か！ 今寝たら、絶対あのバケモンが夢に出てくるだろうしなあ。朝になったら布団の中で大洪水は確かああ！ 力力力力力！」

「——ッ！！？」

下品に嗤う声の主とは対照的に、のび太の顔はサツと蒼白に染まる。

あの身も凍るような恐怖の発端を思い出してしまったのだ。

元の燃えカスへと再び変じたのび太は、瞳に涙を滲ませ力なく頂垂れる。

だが声の主は一切の容赦なく、再び悪口を並べ立て始めた。

「しっかしよおクソガキ、テメエも大したヤツだよなあ。『仲間を見捨てて逃げる』。ハッ、滑稽すぎて涙が出てくらあ！ ハライタと呼吸困難も一緒にな！……おゝつと、そう怖い力才すんじゃねえよ。アレじゃ無理ねえって。オレでもケツ捲って逃げるね、120%。テメエの判断は間違ってるねえよ。褒めてやらあ、よく逃げたなクソガキ！」

パチパチパチ、と乾いた音が夜の闇に木霊する。

両の手を打ち鳴らす、拍手の音だ。

しかもそれは明らかにのび太を賞賛するもので。

「——ッ！！！！」

そのあまりの無神経さに、ついにはのび太の堪忍袋の緒が切れた。

血を流す手足もなんのその、ダンッ、と足を踏み鳴らし、勢いよく立ちあがったのび太は虚空に向かって大声を張り上げる。

「黙れ！ 黙れ黙れ黙れ黙れ黙れッ！！ 姿を見せる卑怯者！ 一発ぶん殴ってやる！！ 僕の気も知らないでさっきから好き勝手……！！！！」

顔を真っ赤にし、爪が食い込まんばかりに握りしめられた拳をブルブルと震わせながらとんでもない事を口走るのび太。

ちよつと考えればそんな大それた事、のび太に出来よう筈もないのだが……。

湧きあがる怒りの感情に、どつぷり身を任せている今の状態では冷静になどなれる道理もなかった。

だがそんな怒り心頭なのび太に対し、知った事かと言わんばかりの盛大な溜息がその場に響き渡る。

「ハアアア、殴られるのが解ってて誰が出ていくかよ、バカが。そもそもクソガキ、テメエが俺の姿を拝むなんざまだまだ早^{はえ}えんだよ」

「な——な、何だとお!!?」

「いちいちキレんなや、クソガキ。ま、何だ。こつちにも事情^はつてモンがあるんでな。どうしてもオレを殴りたいってんなら……」

——このイカれた戦争のただ中で、誰よりも生^なき延^のびてみな。

「――え？」

その言葉で、のび太の怒りが急速に冷却された。

真っ赤に歪んでいた顔がポカンと間抜けな表情を晒し、握り込まれた拳がフツと力を失って垂れ下がる。

その軽薄且つ粗野な物言いの中に、一筋の真剣味を感じ取ったからだ。

「ほれ、落としモンだ。テメエのдар？」

と、いつの間にか目の前の地面に白い何かが落ちていた。

まだ精神と表情が元に戻りきっていないのび太だったが、言葉に突き動かされ何とはなしにそれを拾い上げる。

すると今度は、あつと何かに気づいたかのように目を見開いた。

「こ、これっ、僕の“スピアポケット”！？ 走ってた時にポケッ

トから落ちてたんだ……!？」

「まあぶっちゃけ、そのドブに捨ててもよかったんだけどなあ。それをわざわざ拾って届けてやったんだ。オレってば親切だろ？」

それは絶対違う……、とのび太は心の中でツツコミを入れる。

だが内心はどうあれ、拾ってくれたのは事実だ。

物凄くイヤそうな表情をしながらも、のび太はその場で頭を下げる。

「あ、ありがとう……」

「全然『ありがとう』って表情じゃねえぞ、クソガキ。まあ、とりあえず受け取っというてやるけどよ——戻るんだろ？ あのバケモンのところに」

「——」

ピタリ、とのび太の動きが一瞬止まる。

身体の揺らぎも、表情も、呼吸すらも。

それを知ってか知らずか、声の主はそのまま言葉を続ける。

「戻るんだったら一つだけ、予言をしておくぜ。これから先、テムエは強大で、しかも懐かしい『悪』達に出会う。そしてその『悪』を全て越えたその果てに、『この世全ての悪』と対峙する事になる。途中でおっ死んだりしねえよう、せいぜい気を付けるこつた！ ケケケケケ……！！」

最後まで人の心を不快にさせるような言動のまま、嗤い声が遠ざかってゆく。

闇から生まれ、そして闇に溶けるようにそれは夜の帳に飲まれ、消えた。

後に残されたのは、のび太ただ一人だけ。

「……一体、何だっただんだろう？」

最後の予言とやらもさることながら、最初から最後まで全てが唐突すぎた邂逅。

のび太の頭では、到底全てを飲み込むには至らなかった。

ただポカンと間抜けな表情を晒したまま、呆然とその場に立ち尽くしている。

しかし、たった一つ。

その身を苛んでいたものはいつの間にか鳴りを潜めていた。

「――」

と、徐にクルリ、と体を反転させるのび太。

ギョツ、と右手に持った“スぺアポケット”を強く握りしめながらキツと視線を上げる。

まだあの恐怖は色濃く残り、身体は小刻みに震えて素直に言う事を聞いてくれない。

だがそれ以上の何かが双眸に宿り、絶対なる恐怖の感情を越えてその身を突き動かしていた。

「――いつ、行くぞっ！」

そして駆け出す。

身体を突き動かす衝動のままに、のび太は元来た道へと足を進めていた。

そのあまりにも頼りない、小さな背には恐怖も、不安もズッシリと重くのしかかっている。

しかしそれでも尚、迷いだけは、綺麗さっぱり消え失せていた。

のそり、と黒いナニカが影から飛び出す。

それはスタスタと道の真ん中へと歩を進め、やがてある地点でピタリと歩みを止める。

そこはつい先程までのび太が立っていた場所。

血のように赤いバンダナと腰巻のみを身に纏い、タトゥーのような紋様が全身に刻み込まれた、黒髪黒目のその男。

不気味にすぎる佇まい、気の弱い人間ならばすぐさま卒倒する事間違いないだ。

しかし……もしのび太がその男を見れば、驚きのあまりその場に尻餅をついていたであろう。

男……いやいつそ少年とも呼べるそのモノは、のび太の記憶に新しいその“誰か”に瓜二つという程似ていたのだから。

「」

男は視線をのび太の去っていった方へと向ける。

そしてゆっくりと、ニイイと口の両端を斜め上へと吊り上げた。

それは見る者に恐怖と怖気を呼び起こさせる、ある種凄絶なまでの狂気の笑みだった。

「ハッ……やつと行きやがったか。せいぜい気張りやがれ、“野比のび太”。オレの『目的』のためによお。これ以上、クサレ神父や蟲ジジイ達の思惑のダシにされんのはゴメンなんだあ——
ヒヤアアアハハハハハハハ——！！！！」

狂ったように高笑いする、その男。

その哄笑は、不可思議なまでに淀みなく、そしてどす黒く澄んでいった。

——月は、まだ雲の中だ。

を打破出来るかどうか……。アーチャー、弾幕薄いわよ！ 何やつてんの！？」

「凜、その言い方は色々と……。いや、了解だ。しかし……。全く通用せぬ弾幕に果たして意味があるのか？ 目眩まし程度にはなるかもしれないが……。はてさて」

「——ふふふつ……。無駄よ。わたしのバーサーカーには誰も勝てない。そして、ここにいる誰一人として逃がさない」

夜の闇の中で繰り広げられる死闘。

青と銀の騎士は目に見えない不可視の剣を振るい、赤い弓兵はその

場所から遠く離れた位置に立ち文字通り、矢継ぎ早に鎧の弾幕を浴びせる。

しかし、それは己が身に降りかかるそれらの脅威にいささかも揺らぎを見せる事なく、ただただ死の猛威を振り撒いていく。

振り回されるのは岩の剣。

しかしただの岩の剣ではない。

確実に2メートル以上はあると思われる、鋸のようなささくれ立った形状をした片刃の斧剣。

それをいとも容易く振り回し、士郎やセイバー、凜、アーチャーの命を刈り取りに来ている。

死を振りまく斧剣の担い手は鉛色の巨人。

2メートル強はあろうかという上背、発達した筋肉に鎧われた体躯。

何より特徴的なのがまるで知性というものを感じさせない、光を失ったその異様な双眸。

狂戦士、サーヴァント・バーサーカー。

その怪物を使役するは、雪の精を思わせるような10歳前後の可憐

な少女。

腰まで伸びた純白の髪と、ルビーのように紅い瞳を持ちし、ある種歪なまでに純粋な心を持つマスター。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

この互いに正反対の主従が齎す苛烈な死の匂いに、四人は晒されていた。

「……しかし、こう言っちゃ何だけどのび太君が逃げ出してくれていて助かったな」

「そうね。あの子がいたところで足手まといにしかならなかったし、他を気にしなくてよくなった分セイバーもアーチャーも戦闘に集中出来る。もう一つ言うなら衛宮君、ついでにアナタも逃げ出してほしかったんだけどね」

「それは無理だ。俺はセイバーのマスターだからな」

話は少し前に遡る。

「——ねえ、お話は終わり？」

あの教会からの帰り道。

突然女の子特有の柔らかく、高い声が聞こえてきたかと思うといきなりそれは現れた。

天にも届けと言わんばかりの巨躯を誇る、鉛色の怪物を引き連れた白の少女。

「はじめまして、リン。わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォ

ン・アインツベルンって言えばわかるでしょ？」

「アインツベルン……！？ それって御三家の！？」

「あ、あわわわ、あああ、あわ、あああ……！？」

「お、おいのび太君、大丈夫か！？」

名乗ったその少女は持ち上げていたスカートの裾を降ろし、自己紹介を終えると、

「——じゃあ殺すね。やっちゃえバーサーカー」

まるで目に付いた羽虫をいじるかのような無邪気さで、士郎達の被害を巨人に命じた。

「う……う、うわあああああつ！！！？？」

その瞬間、のび太は脱兎の如く駆け出した。

バーサーカーとは正反対の方向、衛宮邸へと続く道筋へと。

その青白く染まった幼い顔に、絶対なる恐怖の感情を貼り付けて。

短時間ながらも濃厚な『死の気配』に晒された結果、のび太の精神はパニックを通り越して恐慌状態に陥ってしまったのだ。

士郎達は引き留める事も、追う事もせずただそのまま行かせた。

あの怪物ならば子供が恐怖に駆られて逃げ出したくなるのはごく当然の事、逃げ出す事で少しでも危険から遠ざかれるのならそれでいいと判断したのだ。

来た道を逆に辿っていけば衛宮邸まで真つ直ぐ帰れるだろうし、何より殺し合いの現場に魔術師でもない、ただの小学生の子供を留めておく訳にもいかない。

「——シッ！」

[.....] ! ! !

そしてそのまま戦闘へ突入。

セイバーがバーサーカーへと肉薄し、不可視の剣で以て白兵戦を仕掛ける。

アーチャーはその場から即座に離脱、やや離れた位置から弓による援護射撃を開始した。

始まって数分、既に切り結んだ回数は数十合、浴びせた鏃も三ケタに届く。

だが、それでも尚巨人は力の衰えを見せない。

不可視の刃がその身に触れようと、目にもとまらぬ速度で飛来する幾条もの鏃に晒されながらも、その悉くを肉体が弾き飛ばしている。

未だ傷一つ負っていない、比類なき耐久力を誇る強靱なボディ。

巨大な岩の塊を棒切れのように振り回す臂力もさることながら、何よりそれが四人をして苦戦を強いらせていた。

「——くっ！ セイバーがここまで手こずるとはね。攻撃が通じない上にあんなナタのお化けみたいな振り回されたら、懐にも潜り込めない！」

悔しげや表情を浮かべながら唇を噛む凜。

状況は千日手に陥ってしまっている。

アーチャーの矢は堅牢なボディに無効化され、セイバーは狂ったように振るわれる斧剣に斬撃を悉く弾かれ何度もたたらを踏む。

凜も手持ちの宝石で魔術を行使し、バーサーカーを狙うがそれもやはり無駄に終わり、へっぽこ魔術使いの士郎は何も出来ず、悔しげに顔を歪めるだけで論外。

決め手に欠ける命のやり取り。

今のところ、均衡状態が続いているがどちらが優勢かは火を見るよりも明らかだ。

さながら果物ナイフとチェーンソーのぶつかり合い。

どちらが先に碎けるかは自明の理、早く勝負をつけなくては四人揃って物言わぬ屍と化す。

士郎と凜は焦り始めていた。

「——凜。少し離れている。一発デカイのをぶつける」

「——ッ！ 士郎、セイバー！ すぐにここから離れて！ それから対シヨック！」

アーチャーからの念話が凜に届き、凜は淀みなくその真意を汲み取るとすぐさま隣の士郎に指示を飛ばす。

セイバーはその直感で即座に状況を理解し後退、士郎は訝しみながらもその剣幕に圧され、粛々と指示に従う。

全てが終わったその瞬間、ヒュツと風切り音が聞こえたかと思うとバーサーカーが突如爆発を起こした。

「ぐうつ！？」

「うつつ！」

撒き散らされる衝撃波と閃光に対し、腕で身体を庇いながら耐え凌ぐ士郎と凜。

「——！」

セイバーは目を細くし、不可視の剣をかざして光と爆風を防御して

いる。

体勢を低くしてやりすごす、その華奢にすぎる姿はやはり年相応の少女のそれだった。

しかしその凄烈な意志を宿す眼差しだけは唯一、少女としての一線を画している。

「——チツ。まったく、呆れるな。どこまでタフなヤツだ」

「……えっ？」

と、アーチャーの舌打ちが念話を通じて伝わってき、凜は僅かに首を傾げる。

しかし爆発で生じた煙が晴れると、その意味が実感を伴って理解出来たようで、秀麗な眉根を寄せながら吐き捨てるように毒づいた。

「——ホント、どこまでタフなのかしら」

「……冗談だろ、あれで無傷なのかよ!？」

「流石に……悪夢ですねこれは……」

三人……いや四人の目に映ったモノ。

それは掠り傷一つ負っていない、威風堂々と爆心地に佇むバーサーカーの姿だった。

[.....! ! !]

己が健在ぶりを示すかのように、虚空に向かって思うさま雄叫びを上げる鉛色の巨人。

セイバーの弦き通り、まさに悪夢のような光景だろう。

先程放たれたアーチャーの矢の威力は、今までバーサーカーに向けて放たれたどの攻撃より強力だった。

しかし、バーサーカーはそれにすら全く堪えた様子を見せず、むしろ怒りによって闘志が増しているときた。

必殺の一矢が、ただバーサーカーの怒りを買っただけの結果に終わったなどと、誰だって信じたくはないだろう。

「フッフ……惜しかったわねリン。中々の威力だったけど、私のバーサーカーに傷をつけるにはまだ力が足りない。バーサーカー、ここからは遠慮はなしよ。徹底的に……潰しなさい」

だがバーサーカーはそれをも上回る金剛力で以て力任せにその優位性をひっくり返し、逆にセイバーを圧倒している。

そしてもう一つ、バーサーカーがセイバーを圧倒たらしめている要素がある。

それは“質量差”だ。

「くそつ、セイバーが圧されてる！ さっきは互角の戦いだっただのに！」

「当然よお兄ちゃん。技はともかく、体格が違いすぎるもの。むしろ本気になったバーサーカーが相手でよくここまで保ってるわね、アナタのサーヴァント」

悔しげに表情を歪める士郎と、それとは対照に余裕の笑みを湛えて言葉を返すイリヤスフィール。

セイバーは身長154センチ、体重42キロとごくごく平均的な思春期の少女のそれ。

対するバーサーカーは身長253センチ、体重311キロという、通常ではありえない体躯を誇る。

身長はセイバーの約1.5倍強、体重は実にセイバーの約8倍という目を疑いたくなるような開きがあるのだ。

「があつ!？」

バーサーカーの横薙ぎの一閃に、セイバーがゴムまりのように弾き飛ばされた。

地面に強かに叩き付けられ、一瞬セイバーの息が止まる。

幸い目立つた外傷は見当たらないものの、体勢が完全に崩れてしまつたこれは致命的。

バーサーカーは当然、その決定的な隙を見逃さない。

戦術眼などといった大層なものではなく、理性を奪われ、狂わされても尚……いや、だからこそ残存する、ただただ闘争に身を置く者の『本能』に従って。

[.....] ! ! !

見る見るうちに接近するバーサーカー。

セイバーの呼吸は今だ乱れたまま、体勢を立て直す事もままならず膝立ちで相手を見据えるのが精々だ。

目に宿る鋭い光はそのまま、しかし状況は絶望的。

思わず悔しさに顔を歪めるセイバー。

それでも剣を握る手に力を籠め、絶望へと文字通り刃向おうと膝立ちのまま構えを取る。

「くっ……！」

「セイバー！」

「アーチャー、構わないから弾幕を……！」

「終わりね」

四者四様の言葉が紡がれ、バーサーカーの斧剣がセイバー目掛け振り下ろされる。

——その、瞬間だった。

『——ドッカー————ン!——!』

そんな声が聞こえてきたと同時に、バーサーカーが突如横殴りに吹っ飛ばされた。

「——は？」

「——え？」

と、道の向こう側から声変わり前の、それでいてどこか気の抜けた声が響く。

この場にいる全員の視線が、バツと一斉にそこに向けられた。

そして一同が、同時に驚愕の表情を浮かべる。

「な……なんで君がここに……!？」

「そ、その……土郎さん達がやっぱり心配で……戻ってきちゃいました」

小柄な体躯と、幾分気の弱そうなその声。

「きちやいました……って、アンタ状況解ってるの！？ 下手したら死ぬかもしれないのよ！？ アンタはあのまま逃げるのが正解だったの！」

「は、はい……でも、僕は……」

黄色の上着に紺の半ズボン、水色のスニーカーを履き丸い眼鏡を掛けた、その平凡な出で立ち。

「——どうして戻ってきたのですか？ 貴方は……バーサーカーの恐怖に駆られて逃げ出した。貴方の判断はそれでよかったのです。私達は貴方を肯定こそすれ、責めたりはしない。そのまま逃げていれば安全だったのに……何故？ 怖くは、ないのですか？」

「……正直、怖いよ。それに死んじゃったら元の世界に帰れないし、今も足が震えてる。でも……嫌だったんだ、セイバー」

「嫌？ 何ですか？」

「……自分達とはまったく関係のない僕なんかを、助けるって言ってくれた。そんな人達を……怖いから、死にたくないからって、見捨てて逃げるのが。だから……」

身体のうちこちに擦り傷を作り、足は痙攣を起こしたかのように細かい振動を刻み、眼鏡の奥の瞳には恐怖の影がチラついている。

しかしそれ以上の確かな何かが、その少年の小さな身体から揺らめいているのを、この場にいる全員が感じ取っていた。

それは絶望的な逆境に立ち向かう事の出来る、この弱者が唯一つだけ持つ絶対なる武器。

「アナタは……確か最初に逃げちゃった子よね？　この後追いかけて殺すつもりだったから、手間が省けてよかったわ。何で戻ってきたかはよく解らないけど……最後に名前くらいは聞いてあげる。アナタのお名前は？」

「僕は……ぼっ、僕は！」

見た目同い年の白の少女の言いようのない気配にたじろぎながらも、キッと少年は視線をぶつける。

前方に突き出された左手には、銀に輝く丸い筒。

頭には、小さい竹トンボのようなプロペラ。

左の腰には、鞘に収まった日本刀が一振り。

右のポケットには、細身のピストル状の物が二丁。

そして眼鏡の奥の双眸に宿るは————恐怖を塗り潰すほどに迸る、“勇気”。

「——通りすがりの、正義の味方っ！！ 野比、のび太だ！！！」

高らかに名乗りを上げる少年——野比のび太。

恐怖を乗り越え、迷いを振り払い、今ここにのび太は聖杯戦争へ、
真の意味で一歩足を踏み入れた。

——
雲間から、月が頭をもたげた。

第十二話 「宵闇に輝く勇氣（後編・1）」（前書き）

この回が長くなりすぎたので、後編を三つに分割します。

自分の文章力の低さに絶望……。

第十二話 「宵闇に輝く勇氣（後編・1）」

「のびちゃん、ちょっとお願いが……あらドラちゃんだけ？」

「あれ、ママ？　どうかしたんですか？」

都合三つ目のどら焼きを頬張っていたドラえもんであったが、突然部屋の戸が開かれたかと思うと、その奥の廊下に佇む一人の女性と目が合った。

入ってきた女性は野比玉子。

野比のび太の母親であり、どこに出しても恥ずかしいほど胡散臭い青ダヌキ「誰が青ダヌキだ！　僕はネコ型ロボットだって言ってるだろ！？」……ハイハイ、自称未来から来たネコ型ロボットをすんなりと我が家に迎え入れた、ある意味大物すぎる女傑である。

そしてのび太にとって頭の上がない存在であり、野比家の実質的ボスでもある。

「ドラちゃん、のびちゃんがどこにいるか知らない？」

「一旦は帰ってきたみたいなんですけど、またどこかに出掛けちゃ

つたみたいです。多分空き地かなあ？ ムグムグ……」

「あら、そう……お使いを頼みたかったんだけど、いないんじゃないかな。ドラちゃん、代わりに行ってきてくれないかしら？」

「はむ、ムグムグ……ング、はいはい解りました。買う物は……あメモがありますね」

食べかけのドラ焼きを大口を開けて放り込むと、差し出された買い物カゴを受け取るドラえもん。

中に入っていたメモ用紙を取り出し、ふむふむと内容を覚えていく。

「お願いねドラちゃん。それから、もし途中でのびちゃんに会ったらさっさと宿題を片づけるように言っておいてちょうだい」

玉子はその言い置いて踵を返すと、パタンと襖を閉めて一階へと戻っていった。

「……はああ、やれやれ。また外に出る事になるのかあ。なんて間の悪い……ま、いいか。買い物ついでにのび太君を探してみよう」

溜息混じりにそう呟くと、ドラえもんはお腹に装着された“四次元ポケット”に両手を突っ込みゴソゴソと漁る。

やがて目的の物を取り出すと、それを頭のでっぺんに力チャリと取り付けた。

黄色い竹トンボのようなその物体は、まごう事なきひみつ道具の定番、“タケコプター”。

「さて、まずはスーパーへ、と……」

そして部屋の窓を開けると徐にそこから一步を踏み出し、窓の外の晴れ渡る大空へと飛び立っていった。

「……あ、おいミイちゃん！」

「みゃ〜」

……途中、空から見つけたガールフレンドの猫、ミイちゃんに頬をだらしなく緩めながらパタパタと手を振って。

ムクリと瓦礫の中から巨体を持ち上げたバーサーカーは、自らを吹き飛ばした張本人であるのび太に向かって疾駆する。

本能的に、この場で最大の脅威であると悟っていたからだ。

斧剣を振り上げ、その場に佇むのび太目掛け凄まじい勢いで凶器を振り下ろす。

――が。

「のび太く――んんっ!？」

「い、いない!？」

一瞬、士郎と凜は我が目を疑う。

斬撃の直前、いつの間にかのび太の姿がその場から煙のように消え失せていた。

忽然と、まるで最初からそこにいなかったかのように。

当然、狂戦士の斧剣は無人の空間をただ薙ぎ払う結果に終わる。

しかし空振った斧剣は空間を切り裂き、大気を掻き回しその衝撃波によって瓦礫を勢いよく巻き上げた。

振っただけでこれでは、当たればただでは済まない……しかし、当たらなければ意味はない。

果たしてのび太は一体どこに……。

「——うはああ！ お、おっかなびっくり……！ セイバー、大丈夫！？」

「——え！？ ノ、ノビタ！？」

「「「はあっ！？」「」」

少年少女の驚愕の声が夜の闇に響き渡る。

何とのび太はいつの間にか、セイバーの横に立っていた。

先程のび太が立っていた場所からそこまで、実に数十メートルはある。

それを一瞬で、バーサーカーの神速の剣撃すらあっさりと潜り抜けて踏破して来たのだ。

まさに電光石火、目にも止まらぬ早業。

マスター陣はあまりの衝撃に思考が追いつかず、ただ口をパクパクと動かすだけでセイバーに至ってはギシリとその場で硬直する始末。

しかしのび太はそんな様子を知ってか知らずか、上着の袖で冷や汗を拭いながらひどく心配そうな表情でセイバーに声をかけていた。

目を白黒させつつも、セイバーはアワアワと疑問をやっと口にする。

「ノ、ノビタいつの間に、こちらに！？ 最速を誇るランサーでもあるまいし、貴方は、一体、どうやって……！？」

「お、落ち着いてセイバー！？ 説明は後でするから！ とにかく、今はアイツを何とかしないと！」

取り乱すセイバーを揺さぶってどうどうと宥めながら、のび太はスツと左腕をバーサーカーに向ける。

左腕の先には月光を反射して銀に輝く、円筒形の筒が填められていた。

本来、彼の親友であるドラえものの持つ22世紀は未来のひみつ道具、“空気砲”。

高密度の空気の塊を撃ち出す、小型・短銃身の大砲であり、最大出力ならば、実に数百キロもある鋼鉄製のロボットすら木っ端微塵に

破壊するという代物だ。

先程バーサーカーを吹き飛ばしたのはこれである。

のび太はそれ以外にも、道すから“スピアポケット”から自分が知りうる限りのひみつ道具で武装を固めてきた。

頭につけたプロペラは、空を自由に飛ぶ事の出来る定番のひみつ道具、“タケコプター”。

腰に佩いた日本刀は、リーダー内蔵で自動反応、たとえド素人がただ振り回しても剣の達人と互角に渡り合えるひみつ道具、“名刀・電光丸”。

ポケットに忍ばせたピストルは、相手を殺傷する事なく気絶させる事の出来るひみつ道具、“ショックガン”。

そしてのび太は、実は足にもひみつ道具を仕掛けていた。

塗れば目にも止まらぬ速さで走る事の出来るひみつ道具、“チータローション”を塗っていたのだ。

これの効果でバーサーカーの剣撃を寸前で掻い潜り、セイバーのところまで一瞬で移動した、という訳である。

しかし……。

(……困ったなあ。あそこからここまで走ってきたから“チータローション”の効果がさっきので切れちゃった……それに改めてあの

バーサーカーってヤツを見ると“空気砲”はともかく、“名刀・電光丸”と“ショックガン”は通用しなさそうだなあ)

そう、のび太の不安はまさにそこにあつた。

“チーターション”のデメリット、それは効果時間が非常に短いという事。

あの謎の声の主と会話した場所からこの薬を使用していたせいで、セイバーの位置への移動を最後に効果限界が来てしまったのだ。

さらに問題なのはセイバーの剣を弾き、アーチャーの矢を物ともしないその強靱な鉛色の巨体。

勿論途中参加であるのび太はそんな事を知る由もないのだが、手当たり次第装備してきた武器の中で、“名刀・電光丸”と“ショックガン”から既に見切りをつけていた。

“ショックガン”は“空気砲”よりも純粋な破壊力がないからそこまで効果が期待出来そうにない上、“名刀・電光丸”で接近戦でも挑もうものなら、地力の差と何より質量差であつという間に潰れたトマトが一つ出来上がる。

如何に理不尽な力を持つひみつ道具とはいえ、扱う本人と相手の情報を抜きにして単純に計算する訳にはいかない。

それにのび太は始めから、自分一人であの化け物を何とかしよう、などという自惚れた事は欠片も思っていなかった。

これまで劣等生として生きてきたのび太は、自分自身の身の丈というものをよく知っている。

もったもそれは多少……どこるか多分に卑屈な物ではあるのだが。

その上でのび太は考える。

自分自身が出来る事を……そして、この場において状況を打開し得るキーマンが一体誰であるのかを。

(……よし、これしかない！)

僅か数秒の沈黙の後、のび太は決断を下す。

そして視線を——自らの隣に立つ、剣の英霊に向けた。

「セイバー！」

「は、はい！？」

「僕が援護するから、セイバーはアイツと思う存分、戦って！さつきまでアイツと戦ってたの、セイバーなんでしょ？ 僕が到着する寸前に吹っ飛ばされてたみたいだけど」

[.....] ! ! !

「……え！？　そ、そんな！？　さつきは効いたのに、どうして！」

まるであの初撃が嘘のように吹き飛びもしなければグラつきもしない。

“空気砲”の直撃をドテツ腹に受けたにも拘らず、バーサーカーの疾走が止まる事はなかった。

むしろ「そんな物が効くか！」と言わんばかりに、盛大な咆哮を上げながら斧剣を振り上げ、更に疾駆スピードが増す。

「くそっ！ ドッカーーン！ ドッカーーン！！ ドッカーーン！！！！」

目の前で起きた異常事態に目を見開くのび太、動揺を押し殺しながらも再び“空気砲”を、今度は三点バーストでぶっ放す。

だが今度はその空気塊がバーサーカーの身に触れる事すらなかった。

.....-!-!-!

何とバーサーカーは疾走スピードを維持したまま、振り上げた斧剣を縦横無尽に振り回し、猛然と迫る三つの空気塊を悉く切り払った。その常軌を逸した光景に、のび太はただただ啞然とするばかり。

常識の通用しない相手である事は承知していたが、まさかここまでとは思わなかったのだ。

何しろのび太は戦闘開始直前に一度逃げ出したため、直後のサーヴァント同士の死闘を直に見ていない。

実感の欠如、その一点こそが致命的であった。

勢いを駆って僅か数秒で肉薄、その巨大にすぎる斧剣を、のび太達目掛けて振り下ろさんとするバーサーカー。

「ノビタ！ 退がっくう……！ セイバー、飛ぶよ……！」
「え！？」

一瞬の逡巡、のび太は即断する。

そしてセイバーの真横にスッと下がると——セイバーの腰に手を回した。

「と、飛ぶ！？ 一体何の……う、うわああっ！？」

「え！？ の、のび太君が……」

「と、飛んだ！？」

士郎と凜の再びの驚愕。

のび太は大地を蹴り、月の浮かぶ漆黒の夜空へと勢いよく飛翔する。右腕の中に、混乱と動揺の坩堝に叩き込まれたセイバーを抱え込んで。

そしてそれは間一髪之差、スレスレでロープを切られた断頭台の如く振り下ろされた斧剣から逃れる事に成功した。

「——ふうっ、危なかったあゝっ。まったく……こんなのはっかりだよ、もう」

「ノ、ノビタ……空を、空を飛んでいる……！？」

ブチブチと愚痴を漏らすのび太、それに対して絶え間のない驚愕と混乱ですっかりキャラクターの変わってしまったセイバー。

きつと生身で空を飛んだ経験が皆無なのだろう……あの凜々しい姿

がまるで嘘のようだ。

のび太の身体に両腕を回し、決して落ちまいと必死の表情でしがみついている。

普通だったら男として狂喜すべきシチュエーションではあるのだが、生憎今は非常事態、おまけにセイバーの身体は重厚な銀の鎧で覆われている。

気分が高揚するどころの状況ではないし、女性特有の柔らかい感触も何もあつたモノではない。

もつとも、仮に鎧を着ていなくともセイバーの場合、そうは変わらな「——コロシますよ?」……コホン、ともかく。

カタカタカタカタ、とのび太の頭の上で軽い機械音を鳴らす“タケコプター”。

こんなチャチなプロペラ一つで空を飛ぶなど誰が想像出来よう。

想像の斜め上の効果を齎す不可思議かつ不条理な道具、それがひみつ道具の真骨頂。

体勢を整えるバーサーカーを眼下に見下ろしつつ、のび太は再びセイバーを説き伏せにかかる。

「セイバー、もう一回言っけど僕が援護するから、セイバーはアイツに思いっきりぶつかって行って」

「し、しかし貴方が戦うなどと……貴方自身は何の力もない、子供ではないですか！　いくら不可思議な未来の道具を使っているとはいえ、殺し合いの場に立つのは危険すぎる……！」

首を振り、のび太の提案を一蹴するセイバー。

一応“タケコプター”の衝撃からは脱却出来たようで、ある種無茶苦茶な提案に憤りはしていても先程の混乱は微塵も感じられない。

しかしセイバーの反対に対し、のび太は普段ののび太からは想像もつかない不敵な笑みを浮かべて言葉を続ける。

「大丈夫だよ。見たところバーサーカーは飛べないみたいだし、僕は空からこの“空気砲”で援護しかない。それに……僕って射撃だけは得意なんだ」

あとあやとりかな、と銀に輝く左手のそれを持ち上げつつ軽い調子でのたまうのび太。

だがそれとは裏腹に目に宿る光は凄烈そのもの。

ある一線を越えるとのび太は途端に肝が据わり、普段とはうってかわってどんな逆境にも立ち向かう勇氣と度胸を持つ。

今ののび太は己に対する自信と確信に満ち満ちており、歴戦の古強者然とした、ある種の風格すら漂わせていた。

その子供の戯言と切り捨てられるような軽い口調と言葉に、ズシリと重い真実味を持たせるほどに。

「しかし！ それでも「セイバー」……ッ!？」

それを受けて尚抗議しようとするセイバーに対し、のび太はセイバーの深緑の瞳に己が目を向け、名前を呼ぶ。

互いの視線の交錯……それだけでセイバーの声は封殺された。

「僕を——信じて」

決意を秘めた、瞳と言葉。

——ッ！？

その瞬間、セイバーは奇妙な感触に襲われた。

（な、何ですか、この感覚は？）

ザワリ、と全身を駆け巡る、その感覚。

身体の芯が熱くなるような、心の奥にニトロでも放り込まれたかのような、不思議な高揚感が湧き上がる。

いや、それだけではない。

全身に言いようのない力が漲ってくるかのような、熱き血潮の昂り。

（この感じ……！？　まるで自分自身の何かが、吼え狂っているような……！？　いったい私の身に何が起こって……！？）

自らの変化に戸惑うセイバー。

ひみつ道具を持っているとはいえのび太はただの子供であり、魔術師でもなくましてや己のマスターですらない。

だからこそ、自身の身に影響を及ぼす事など出来よう筈がないのだ……　本来ならば。

だが現実として、己の力が荒れ狂い、増加……いや増幅しているのが解る、解ってしまう。

そしてその高揚感は、もしやこのままバーサーカーを打ち倒せるのではないかという、一種過剰なまでの自信をセイバーに与えていた。

（理由は皆目解らない……でも、これなら！）

のび太から片腕を離し、不可視の剣を顕してグッと握り込む。

そのまま眼下のバーサーカーを見下ろしつつ、自らの変化を押し隠し溜息を一つ吐くとセイバーは告げた。

「……まったく、強情ですね、貴方は。……私の負けです、ノビタ。貴方に背中を任せます。ですが、くれぐれも無茶はしないように」

「セイバーもね。武器はあるの？」

「私の剣は不可視の剣……ですから傍目からは視認出来ないのです。見えないでしょうが、もう右手に掴んでいますよ？ それから……既に解っているかと思いますが、バーサーカーのボディに並の攻撃は通用しません。須らく無力化されてしまいます」

「うん、みたいだね。“空気砲”も通じたのは最初だけで、後は効かなくなってたし。……でも大丈夫。僕の役目はあの化け物を倒す事じゃなくて、化け物を倒すセイバーを援護する事だから。それにそれならそれでやりようはあるんだよ？ さっき思いついたんだけどね、具体的には——」

セイバーの耳元にそつと顔を近づけるのび太。

囁かれた内容にほんの少しだけ怪訝な表情を浮かべたセイバーだったが、それも一瞬の事。

のび太の方を振り返ると、揺るぎない瞳で厳かに告げた。

「……信じていますよ？ 子供とはいえ、一人の男として背中を預

けろと言った以上、そして啖呵を切った以上は……責任を持つてく
ださいね？」

「任せて！　じゃ……行くよ！」

顔を見合わせ、頷きあう。

そしてのび太が手を放すと、セイバーは眼下の狂戦士目掛け空から
呐喊していった。

——しかしこの時、当事者であるのび太も、セイバーも、士郎も、
凜も、イリヤスフィールも、況やアーチャーですら気づいていなか
った。

いくら未来で製作された超科学兵器であるひみつ道具とはいえ、神
秘も魔力も宿らぬ“ただの兵器”である事に変わりはない。

サーヴァントを傷付けられるのはサーヴァントの所持する、神秘を内包する『宝具』か、余程の魔力を持つ代物のみ。

だが最初の一撃だけとはいえ、“空気砲”はバーサーカーの身体を傷付けこそしなかったものの、数十メートルの距離を吹き飛ばし得た。

“サーヴァントへの干渉”の前に立ち塞がる絶対的前提を、完全に無視し飛び越えているという、この事実が示すものを。

気づいていたのは——闘争における『本能』で以てその茫漠とした危険性を感じ取る事の出来た狂戦士・バーサーカー。

……そして。

「——はああん、クソガキは援護に回ったか。ま、この戦争のデビュー戦、んであのバケモン相手の立ち回り方としちゃ悪かねえ選択だなあ。さあて、結果はどう転ぶのかねえ——」ケケケケケケ！」

いずこからかこの場の様子を窺っている、この戦争の『闇』だけであった。

第十三話 「宵闇に輝く勇氣（後編 - 2）」（前書き）

何か感想と評価がエライ事に……。

みんなのび太が好きなんですネ……。

第十三話 「宵闇に輝く勇氣（後編・2）」

「嘘……何よこれ……」

狂戦士のマスターである、白の少女はその光景に呆然とした。

あり得ない、こんな事はあるまいと。

頭の中でそんな取りとめのない言葉がただただ堂々巡りする。

しかし目を逸らしたところで、目の前の現実が覆る訳もない。

白の少女は、ただただそれに目を奪われているしかなかった。

――勢いよく噴き上がる鮮血の、鮮やかすぎるそのアカに。

そして己が従者の――に。

「はあっ！！」

[.....] ! ! !

言葉に一層の真実味を持たせていた。

「ク」

昂ぶる闘志を隠しもせず、ニヤリと口の端を吊り上げるセイバー。

セイバーの剣戟は、ほんの僅かの間で確実にワンランク上の威力へと昇華していた。

そのあまりにも唐突すぎるパワーアップぶりに、ここにいる一同は皆ハンマーで後頭部を強打されたかのような衝撃を受けている。

セイバーの劣勢だった鎧迫り合いが、ここに来て五分の状況にまで持ち込まれた。

しかし、五分という事は当然——バーサーカーからの反撃も来る訳で。

[.....] ! ! !

弾かれた斧剣をその膂力で以て強引に軌道修正、そして力強い踏込み。

大気を切り裂かんばかりの勢いで横薙ぎの一閃が放たれる。

当然、それに気づかぬセイバーではない………筈なのだが。

「」

どういつ訳か剣を正眼に構えたまま、ジッとその様子を見据え微動だにしない。

このままでは確実に弾けたザクロだ。

しかし動かない。

その代わりに——唇が、小さく動いた。

——信じていますよ。

『ドッカーーーーン!!!!!!!!!!』

突如空から飛翔してきた空気塊が、空間を滑る斧剣の腹を直撃する。

その衝撃によりバーサーカーの横薙ぎはベクトルを強制変更され地面へとめり込み、轟音と共にセイバーの左真横のアスファルトに、ビシリと亀裂を走らせた。

当然、凶刃は届くどころか掠りもせず、したがってセイバーは無傷である。

空気塊の正体は……語るまでもないだろう。

“空気砲”による、上空からの精密射撃。

そして狙撃手スナイパーはといえばこれまた言わずもがな、

「今だ、セイバー！ 攻撃！」

—— “タケコプター”で滞空している、のび太だ。

“空気砲”を装着した左手に右手を添え、叫ぶ。

“空気砲”の筒の先、銃口からは硝煙のような煙が一筋、ユラユラと立ち上っていた。

「のび太少年……キミは一体、何者だ？」

のび太のバーサーカーへの精密射撃、その一部始終を『鷹の目』で捉えていた男が一人、呆然と呟く。

弓兵のサーヴァントであり凜の相棒、アーチャーだ。

現場から数キロ離れたポイントに陣取り、いつでも狙撃出来るよう弓を構えていたアーチャーであったが、空中でのび太とセイバーの間で交わされた何らかのやりとりからこっち、状況を静観していた。

勿論狙撃姿勢は崩さぬまま。

数キロ先の歩道のタイルも一枚一枚視認出来る『千里眼』で以て、アーチャーは戦況を大局から観察出来る立場にある。

そして一から十まで見ていた。

のび太の、バーサーカーへ放った“空気砲”の一撃を。

その一連の過程すべてを、余すところなくつぶさに。

——鳥肌が立った。

余人にはいざ知らず、末席とはいえ、弓の英霊としてこの場にいるアーチャーには理解出来る。

地上から遠く離れた上空数十メートルの位置に滞空し、神速で薙ぎ払われるバーサーカーの斧剣に直撃させた、その一撃の難解さを。

バーサーカーを狙ったのではない、のび太は明らかに振るわれる斧剣を狙っていた。

（もはや、少年の持つひみつ道具とやらがどうのこうのといったレベルを完全に超越しているな……）

アーチャーは乾いた唇を湿らせながら思う。

アーチャーの認識出来る限りでは、のび太の使用しているひみつ道具は“タケコプター”と“空気砲”のみ（無論、アーチャーは名称など知りはないが）。

“タケコプター”には姿勢制御装置はともかくとして、射撃の補助機能などは一切ない。

“空気砲”に関しても、スコープといった精密射撃補助ツールもなければ自動追尾機能……所謂ホーミング機能も付加されておらず、砲弾である空気塊はただ直進するだけのもの。

つまりのび太は、純粋な自分自身の技量のみで砲弾を斧剣に命中せしめたのだ。

（……異常だ、異常すぎる。何だそれは？ 本当にただの小学五年生の出来得る事か？）

考えてもみて欲しい。

どれだけ射撃の腕に自信があろうとも、時速数百キロで振るわれる斧剣の腹に、ああもタイミングよく砲弾を直撃させる事が果たして可能なのだろうか？

例えるなら、蛇行しながらマッハの最大スピードで稼働する新幹線の窓から身を乗り出して、数百メートル先に立てられた的の中央を銃で撃ち抜くようなものだ。

しかも一発の撃ち漏らしもなく延々と、そして一センチのズレも許されないという極限の縛り付き。

そんなハイレベルな流鏑馬もどきの結果など、実に解りきってしまっている。

不可能だ、そんな事は。

もはやそれは人間業ではない。

仮にそんな事が出来る人間がいたとすればそれは――。

（少年――君の射撃の腕は、英霊の域にまで至れる可能性を持っている）

もしも、本当にもしもの話だが……仮にこの聖杯戦争で彼がサーヴァントとして召喚されるような事があったとすれば、間違いなくアーチャーのサーヴァントとして召喚されただろう。

それほどまでに、のび太の射撃は神懸かっていた。

放つ弾丸の角度と弾速、動く目標の軌道と相対距離、風などの自然条件……それらすべてを理解し数秒先の未来を詳らかにする脊髄反射の高速思考。

諸々の位置関係を瞬時に掌握する高い空間把握能力。

そして自らの判断に躊躇いなくGOサインを下せる、並外れた自身の腕への信頼と勝負度胸。

のび太の力は――間違はなく、本物だった。

事実、のび太をただの子供と見ていた土郎と凜は、鮮やかすぎるのび太の手並に開いた口が塞がっていない。

もともと、それはアーチャーとて認識の上では同じ穴の貉むじなであった訳だが。

「――凜」

「ッ……何よ、アーチャー」

突然のアーチャーからの念話に、凜は少しだけ驚いた。

「見違えたセイバーと少年の支援に見惚れているところ悪いが、ひとつ提案がある」

「……この戦いについての作戦？」

「無論」

「……勝算は？」

「少なくとも、バーサーカーの攻撃力を大幅に削ぐ事が可能だ。あわよくばセイバーがアレを仕留める絶好の機会を作れるかもしれない。今のセイバーならば、ともすればあの怪物の命に刃が届くだろう」

「……詳しく話さない」

「了解だ。といっても実に簡単な事なのだがな。要は――」

そして主従の間で交わされる、作戦会議。

数秒の後。

「……成る程ね、盲点だったわ。それならいけるかも。でも――
出来るの？」

「私の予測が当たっているのならばな。もつとも九分九厘、間違つてはいない筈だ。そうであれば、私と彼なら——可能だ」

溢れんばかりの自信を込めて言い放たれた、アーチャーの言葉。

そう、可能だ。

共に最高且つ極上の狙撃手である、アーチャーと、のび太。
スナイパー

弓と空気の大砲という獲物の違いこそあれど、この二人ならば。

狂戦士の牙を、へし折る事が。

「——、フ」

確信に満ち満ちた弓兵の表情が、獲物を狩らんとする獣のように笑み崩れた。

同時にセイバーの攻撃が悉く防がれている事も如実に表している。

「凜さん！？ 何ですか急に！？ こっちは忙しいんですけど！？」

「いいからそのまま聞くつ！ 今アーチャーをこっちに呼び戻しているから、貴方はそのままアーチャーと合流しなさい！！」

「えっ！？ おじ……じゃなかった、アーチャーさんと！？ どうしてですかぁ！？」

「作戦があるのよ！ 詳しい事はアーチャーから聞きなさい！ 今更だけど、自分からここに飛び込んできた以上、覚悟はいいわね！？」

「ホントに今更ですよ、それ！ それで、アーチャーさんはどこにいるん……ですっ！？」

突如、飛来してきた数条の光芒がバーサーカーに降り注ぐ。

次いで着弾したそれらが次々と爆発を起こし、爆風と閃光がその巨体を覆い隠した。

のび太の声が不自然に途切れたのはそのせいだ。

その隙にセイバーは一旦その場から距離を取り、そして光芒は未だ止む事を知らない。

流星群の如き光のシャワーが雨霰とバーサーカーを飲み込み、遂には衝撃波と爆炎がキノコ雲を作り上げた。

「り、凜さん……まさか、こ、これってアーチャーさんが……!?」

「そのまさかよ！ 矢が来た方向は解るわね!? 距離はそうない筈だから、今のうちにさっさと行きなさい!! ……ちょっと、いつまで固まってるの!? 時間がないのよ、グズグズしてないでとっと行く!! バーサーカーがあ程度のくたばるタマかつ!!」

「はっ、はいっ!?!」

爆発の光景に気を取られ、放心していたのび太だったがその様に焦れた凜の一喝でビクツと身を竦ませ、慌てて矢の来た方向へと飛翔する。

勿論バーサーカーの方へ“空気砲”の筒先を向けるのも忘れずに。

「来たか、少年」

「おじさ……じゃない、アーチャーさ……っ て、ええっ!？」

現場からそう遠くない位置に、弓兵はいた。

幅の狭い電信柱の上に直立し、黒塗りの西洋弓を構えている。

のび太はどうしてそんなところで弓を構えていられるのかと目を見張ったが、サーヴァントの異常さは今更であるしそれよりも優先すべき事があったため、すぐさま気を取り直すとそのままアーチャーのすぐ横に滞空状態で並んだ。

「何に驚いたのかは知らんし、状況が状況故にあえて何も聞かんが……これから行つ作戰に君の力が必要なのでな。すまんが力を貸してくれるか？」

「それは別にいいですけど……僕はどうすればいいんですか？」

「基本的には先程まで君がやっていた事と同じ事だ。正直、君の射撃には度肝を抜かれたが……いや、それはいい。とにかく、君は私が矢を放った直後にその空気の大砲をバーサーカーの斧剣に命中させてほしい」

「アーチャーさんの矢の後に……？」

その真意が理解出来ず、のび太は首を傾げる。

だが「いずれ解る」と既に矢を番えているアーチャーに言われ、疑問符を頭に浮かべたまま“空気砲”を構えた。

“空気砲”の射程ギリギリのこの位置、難易度は先程の比ではない。更に今度はアーチャーの射の直後に斧剣に命中させろという、縛りがついている。

そのおかげで最早神業レベルの技量を要求されてしまっている……のだが、のび太の目は揺らがない。

のび太の射撃に対する自負はそんなレベルの難易度で投げ出したくなるような、軟な代物ではない。

「私の矢では構造上、面制圧には向かんでな……それに威力も僅かに足りん。加えて、今はまだ僅かの手の内も晒したくはない」

第十四話 「宵闇に輝く勇氣（後編・3）」

「いいか、タイミングを合わせろ、少年！」

「はっ、はい！」

ギリギリと弓を引き絞る音。

今だ荒れ狂う爆炎から抜け出てきたバーサーカーをセイバーは強襲する。

だがそれを予想していたかのようにバーサーカーは斧剣を振るい、突き出された剣を弾く。

「ちっ！」

セイバーは小柄さを生かし、すぐさま体勢を整え直すとバーサーカーを上回るスピードで再び仕掛ける。

しかしバーサーカーは無理に反撃に出ようとせず、ほんの一步身を引くと片足を軸に前方へ向かって猛烈な薙ぎ払いを放った。

決して覆す事の出来ないバーサーカーの優位性、あり得ない程の質量差を生かした防御方法。

如何に力が増したセイバーとはいえ、これを貰えばひとたまりもない。

やむなく攻撃を中断し、セイバーはバーサーカーの間合いから離れて下段に構え、機を窺う。

そして攻撃から防御優先に意識をシフトし始めたバーサーカー。

片手で斧剣を中段に構え、こちらまでセイバーの様子をジッと窺っている。

張りつめた糸のような緊張状態。

互いに力量が互角だと理解しているからこそその、この睨み合いの状況。

——そこにつけ入らない理由はなかった。

「……疾ッ！」

「ドッカー——ン！」

その二つの音速の弾丸は、前方に突き出されていたバーサーカーの斧剣の腹側に、見事に命中した。

[.....] ! ! !

まさに絶妙のタイミングだった。

斧剣に二度の……いや、二重の衝撃を受けたバーサーカーは堪らない。

斧剣を掴んでいた右腕が外側に大きく吹き飛ばされ、無防備な身体を思ふさまセイバーに晒すような格好になってしまう。

「もらった……ッ、え!？」

その隙を逃すまいと一步を踏み出そうとしたセイバーだったが、バーサーカーの取った行動に動きを止められた。

バーサーカーは衝撃を受けた勢いそのまま、右足を軸にその場でグルリと身体を回転させ、衝撃を逃がしつつ再度防御体勢を整えたのだ。

その動きは、今までのバーサーカーらしからぬものだった。

金剛力に物を言わせ、全てを力任せに打ち砕いてゆく『剛』の戦い方ではない。

相手から受ける力をも利用し小器用に、だが的確に立ち振る舞う『柔』の戦い方。

「……手強くなりましたね」

理性を失って尚戦いのレベルを一つ上げたバーサーカー。

乾いた唇を舌で湿らせつつ、セイバーは唸るように呟いた。

「……手強くなったな」

その感想は、赤い弓兵にとっても同じであった。

……しかし、違う点がたった一つ。

「だが、おそらくあと一発か。如何に神秘の籠った頑強な代物だとはいえ、鏑迫り合いで大分消耗していたのだろうな。好都合だ」

「あと一発？ あの、何の事ですか？」

『射礼八節』の最後の項、“残心”。

矢を放ち終えた姿勢を崩さぬまま、鷹のような鋭い目でバーサーカーを見ていたアーチャーの呟きに、隣ののび太は首を傾げた。

アーチャーの視線の先には、刀身の半ばに深々と矢の突き刺さった

斧剣がある。

まるで楔のように突き立つそれ……“空気砲”の圧力に押され、岩で出来た斧剣の柄側刀身ド真ん中を見事に貫通している。

「……少年、君はバーサーカーの剣に私の矢が突き刺さっているのは見えるか？」

「えっ……と、あ、はい一応は。月が出てますし、何とか」

眼鏡の奥の目を細めて答えるのび太。

アーチャーのように『千里眼』を持っていないのび太ではあるが、月明かりがあつて尚且つ夜闇に慣れたのび太の目には、およそ二百メートルは離れた現場がどうにか見えていた。

だからこそバーサーカーの斧剣を狙えた訳なのだが、のび太は肝心のアーチャーの意図が未だに解らないでいた。

「私の矢を楔、君の大砲を金槌と置き換えてみたまえ。それで解る筈だ」

「クサビ、と金槌……？ え？ あの、クサビって何ですか？」

ズルツ、と電柱から片足を滑らせるアーチャー。

慌てて落ちそうになる身体を立て直し、再びバランスよく直立体勢をとると呆れたようにフウ、と溜息を一つ漏らした。

「……そこからののか。そういえば君はまだ小学生だったな」

「あ、あの……その、ごめんなさい。何も知らなくて」

「いや、謝られても困るのだが……何やら君を苛めているような気分になってしまう」

シヨンボリと呟くのび太に対し、アーチャーはバツが悪そうに顔を顰める。

小学生の物の知らなさをあげつらって悦に入るなど英霊として……いや、彼自身の性格からして決して許される事ではない。

たとえのび太があまりに無知で無学で無教養で学力レベルが残念すぎるという、動かしがたい純然たる事実があつたとしてもだ。

「うるさいなあ！ 人が気にしてる事を、言い方を変えて何回も言うなバカ作者！！」

「むッ!? な、何だ? いきなりどうした?」

「え!?! あ、いやあの…… な、何でもないですよ、エヘッ、エヘへ……」

いきなり虚空に向かって怒鳴りだしたのび太にアーチャーは面食らうが、のび太は誤魔化し笑いでお茶を濁すだけ。

なんかどこかで見たような光景だが、この非常時に電波で遊んでいる暇などある筈もないと解っているのかこのふた「誰のせいだよ、誰の!?!」……ヘーヘー、どーも悪うござんしたあ。

間に漂う微妙な気まずさも無理矢理軌道修正。

すぐに二人とも意識を切り替えると、気持ち急ぎ足に言葉を交わす。

「つまりだ、君はハンマーで私の置いた釘をバーサーカーの剣に突き立てた。そして、石に切れ目を入れるにはもう一か所……あとは解るな?」

「んん?? えーと……っあ!」

「「そ、そういう事かあ!!」「」

二人分の「物凄く納得がいった」というような声が、月の佇む漆黒の夜空に吸い込まれた。

一人はのび太のもの。

そしてもう一つは……。

「そういう事よ……まったく、じつと観察していたのに気づかないなんて、士郎も大概ね。小学生ののび太並なんじゃないの？ アナタのおツム」

「うぐ……っそ、そこまで言う事ないだろ、まったく……」

しかめっ面で、だが力なく凜に言い返している士郎。

そう、もう一つの声はこの男だった。

凜がポツリと漏らした「アーチャーの作戦」という言葉に興味をひかれ、凜に尋ねてみたところ、

「見てれば解るわ」

と言われたのでジッと事態の推移を観察していたのだが、

「……………?？」

首を傾げるアホの子よろしく、士郎は見事に皆目解らなかった。

その様子を察した凜が呆れを堪えながら答えを開示すると、まさに目からウロコといったように手をポンと打って納得の声を上げたのだった。

そんな士郎へ対する凜の辛辣な言葉は心底からのもので、士郎の心は鋭利な言葉の刃で容赦なく刺し貫かれていく。

「……………」のへっぽい」

「ぐはっ！…！」

それはもうグサグサと。

いつそ清々しいほどのメツタ刺しである。

さながら某樽にナイフを次々突き刺していく、黒いヒゲのゲームの如く。

……だがそんな軽いやり取りとは裏腹に、二人の目は眼前の攻防に釘付けになっている。

セイバーとバーサーカー。

互いに獲物を構えたまま、ピクリとも動かない……いや、動けないのだ。

現状、セイバーとバーサーカーの地力は諸々の要素を鑑みてまさに伯仲している。

そんな状況下で迂闊に仕掛けようものなら、仕掛けた自らの死を以て勝負の幕があっさりと下りてしまう。

だからこそ、互いに微動だにせず機先を制し合っているのだ。

そしてそれが故にバーサーカーは、彼方の狙撃手達スナイパーをどうする事も出来ない。

そちらに意識を割いてしまえばたちまち窮地に追いやられてしまう以上、捨てて置くしか選択肢は存在しない。

それに狙撃手達スナイパーの攻撃は、振るう斧剣の軌道を強制変更させ得るほどの精密性と威力を備えてこそいるものの、その頑健な肉体に傷を付けるには如何せん火力不足である。

当然、バーサーカーはそれを迎撃にかかる。

機先を取られたとはいえ、守勢を維持する事に重点を割いた以上、対応出来ない事などない。

すぐさま右手の斧剣を振り翳し、迫る刃を叩き潰しに掛かる――が。

「……これで終わりだ！」

「ドッカーーーーン！」

またしても唸りを上げて襲い来る、二筋の流星。

当然、それに対してバーサーカーは迎撃も防御も行う事は出来ない。今意識をそちらに移してしまえば、接近するセイバーに決定的なチャンスを与えてしまう事になる。

堅牢な肉体を頼みに凶弾の対処に移る事も可能といえば可能だが、

セイバーの太刀を喰らって尚肉体が傷を負わないという保証は既にどこにもない。

セイバーの力が上がっている事はこの場の誰もが認識している事、打ち合いのパワーにおいて今やセイバーはバーサーカーと拮抗している。

下手をすればバーサーカーの上半身と下半身は一刀の下に泣き別れだ。

バーサーカーはその事を『戦士の本能』で察している……故にそちらに意識を割くという選択肢はこの狂戦士にはない。

「アーチャー、のび太、ナイスタイミング！ ……これで！」

「——いける！」

結果、徹甲弾の直撃でも受けたかの如き衝撃が斧剣を襲い、次いで鋭利な鉄の楔が圧縮空気の破城鎚で深々と打ち込まれる。

指を鳴らす凜と片手でガッツポーズをする土郎の視線の先には、柄よりやや上の細い刀身部分に二本の矢が見事に喰い込んだ、狂戦士の斧剣。

そして彼方のアーチャーは『千里眼』で以てその様子を確認するや刹那の間も置かず、最後の仕上げに取り掛かった。

ブローケン・ファンタズム
壊れた幻想」

[.....] ! ! !

爆發。

バーサーカーの右手の斧剣から突如爆炎と閃光が迸り、次いで一拍遅れてバーサーカーの足元でドズウンツ、と重たげな音が響く。

アスファルトを砕き、深々と突き立ったそれは――。

「よし！武器破壊成功ね！！」

根元からへし折られた、バーサーカーの斧剣だった。

「今だ、セイバー！ 行けえ！！」

武器破壊。

詰まるところ、アーチャーの立てた作戦はそれだった。

確かにアーチャーの矢ではバーサーカーに傷を付けられない。

だがバーサーカーの持つ斧剣に関してだけはきつと違う。

アーチャーはその仮定を基に作戦を考案、念話で凜に作戦を伝え見事に狙い通りの結果を実現させた。

作戦のヒントとなったのは、のび太がバーサーカーの斧剣目掛けて放った“空気砲”の一撃。

バーサーカーのボディはあの超圧縮空気の圧力を受けて揺るぎもしなかった……にも拘らず、斧剣に当たった時だけはあっさりと弾き飛ばされていた。

しかも何度もだ——この事実が示すもの、それはつまり……。

（——バーサーカーのボディ……おそらく何らかの加護がある……はある一定の威力以下の、もしくは一度喰らった攻撃を無力化する。……だがそれは、あの岩の剣に関しては適用されていないという事だ！）

果たして結果はご覧の通り。

無残に粉碎され、アスファルトの地面に亀裂を走らせている岩の刀身が、それが正解であると如実に物語っている。

バーサーカーの数少ないウィークポイント……それは手数少なさ。

その比類なき臂力を生かし、獲物である大岩の斧剣を振り回してセイバーと鎬を削っていたバーサーカーであったが、ここに来て唯一無二の武器を失ってしまった。

迎撃姿勢を矢と“空気砲”の衝撃で完全に崩され、しかも武器まで破壊されてしまったのはもはや堀のない裸城同然。

決定的な、好機。

「——ああああああっ！！」

駆けるセイバーの周囲が、唐突に陽炎のように揺らめき始める。

セイバーの持つスキル、『魔力放出』。

ジェット推進機関のように高圧縮の魔力を身体から放出する事で瞬間的に、だが爆発的に己が力を上昇させるこのスキル。

絶好の好機が到来したこの瞬間を逃すまいと、セイバーは切り札の一枚を迷わず切った。

身体中で猛り狂う魔力をブースターに、セイバーは一気に狂戦士へと間合いを詰める。

そして完全にバーサーカーの間合いを侵し切り、刃を鋼の肉体へと振り下ろそうとしたその瞬間。

「体当たり！？ いえ、呐喊！！」

「クッ……詰めが甘かったか！」

「まさか捨て身かよ！ セイバー！！」

『死中に活あり』。

あろう事がバーサーカーは役立たずと化した斧剣を即座に投げ捨て、
全体重を乗せて前に踏み出してきたのだ。

手に武器がなければ、己が身体を武器とするのみ。

身の危険を顧みず、両の手を握り込み鋼の拳へと変貌させ、セイバ
ーの華奢な身体を砕かんとする。

バーサーカーは薄々とだか気づいていたのだ。

アーチャーとのび太のコンビが放っていた攻撃が、一体何を狙ったのかを。

バーサーカーはアーチャー・のび太を優先順位から捨ててかかっていたが、されど決して油断はしていなかった。

既に予兆はあったのだ。

幾度目かのび太に斧剣を逸らされた時、バーサーカーは躊躇いなく斧剣を掴む手とは逆の腕で反撃を行っていた。

明らかに斧剣を失った状況を予期しての動きである……流石にこれはアーチャーの失点と言わざるを得ない。

結果として、バーサーカーは一か八かのクロスカウンターを敢行。

そして相手が攻撃に移るその瞬間こそが、カウンターが最も威力を発揮する局面なのである。

「——くっ！」

歯噛みするセイバー。

もう躲せない、捌けない、防げない。

ライフルから発射された弾丸が、決して進路を変える事が出来ないように。

己の頭蓋がザクロのように弾け飛ぶ、そのビジョンが脳裏を掠める。体勢は既に攻撃段階、今更防御や回避に切り替えられる余裕など残されていない。

そして今まさにセイバーの側頭部にその凶悪なハンマーを叩き付けんと――。

「セイバーッ!? ……ええいつ、間に合えええええっ!!」

——したところで突如、バーサーカーの動きが止まった。

「
「
「
「
……え？
「
「
「

「——はああああああっ！！！！！！！！」

瞬時に足の裏に魔力を圧縮、そして起爆。

体勢を低くし、その推進力で以てセイバーはバーサーカーの剛腕を紙一重で掻い潜る。

カウンターという技術は決まれば強いが、逆に不発に終わればその瞬間、致命的な隙が生まれてしまう。

まさに諸刃の業なのだ。

尋常でない拳圧を全身で感じながらも、セイバーは大岩のようなバーサーカーの身体を踏み台に駆け上っていく。

そして頭頂部……バーサーカーの頭の高さまで身体を浮かせたその時、セイバーは見た。

バーサーカーの向こう側、距離にしておよそ百メートルは離れたその位置に。

(……やはり、貴方だったのですか)

知らず、セイバーの唇が半月状に吊り上がる。

セイバーの視線の先にいた者、それは……。

(咄嗟に出た、刹那の早撃ち……ですか。まったく、これではどちらが英雄か解りませんね……ノビタ)

——右腰の“ショックガン”を抜き放ったまま滞空する、のび太の姿であつた。

その表情は焦りのためか蒼白に染まり、だがそれでいながらどこかしら安堵の笑みを浮かべている。

最初の読みの通り威力が足りず、ほんの一瞬だけしかバーサーカーに通用しなかったものの、“ショックガン”はここ一番で見事大仕事を果たしてくれた。

「——せいっ!!」

そして一撃。

バーサーカーに向けて不可視の剣が振るわれる。

その一閃はあやまたずバーサーカーの首元に吸い込まれ……。

—— 夥しいほどの赤い鮮血と共に、その首を中空に刎ね飛ばし
しせしめた。

「おーおー、ド派手なこつて。あのバケモンを斬首刑かよ。ケケ、実質三人がかりとはいえ、やるじゃねえか。けどま、あのバケモンがこれで終わりたあ思えねえけどなあ……あん？ ツ、クハッ！ おいおい、あのクソガキ生首見て気絶しちまいやがったよ！ やっぱ根本はヘタレだね、あのガキは……ま、お子様には刺激の強すぎる光景だわなあ、ヒヒヒヒ……！」

『ケツケツケツケ！』と心底面白そうな嗤いが暗闇に響き渡る。

だがそれも束の間。

ピタリと嗤い声が止み、今度は幾分か落ち着いたような低い声に変わった。

「……さて、締めが気になるが見物はここまでにしとくか。宿題は早めに片づける、ってね。……とりあえず、今日はあのクソムシだな。放つとくとイロイロとメンドくせえからなあ、あのヤローは……ま！ さつさと引導を渡しに行つてやるとしますかねえ！ ケーッケーッケーッケーッ！！！」

まさしく狂ったかのような哄笑。

その狂気を合図に、この戦争の闇はその在り様よろしく、文字通り闇に溶けるようにこの場から退場した。

——漆黒の空の中天で、月が燦然と輝いていた。

第十四話 「宵闇に輝く勇氣（後編 - 3）」（後書き）

これで序章は終わりです。

ここから本格的に“ のび太の ” 聖杯戦争がはじまります。

……しかし重大な問題がひとつ。

話数のストックがもうない……！！

閑話 「跳梁跋扈」(前書き)

なんかお気に入りと評価がこの短期間でエライことになってるのですが…… いったいなにが起きているのでしょうか(汗)。もう一方の作品を完全に抜いちゃってますし……。

勢いに押されて更新します。この回で丁度話の区切りがつくので。

尚、完全に超展開です。

閑話 「跳梁跋扈」

「よおジジイ、お楽しみのところワリイんだけどよお……さっさとこの世から消えてくんねえか？」

薄暗い……いや、文字通り闇に染まった石造りの地下室。

中には独特の湿っぽい空気、そして鼻が曲がりそうな凄まじい臭気が漂っている。

死体でも腐っているかのような、それはもう凄絶な腐乱臭。

一般人なら即座に鼻をつまみ、嫌な予感に苛まれ脱兎の如くそこから退避するだろう。

だがソレだけは違った。

鼻を覆う様子もなく超然と石畳の上に佇み、拳句嘲り笑いを浮かべ不遜な言葉を闇に向かって投げかける。

いったいどんな神経をしているのか……決してまともなものではないだろう。

あるいは、これこそがソレにとっての『正常』なのかもしれないが。

「——カカ、イキナリ失礼じゃの又シは？ 最近の若者は他人の家の尋ね方も知らんのか？」

もう一つ、今度はしゃがれた低い声が闇の石室に木霊する。

まるで百を超えた老人のような声……この地下室の異様な雰囲気と相まって壮絶な怖気を誘われる。

だがソレはまるで怯えた様子を見せず、むしろ愉快そうにニタリ、と凄絶で凶悪な笑みを浮かべた。

「あん？ 知るかなんモン。第一こんな地下室に玄関なんてあるわきゃねえだろうが。で、返事は？ 『はい』か？ 『Yes』か？」

あくまで挑発する姿勢を崩さない、どこまでも傲岸不遜な言動。

哄笑を浮かべ続けるソレに対し、しゃがれ声は今度は震えるような
嗤い声を漏らす。

「クカカカ！ 遠慮のない物の言いようじゃの、若いの……ま、姿
を隠したままなのも何じゃ。ひとつ顔を合わせて話すしよつかの」

「オレはさして見たかねえんだけどなあ、テメエの小汚えツラなん
ざ。まあ折角こんな薄汚えトコまで来たんだ、好きにしゃがれ」

そしてその言葉を合図として闇の中からユラリと、一人の小柄な老
人が浮かび上がってきた。

杖をつき、着物を身に纏ったこぢんまりとした体躯。

それだけならまだ普通の老爺なのだが、しかし明らかにこの老人は
異様であつた。

落ち窪んだ両の目。

光を宿さぬ濁りきった瞳。

髪も髭も、眉すら一筋もない、まるで骸骨のような顔つき。

そして何よりその全身に纏った、不吉な気配。

老人の姿をしたナニカが、そこにいた。

「さて妖怪ジジイ、返事はどうした？」

「カカ、言うまでもなからうて。何故儂が死んでやらねばならん？」

「こっちの面倒事が減る。それにいたらいたでオレの宿題をポンポン増やしてくれそうだからな、テメエは」

「ふむ、随分と自己中心的な理由じゃの」

「人の事が言えたクチかよ。数百年ムリヤリ生きてきたせいで耄碌してんじゃねえかジジイ？ 完全にボケて醜態晒す前にとつと地獄へ行つてきやがれ」

六文銭は自腹でな、と挑発に挑発を重ねるソレ。

対して老人は終始笑みを浮かべてそれらを受け流している。

だがこの老人の嗤い顔など不気味以外の何物でもない。

どこその眼鏡の小学生が見れば一発で逃げ出してしまうだろう……涙目で。

「……そういえば、まだヌシの名前を聞いておらんのだのう？」

「それこそどうでもいいんだよ、クサレジジイが。テメエは今この時、ここで死ぬ。それは決定事項だ。オレの名前なんざ聞いたところで大した意味はねえんだよ。第一もつたいねえしな。という訳で、さっさと死ぬかくたばるかしろ」

一刀両断。

老人の要求をバツサリと斬って捨てると、老人に向かって最後通牒を突き付ける。

「……フン」

と、その時老人の目が怪しく輝く。

そして右手にしていた杖を持ち上げ、カツンと床を軽く鳴らした。

「……あん？」

首を傾げるソレ。

だがその一瞬の後、なんとも怖気を誘う光景がその場に出来上がっていた。

「おお、シュミのワリイこつて。だからテメエは気にいらねえんだよなあ。まさに『ムシが好かねえ』っての？ ケケケケケー！」

蟲、蟲、蟲。

数えるのも億劫なほどの大量の蟲が、老人の周囲に広がっていた。

だがその蟲はただの蟲ではない。

『刻印虫』と呼ばれる、人間を喰らって己が血肉とする外道魔術の蟲なのである。

そしてその見た目はまるで男性器のよう……女性やお子様には間違っても見せられない。

「生憎と、僕はまだ死ぬ訳にはいかんのでな。蟲どもは女が好みなんじゃが、この際はヌシでも構わんじやろう。何者かは知らんが、存外に力があるようじゃしの」

ザザザザ、とさざ波のように蟲がざわめいたかと思うと、今度はあっという間にソレの周囲を隙間なく取り囲む。

数の暴力。

如何に親指大の小さな蟲とはいえ、それが何百何千と集まればそれだけでかなりの脅威となりうる。

老人の自信はこの数の優位性から来ていた。

「ハッ、これが回答って事かよ。まあ予想してたけどなあ——
だが蟲ジジイよお。いくらなんでもナメすぎじゃねえか？　こんな
クソムシどもの栄養になっちまうほど、オレは弱かあねえぞお？」

嘲笑う、嘲笑う。

これでもかとはかりに嘲笑う。

狂気の嗤いを顔に貼り付け、老人の浅慮を嘲笑う。

「それになあ……」

「——カカツ」

カツン、と響く杖の音。

それを合図に数百匹はあろうかという『刻印虫』がソレ目掛けて飛
びかかる。

砂糖に群がるアリの大群のように。

——だが。

「――オレが手ぶらで来るとでも思ってたのか？」

瞬間、飛びかかった全ての蟲が真つ二つに切り裂かれ、冷たい石の床へベチャベチャと臭気漂う体液を撒き散らした。

「ぬ!？」

一瞬瞠目する老人。

その視線は無残に切り刻まれた蟲ではなく。

――徒手であつた筈のソレの右手に握られた、一振りの日本刀に注がれていた。

「あん？ 何だジジイ。斬られたクソムシよりコイツがそんなに気になるかよ？ まあ、コイツはオレの本来の獲物じゃあねえんだが、なかなかに使え勝手がよくてよお。なんせオレみたいな剣の素人がただ振ったって、百戦錬磨の達人と渡り合えるってバケモン刀だからなあ。ケケケ……」

一歩踏み出し、右手の刀を血振りの要領で軽く一閃。

足元でグチャグチャと、粘性のある何かが潰れる音が響き周囲に反響する。

まさにおぞましい事この上ない光景。

だがソレは眉を顰める事もなく『刻印虫だったモノ』を踏み潰しながら、クツクツと心底楽しげに咽喉を鳴らして嗤う。

「ヌシは……もしや、サーヴァントか？」

「だゝいせゝいかゝい……って言いてえところだけとちよつと違うんだな、これが。でも教えてやらねえよ。これからくたばるヤツに説明しても無駄だからな」

「ホッ……言いおるわ、御主人様マスターの飼いだ風情が」

再び響く、杖の音。

今度は先程の倍の量の『刻印虫』が襲い掛かってくる。

ソレの前方、後方、左右から迫る様は、さながら津波のようだ。

「ちつ……メンドくせえ。やっぱり最初からコレ使っとくべきだったかあ。遊びがすぎちまったぜ。ま、わざわざこんな魔窟くんたりまで来てる事自体お遊びみたいなモンだけだよ」

反省反省、とまるで反省してそうもないような軽い口調で呟くと右手の刀を肩に担ぎ、徐に左手をグツと握り込む。

そして視線を上げ、冷めた目で眼前の蟲の大群を見やり静かに告げた。

「——消えな、クソムシども」

カチリ、とソレの握り締めた手の中で軽い音が鳴る。

その一瞬の後、圧倒的物量を以てソレを包囲していた『刻印虫』が一匹残らず、ソレの周囲から忽然と消え去った。

「ぬうつ！？……又シ、一体何をした！？」

またしても起こった予想外の出来事に、遂に老人の表情から余裕が消え失せた。

疑問と焦燥、驚愕と……そしてほんの僅かの恐怖。

初手は頼みとしていた蟲を日本刀で細切れにされ、今度は武器すらも一切触れる事なく蟲の存在を、まるで霞のように綺麗さっぱりと消し去られたのだ。

老獺にすぎる老人の鉄面皮が剥がれ落ち始めたのも、無理からぬ事と言えなくもない。

「何をも何も、見て解んねえかジジイ？ 鬱陶しかったからクソムシどもを消したんだよ。ここに来て遂にボケが始まったか？」

「消した……じゃと！？」

「だからそう言ってんだろ。繰り返し言わせんなよボケジジイ」

「バ、バ力な……何故そんな事がおヌシに出来る!？」

「ああん? ……ハン、まあそれぐらいならいいか。ケケケケ、種はコイツだよ」

薄ら嗤いを浮かべながら、ソレは左手の中にあつたモノをポンポンと放り投げて弄ぶ。

狼狽を露わにした老人の目がそれを捉えると、更に疑問に包まれたような表情になった。

「それは……」

「コイツもまあ借りモンなんだけどなあ、なんかオレの色に染まっちゃまったのよ。だから機能の多少の改竄は出来るワケ。本来ならコイツで消された対象は消した本人……つまりオレ以外は覚えてねえ筈なんだが、なんか勿体ねえしよ。折角だから覚えていられるようにしたってこつた。ついでに言やあ消されたら二度と戻って来る事はねえぞ?」

「う……ぬ?」

朗々と語る目の前のソレの言葉に、老人の疑問は増すばかり。

話の内容に脈絡がないため、ソレが何を言っているのかさっぱり理解が追いつかないのだ。

だがそんな様子を知ってか知らずか、ソレは唐突に説明を打ち切る。

「さて、質問には答えたやったぜ。オレって親切だろ？ まあ、テムエが理解出来たかどうかは知らねえけどなあ、ヒヤハハハ！
…さあて、いい加減冥土へ旅立つ覚悟は出来たか？」

「……ぬうう」

グチャリ、グチャリと刀で捌かれた『刻印虫』の死骸を踏み越え、ソレは老人へとゆっくりゆっくり迫っていく。

その表情は嗜虐心がこれでもかといかに溢れる、どこまでも暗い嗤い顔。

見る者に狂気と絶望を抱かせる、どす黒い瘴気を華奢な全身から迸らせ。

漆黒よりもなお深く、果てしなく黒く濁りし双眸から放たれる異常な威圧感、老人のその比では断じてない。

——右手に『白刃』を、左手に『絶対抹消の理』を携え、この戦争の『闇』は聖杯戦争を興せし『御三家』の当主の……間桐臓硯を、この戦争からデリートしにかかる。

「僕は……僕はまだ死ぬ訳にはいかん！　いかなのだ！！　聖杯をこの手にするまで、死ぬ訳には……！」

老人……間桐臓硯がカツと目を見開き、叫ぶ。

それを合図に再び『刻印虫』が地下室の奥からわんさと湧き出し、ガサガサと蠢きながら臓硯の周りに集い始めた。

この自分以上のバケモノに目を付けられた……仮にこの場から逃げおおせても、このバケモノは自分を闇に葬るまでどこまでも追いかけてくる。

ならばこの場で何が何でも消すしかない、臓硯は焦燥の中でも冷静に判断していた。

そしてその判断はどこまでも正しい。

「クハッ！ まだそんなに残ってやがったか！ まあ抹消デリートの対象はオレの周りにいたクソムシもただだったからなあ。あぶれたヤツらがいるのも当然か！」

足の下の『刻印虫だったモノ』をビチャリと蹴り上げ、ソレ……この戦争の『闇』は嗤いながら担いでいた白刃を構える。

その一方で左手を握り締め、新たに湧き出した数百匹の『刻印虫』と臓硯を諸共に消し去ろうとするが、

「クカカ！ させはせんぞ、若いの！」

それより一瞬早く、臓硯が『刻印虫』を『闇』目掛けて一斉にけしかけた。

「ちっ！ ……だが、無駄無駄ムダムダむだあ！！ ヒィアアアアアハハハハハハ！！！」

斬る、斬る、斬る、斬る、斬る。

右手の白刃が閃き、雪崩のように押し寄せる『刻印虫』を一匹一匹、あるいは数匹纏めて確実に屠っていく。

もはや刃の動きは肉眼で追う事は不可能。

刃が大気を切り裂く音だけが、刀が振られているのだという事を示す唯一の証明となっている。

神速の太刀捌きで以て生み出される『闇』の前面の空白地帯は、さながら『剣の結界』だ。

細切れにされた『刻印虫』のなれの果てが、汚物の雨となってグチャグチャと石畳に水溜りならぬ肉溜りを作り上げていく。

「ハハハハハハ—— ああん？ あのジジイ、どこ行きやがった？」

『刻印虫』の虐殺に精を出していた『闇』であつたが、ふと視界の中からいつの間にか臓硯が消えている事に気づき、僅かに首を傾げた。

ついさっきまで視界の片隅に捉えていたのである。

その時の表情は、『闇』をして思わず腹を抱えて嗤い出したくなるような、それはそれは悲壮感漂うものだった。

しかし、いない。

「クソムシどもを囿に逃げ出したか……？ いや、あの表情を見る限りじゃその可能性は低い。ってえ事は、だ……」

ニタァ、と『闇』の表情が歪む。

「——死角からの強襲か」

そう呟いた次の瞬間、『闇』の背後と頭上から大量の蟲が躍りかかって来た。

さっきの攻防では正面からしか来なかったため、後背と頭上に隙が生じていたのだ。

『カアアアアアア……!!』

臓硯は五百年の時を生きてきた魔術師である。

だがヒトの身ではせいぜい百年程度しか生きられない。

そのため臓硯は遙か昔にヒトである事を止め、己が肉体の在り様を変貌させた。

『刻印虫』が喰らう人間の血肉を己が肉体として蟲諸共再構成し、

常時肉体を新しい物へと再生させる。

そうして臓硯はヒトではなく『刻印虫』の群体として、五百年の歳月を生き永らえていたのである。

故に臓硯は『刻印虫』を目晦ましにしつつ己が肉体を夥しい数の『刻印虫』へと戻し、『闇』が襲い掛かる『刻印虫』を屠っている隙にそれとなく『刻印虫』の群れに己を紛れ込ませ、素早く死角へと回り込んだ。

ある意味では『肉を切らせて骨を断つ』戦法。

己が眷属である『刻印虫』を犠牲にし、乾坤一擲の奇襲で以て捕食、目の前の脅威を葬り去る。

その目論見通り、臓硯は死角から『闇』へ喰らいつかと仕掛けた……が。

「目の付け所は良かったが……生憎だったなあ。コイツは自動追尾なんだよ、しかも前後左右関係なしになあ！」

『闇』は振り返りもせず、頭上を仰ぎもせずただ出鱈目に白刃を振るう。

その斬撃は前面後背上下左右、三百六十度すべての間合いをカバーしきっていた。

——『闇』の意図するしないに拘らず、白刃は縦横無尽に襲い来

るそのすべてを切り裂き、薙ぎ払い、突き穿つ。

まるでそのすべてが見えているかのように、まるで刀自体に意思があるかのように。

果たして刀を振るっているのか刀に振り回されているのか……もはやその真実は担い手にしか解らない。

『グオツ！？』

眷属諸共に屠られる『肉体』。

対処など不可能と思っていた筈のものがひっくり返され、瞬く間に『刻印虫』の数が減らされていく。

既に半数近くがああ白刃の餌食となり、このままでは臓硯の肉体の構成にも支障が生じるレベルにまで陥ってしまう。

そうなる前に、臓硯は一旦身を引いた。

「ぬ……ぐう！」

『闇』から幾分離れた場所で、臓硯は歯軋りしながらけしかけていた『刻印虫』を寄せ集め、ズブズブと肉体の再構成を開始する。

だがそれは下策も下策。

必要に迫られていたとはいえ、臓硯の選択は単に『闇』に十分すぎる好機を与えただけにすぎなかった。

「おいおいジジイよお。オレから距離取っていいのかよ？ テメエ、コイツの存在を忘れてんじゃねえか？ やっぱもう耄碌してやがんな、ケケ！」

溜息交じりに言い放ち、臓硯に向かって左手を開く『闇』。

掌の上には、何かのスイッチのような物が一つ存在していた。

そして狂笑のまま刀を一振りし、こびりついた蟲の血肉を振り落とすとグツと左手を閉じる。

「カツ！？ 待……ッ、てやらねえ。ケケケ、あばよクソジジイ。この地下の全クソムシ諸共、とっとオレの目の前から失せやがれ」
「ガアアアア！！」

カチリ、と乾いた音が手の中で鳴る。

絶望の叫びの余韻だけを残し、醜悪な蟲の老人は『闇』の視界から

消え去った。

「……ふん、こんなモンか。何つーか……あっさり終わりすぎて、面白くねえな。直にあの世に送った方が面白そうだからわざわざ足運んだつつうのに」

鼻を鳴らし、『闇』は周囲をグルリと見渡す。

白刃の餌食となった『刻印虫』の骸がそこかしこに、それこそ足の踏み場もないほど散らばっている。

加えてそこから何とも言えない悪臭が立ち上り、この空間の淀んだ空気をさらに悪化させている。

「……邪魔くせえな」

ポツリと言い放った『闇』。

そして刀を握んだままの右手を前方に突き出し、人差し指を眼前の遺骸の山へと向けると。

「——『チン・カラ・ホイ』」

眩く。

すると指先にあつた『刻印虫』の遺骸が黒い炎に包まれ、瞬く間に黒い消し炭にされていった。

「——チツ。やっぱパクリの呪文と“即興で創った魔法”じゃこんなモンか？ 思ったより威力がねえ。便利なんだがメンドくせえな、あの“事典”。こちらら教育なんざマトモに受けちゃいねえんだぞ、ハッキリ言つてあのクソガキよりも……あゝ、まあいいか」

黒髪を掻き耄り、“何か”についてブツクサと毒づく『闇』。

だがその間もその手は止めず、辺りに散乱している『刻印虫』の遺骸に次々と黒い炎を灯していく。

やがて周囲には真っ黒に炭化し、もうもうとした煙を上げる“遺骸だったモノ”と、タンパクの焼けついた鼻を突く臭気だけが残された。

「……はああ、やゝと終わったぜ。あのクソジジイ、どんだけクソムシ飼つてたんだよ。——まったく、くたばってまで手間取らせんじゃねえよハゲが！」

悪態混じりに手近にあった消し炭を荒々しく蹴り飛ばす。

ポフツ、と黒い灰が舞い上がり、石畳に地下室の奥へと続く一筋の路が出来上がる。

「けっ！ ……さあて、と」

一通り鬱憤を晴らし終わると、『闇』はスタスタと地下室の奥へと歩き出す。

そこは『刻印虫』が湧き出してきた場所……臓硯が使役していた蟲達の巢穴。

ただでさえ薄暗い地下室の中であって、さらに深い闇を湛えたその場所。

「……おい、さっさと起きやがれ“女”。じゃねえと犯すぞ？」

そこに一人の少女がいた。

学生服を身に纏ったまま冷たい床に横たわり、ピクリとも動かない……いや、動こうともしない。

だが微かに身体が震えているところを見ると、どうやら死んではい

ないようだ。

「チツ。ったく、テメエまで手間とらせんじゃねえよ。おら、起きろつつてんだろ！」

その華奢な身体を容赦なく蹴り飛ばす。

力なくゴロリとその場で転がり、少女は強制的に仰向けにされる。

青く長い髪が振り乱され、石畳の上にバサリと散らばる。

そしてその少女の表情はというと……。

「あん？　なんだテメエ、死んだ魚みたいな目えしてやがんな。あの蟲ジジイにさんざん可愛がられたからか？」

「……ッ」

「凶星か、ケケ」

キュッ、と唇を噛みしめる少女。

ゆるゆると顔を自分を睥睨する『闇』へ向け、ただジツと視線を送り続ける。

もつとも、この地下室の暗さのせいで顔など視認出来ようもないだろうが。

「なんだ？ 気に障ったか？ ハッ、テメエなんぞに凄まれたって別に何とも
—— ああん？」

一転、『闇』の視線が鋭くなる。

その視線は、少女のふくよかな胸元に注がれていた。

といつても、別段よからぬ感情に突き動かされたという訳ではない。

『闇』のある点において図抜けた尋常ならざる感覚が、この少女の内に潜む『何か』を感じ取ったのだ。

「——」

「……？」

急に静かになった『闇』に、少女は仰向けの状態のまま僅かに首を傾げる。

すると『闇』は徐に身に着けている紅い腰巻から“何か”を引っ張り出した。

何やらどす黒く漆黒に染まった袋状の“それ”……その中に『闇』は手をつっ込むと、やがて中から何かを取り出す。

人差し指を突きだした巨大な手が付いた、円盤状の奇妙な帽子を。

「――」

頭にそれを乗せ、尚少女にジッと視線を送り続ける『闇』。

傍から見れば甚だ違和感の漂う光景だが、やがて『闇』の表情が陰しく歪められた。

「……チツ。やけにあっさり終わったと思ったら――こういうカラクリがあったとはなあ、クソジジイが！」

パチン、と指を一つ鳴らす。

次の瞬間、『刻印虫』に酷似した小さな蟲が何の前触れもなくその場に出現し、『闇』と少女の間の空間にフワフワと浮かび上がった。

『ウヌ！？　こ、これは一体……！？』

「まさか魂を二つに『株分け』して、この女の体内に隠してやがったとはなあ……。随分と狡いマネしやがるじゃねえか小悪党が。おかげで見逃すトコだったぜ」

キーキーと甲高い声を上げる蟲。

それはあの時消え去ったと思われていた間桐臓硯の魂の分身、スペアとも呼べる存在であった。

万一に備え、臓硯は魔術で以て己の魂を二つに『株分け』し、その片方をこの小さな蟲に宿して少女の体内に隠匿していたのだ。

『ば、馬鹿な！？　なぜ儂の存在を……！？　それにどうやってこ奴から儂を摘出した！？　儂はこ奴の心臓と完全に……！？』

「癒着していた、だろ？　ハッ、透視で見たら一発で心臓にいるって解ったぜ。他にもなんかヤケに覚えのある“ブツ”をクソムシに仕込んで、コイツに突っ込んでるコトとか粗方な。もっとも、オレ相手にクソムシ特有のミョゝな気配を消せていなかった時点でダメエは“詰み”だったワケだがよ」

『ク、透視……じゃと！？』
クレヤボヤンス

「そ。で、瞬間移動テレポーテーションでテメエを心臓から引っこ抜いたってワケ。そもそも癒着してたら取り出しにくいだろうって考えたんたろうが、そりゃあくまで“外科的に”ってコトだろ？ 瞬間移動テレポーテーションなら癒着してようがなんだろうが、んなモンまったく関係ねえしな」

『……その妙な帽子が手品のタネか？』

「おゝ、百点満点。だいせういかい！ ちなみにテメエがこの場に浮いてるのは念力テレキネシスで浮かせてるんだがな」

『……………』

もはや言葉すら出てこない臓硯。

クレヤボヤンス 透視、瞬間移動テレポーテーション、念力テレキネシス。

これほど多彩な能力を扱え、しかも発動するのに一秒と掛からない。

先程振るわれた“刀”といい、己が片割れと『刻印虫』を根こそぎ消し去ったあの得体の知れない“スイッチ”といい……目の前の、己以上の“バケモノ”は一体どれほどの力を秘めているのかと。

『……………ッ』

臓硯は、心の底から畏怖と……そして『恐怖』を感じた。

もしかしたら、それはこの老人にとって、初めての事だったかもしれない。

『——僕は、僕は！　ここで死ぬ訳にはいかぬのだ！　聖杯をこの手に、そして不老不死に……不老不死にならずして、死ぬ訳には……！』

もはや金切り音に近い絶叫を上げ、蟲の身体をくねらせる臓硯。

その矮小な、だが甚だ異質な外見からしてその悪あがきはかなり醜悪に映る。

「ギャーギャーウルセエなジジイ、この期に及んで喚くんじゃねえよ。つたく……そもそもジジイよお、不老不死とやらになつて——」

——結局何がしてえんだよ。

「——!?」

その言葉を聞いた瞬間、蟲の身体がピタリと動きを止めた。

「何が……したい? “不老不死となつて、何がしたい”? ——
——そうか、そうだった。儂は……いや、儂が目指していたモノ
は……もっと、もっと……! その実現のために、費やされる永い

時を生きるために、僕は、不死を……！」

か細く漏れる、迷懷。

何か大切なものを思い出したかのような、妙な響きがその声に滲み出ていた。

「ユステイ——」「さて、懺悔は終わったか？」ツ！？」

だが唐突に終わりが告げられる。

再び狂笑を漲らせた『闇』が、左手の“ソレ”にグッと力を込めた。

「デメエが何を思い出したかは知らねえし、興味もねえが……ま、とつとと逝けや。これ以上、オレの時間と労力を割かせんじゃねえ。この女の中の全クソムシともども——間桐臓硯、この世から消え失せる」

——カチリ、と刑執行の音が鳴る。

『ア、アアアアアアアアアアアアアアアア———
———』

そして、間桐臓硯はこの世から完全にその肉体と魂を抹消された。

「……ケツ、やっと終わったか。ったく、やっぱ遠隔でサクツと殺つとくべきだったかなあ、今なら出来る事だし。……まあ、それだと面白さは半減以下だけだな」

『白刃』と『絶対抹消の理』、それから『指付き帽子』を黒い『袋』の中に仕舞い込み、その『袋』を腰巻へと突っ込む。

そしてもうここには用はないとばかりに、サツと踵を返した。

……が。

「うづ……」

唐突に、その足がピタリと止まる。

『闇』が振り返ったその視線の先には、上半身を無理矢理起こした少女がいた。

いまだ視線が茫洋としているが、意識は先程よりもあるようだ。

「……どうして、わ、たしを「殺さないのか、ってか?」……ッ」

疑問を言い当てられ、口を噤む少女。

『闇』はそれを気にする事もなく、心の底から面倒そうな表情で口を開いた。

「お前、オレがジジイ始末した時「自分も殺してくれ」って思った
だろ」

「……………」

「だからだよ」

「…………ッ?」

意図が汲み取れず、少女は僅かに首を傾げる。

そして『闇』はさらに言葉を重ねた。

「生憎、死にたいと思ってるヤツにワザワザ引導を渡してやるほどオレは慈悲深くねえの。んなメンドクせえコト誰がするかよ。死にたきゃ勝手に死ねっての。そもそも殺りに来たのはジジイだけであつて、テメエは勘定に入ってねえんだよ」

「……………」

開いた口が塞がらない、とはこの事だろう。

あまりにもな言葉の数々に、少女の表情と身体が石膏像のように硬直する。

どうも予想していた言葉と遥かかけ離れていたため、相当な衝撃であつたようだ。

もつとも、これまでの言動を考えてみれば予想もついた筈なのだが

……。

「テメエ一人で自殺する度胸もねえクセによ、だから他人に頼んで殺して貰おうってか？ ムシが良すぎんだよ。つーワケで、せいぜい絶望を抱えたまんま残りの人生を生きてくこつたな。ケケ」

最後に嗜虐に歪んだ嗤い顔を残し、今度こそ『闇』は踵を返した。

「あ、そっぴやテメエの中からジジイが仕込んだ“ブツ”を取り出すの忘れてた。……んー、でもまあいいか。テメエの中のクソムシは全部消えてるし、よっぽどの事でもなければ変な暴走もしないだろ。ま、したらしたで面白そうだけだよ」

なんか親和性高いからパニックはさぞ見モノだろうしなあ、とケタケタ嗤いながら『闇』はゆっくりと地下室の隅へと歩いてゆく。

呆然としたまま、少女はその背中を見つめるだけ。

……いや。

「あな、たは……誰、なん、ですか？」

辛うじて、その疑問だけが口からこぼれ出た。

『闇』はもう一度だけ足を止め、今度は首だけを後ろに倒して少女と視線を合わせた。

交錯する互いの視線……少女はビクッと肩を震わせる。

それを見た『闇』はニイと唇を吊り上げ、

「あん？ オレか？ オレはなあ——」

こう告げた。

——『悪』のカミサマだよ。

「『チン・カラ・ホイ』」

紡がれる呪文。

それを合図に足元から漆黒の炎が立ち上り、それに取り巻かれた『闇』はこの地下室から忽然とその姿を消した。

「——ま、個人的都合で『悪』にとっての『悪』もやってるけどな」

最後に呟かれたその余韻が、地下室の湿った空気を通じて部屋中に木霊した。

「——セン……パイ？」

炎の揺らめきで、僅かに浮かび上がったその顔貌。

少女……間桐桜はその言葉を呟いた直後、肉体と精神の疲労から再び意識を失った。

「——さて、しばらくは静観だな。とりあえず、あのクソガキのウォッチングと洒落込みますかねえ……ポケットのリンクがブチ切れて、ついでにオレにパチられてひみつ道具の大半がなくなってるこの究極縛りの状況下で、果たしてテメエはどう動くよ？ ま、強力なブツの粗方がないとはいえコピッただけのヤツも結構あるし、ワビ代わりに別のモンを二、三アイツにブチ込んであるからどうとでもするだろうがよ。せいぜい気張って生き延びやがれやクソガキ！ ケケケケケ！！」

閑話 「跳梁跋扈」(後書き)

虎の子の一話を上げてしまったのでまだストックが全然出来ていない状況です。

よって次回更新はまた期間がしばらく空きます。

そしてもう一方の作品は全然続きが書けていないという体たらく(笑)。

いつそこっちをメインにした方がいいのかな……？

ちなみに『Arcadia』様にもこの作品を投稿していますが、内容が一部異なっておりますので興味があればそちらも覗いてみてください。

第十五話 「目覚めて」 (前書き)

お待たせいたしました。

まだまだ心もとない数ですが、徐々にストックが出来始めてきてますので、約一か月ぶりに更新いたします。

……というか、執筆する時間が全然取れない……助けてドラえもん。

第十五話 「目覚めて」

「——し、しずかちゃん！？　なんでそんなムキムキに……それにどうして僕を追いかけてくるのさ！？　って足速ッ——っ、はっ！？」

ガバツと跳ね起きると同時に、その目が開く。

「……ゆ、夢？」

上半身を起こした体勢で呟くのは——のび太。

「——」

スッ、と視線を下に落とせばそこには布団があり。

枕元には見慣れた丸メガネ。

「——えっと……」

横に目を移せば壁と、襖と障子。

そしてほのかに香るは畳の匂い。

——間違いなく、ここはどこかの家の一室。

「——は、はあああああよかったあああ……しずかちゃん
がマッチョになって追いかけてくるなんて、そんな事ある筈ないよ
ね。ホント、夢でよかったあ。いや、追いかけてくれるのは嬉しい
んだけどさ、流石にアレはちょっと……」

額の汗を手で拭い、盛大に安堵の溜息を吐く。

というか、いったい何という夢を見ているのか。

あえて深くは言及しないが、乙女の尊厳もへったくれもあったモノ
ではない。

マッチョなガールフレンドに全速全開で追いかけて回されるなど、ま
さに双方にとつてとびっきりの悪夢である。

……まあ、これまでの経緯を考えればある意味仕方がない事なのか

もしれない。

きつと色々と一杯一杯で、脳の中の情報が錯綜した結果こうなってしまったのだろう……それでもコレはあんまりすぎるが。

「ふう。……それにしても、ここは一体「ん？ のび太君、起きたのか？」っ？ 士郎さん？」

襖の向こう側から響く声。

メガネを装着したのび太が反応すると同時にスツと開かれ、その先の廊下には士郎が立っていた。

「やっぱり士郎さんだ！ じゃあここは……やっぱり士郎さんの家なのかぁ」

「よかった、あの時いきなり気絶するもんだから心配してたんだが、その分だと大丈夫みたいだな」

「あの時……？」

「……ん？ もしかして……覚えてないのか、のび太君？」

「はあ。えーと、確か……」

「い、いや！ 無理に思い出さなくていい！ と、とにかく起きたんなら居間へ行こう！ お腹、減ってるだろ？」

思い出そうと腕組みするのび太を、士郎は慌てて制止する。

昨夜のアレではそれも当然、その気遣いはどこまでも正解だ。

「え？ はい、まあ……っ！？ う、ううつ、意識し始めたら急に……お、おなか空いたあ」

腹を押さえて呻くのび太。

昨夜から何も口にしていないので、胃の中はすっかりカラッポである。

『グウー、ググウーッ』と遅れを取り戻さんとばかりに、盛大に腹の虫が鳴る。

「はは、これはまた凄いな。じゃあ行こうか。朝食用意してあるから」

「あ、はい……あれ？ そういえば、今何時なんですか？」

「ん？ ちょうど朝の九時だよ。俺達はもう朝飯済ませちゃったから、あとはのび太君だけだ」

「俺……“達”？ あの、もしかして凜さん達も？」

「ああ。まあ、色々あつてね。とりあえず、詳しい事は朝飯の後にしよう。まずはその喧しい腹の虫を鎮めないとな」

—— ちなみに、布団は一片たりとも湿ってはいなかった事をここに記しておく。

（—— チツ、漏らさなかったかあ。夢が“アレ”だったからかねえ？ まあ“アレ”も悪夢っちゃあ悪夢だろうが……にしたってつまんねえの。やっぱ夢を操作するときゃ良かったか？ ケケケ……！）

……どこかで誰かがそんな事を嗤いながら言っていたとか、いなかったとか。

「あ、これおいしい！　ん、これもうまいや！　これ全部士郎さんが作ったんですか？」

「ん？　そうだな、今日は藤ねえも、どういう訳か桜も来なかったから俺一人で全部作ったよ。一人暮らしたから、これくらいはね」

目玉焼き、サラダ、味噌汁、炊き立てのご飯と次から次へ口の中に放り込んでいくのび太。

幸い……と言っているのかどうか、のび太の嫌いな物がメニューになかった事からのび太の箸はシャカシャカと躊躇いなく動いていく。居間には土郎とのび太の二人きり。

空腹も手伝い行儀悪く食事を続けるのび太を、土郎が対面からお茶を啜りながら眺めている。

と、不意にのび太が首を傾げた。

「一人暮らし？ ……そういえば、土郎さんのお父さんとお母さんは？」

「あー、俺は養子……貰われっ子なんだ。それで俺を引き取ってくれた爺さん、いや養父オヤジも数年前に……ね」

「あ——」

忙しなく動いていたのび太の箸がピタリと止まる。

その表情は『しまった……！』と言わんばかりのしかめっ面だ。

「その……う、ごめんなさい」

「いって。気にしないからさ。それより早く食べちゃいな、味噌汁冷めるよ」

「あ……はい、すみません」

その言葉にもう一度頭を下げ、気を取り直して今度は幾分落ち着いた様子で食事を再開するのび太。

そんなのび太を眺める土郎の目は、どこまでも穏やかで優しいものであった。

(……あれ？　そういえば土郎さん、『爺さん』って……うーん、これどこかで聞いたような？)

チラツと脳裏に疑問がよぎったのび太であったが、良質の食事に没頭するあまりものの三秒ほどでスポツと頭の中から抜け落ちてしまった。

「あら、のび太起きたの？」

『ごちそうさまでした』『ほい、お粗末さま』とのび太が食事を終えた直後、凜が居間に入ってきた。

寝不足なのか、目の下には微かにクマが出来ており昨夜のような覇気も薄れている。

そしてその後ろには、

「おや、もういいのですか」

白のシャツに青いスカート、黒のタイツを身に纏ったセイバーがいた。

あの野暮ったい服のままではなかった事に、のび太は少しだけ目を見張った。

「セイバー、その服……」

「ああ、リンがくれたものです。流石にずっとあのままではマズイという事ですので」

「それはそうでしょ。セイバーは他のサーヴァントみたいに霊体化

出来ないんだから、せめて普通の服を着て一般人の目を誤魔化す必要があるの」

「霊体化……？ ああ、そういえば昨日そんな事言っていましたっけ。でもセイバー、その服似合ってるよ」

「……あ、その……どう、も？」

歯切れ悪く返答をするセイバー。

どうもこういう事にあまり慣れていないようで、どう反応すればいいのか解らないらしい。

そして士郎が人数分のお茶を用意し、四人で居間のテーブルを囲む形となった。

これから状況確認と今後についての話し合いが始まる。

「……あれ？ おじさ……じゃなかった、アーチャーさんは？」

「アーチャーなら霊体化して屋根の上で見張り番よ。というかのび太、いい加減アーチャーを“おじさん”って呼ぼうとするの止めなさい。ああ見えて結構繊細みたいだから、今度それ聞いたら多分アイツ泣くわよ？」

――泣くだけで済めばいいね。

「さて、まずは昨夜の事から……って、なによ士郎？」

凜が話を切り出そうとした時、隣の士郎がクイクイとその袖を引き、ついでにセイバーに向かって手招きをした。

「はい？」

首を傾げながらも腰を上げ、士郎と凜のところに向かうセイバー！。

のっけから三人で固まりだしたその光景に、のび太は狐につままれ
たような表情になる。

「あの、どうかしたんですか？」

「ん、いやちよつと……ちなみにのび太君。昨日の事、どこまで覚えてる？」

「え？ えゝつと……確かアーチャーさんと一緒にバーサーカーの剣をへし折って、それからパンチでセイバーに攻撃してきたバーサーカーに“シヨックガン”を撃ったら一瞬だけ効いて、あとは……あれ？ それからどうなっただっけ？」

「はいそこでストップ。今からその後の事を説明するから、そこからは思い出さなくていいよ」

「は？ はあ……」

頭に『？』マークを浮かべるのび太を尻目に、土郎は凜とセイバーにボソボソと小声で耳打ちする。

（という訳なんだ二人とも）

（何が『という訳』よ。今のやり取りだけで解る訳ないでしょ。ちゃんと説明しなさい）

（いや、つまりな……どうものび太君、セイバーがバーサーカーの首を刎ねたところの記憶“だけ”スッポリ抜け落ちてるみたいなんだ）

（は？ まさかそんな事が……しかし、確かにあの様子では覚えていなさそうですね。でなければ十歳かそこらの子供が、これほど落ち着いていられるとは思えませんし）

横目でのび太に視線を送りつつ、これまた小声でヒソヒソ会話を交わす三人。

人間の脳には『自己防衛機能』が備わっている。

これは例えばショッキングな出来事や耐えがたい恐怖に晒された際、過度のストレスから脳を護るため、無意識的にその記憶を改竄ないしは抹消してストレスをやり過ごすという物だ。

バーサーカーの首が大量の血潮と共に空中にすっ飛ぶなどというスプラッタを、じっくり生でガン見してしまったのび太。

いまだ小学五年生というメンタリティの弱さを考慮すれば、自己防衛のために記憶が跳んでしまったとしても不思議な話ではない。

……しかし逆に考えれば、“あの”バーサーカーを相手取った代償が一瞬に近い一場面の記憶の忘却（＋気絶）という、たったこれっぽっちで済んでいるという事でもある。

普通ならトラウマになってもおかしくはないし、それ以前に小学生がバーサーカーという怪物に立ち向かう事などまずもって狂気の沙汰であろう。

そののび太の思いの外図太い一面に、果たしてこの三人は気づいているのかどうか……。

（とにかく、そこのところだけには触れない事にしよう。下手に思いつきさせるのもアレだし、忘れてるのならそれはそれで問題ない事だし）

（そうねえ……ま、そうしましょうか。もともと、これじゃあこれから先がかなり思いやられるけど）

（下手に心に傷を負われるよりマシですから、私もそれに異存はありません）

コクリ、と三人が同時に頷いたところで状況が再開。

終始疑問符を浮かべていたのび太だったが、結局密談の内容を知る事もなく、首を傾げながら出されたお茶を啜っているだけであった。

「えっ！？ 結局バーサーカーは倒せなかったんですか！？」

「まあ、結論から言えばそうよ。のび太のアシストで何とかセイバーが“一太刀入れて”倒したんだけど、その後に蘇生……復活しちゃったのよ」

細々した描写を省きながら、凜はのび太の途切れた記憶の先を語る。

だが“復活”というくだり部分を聞いた瞬間、のび太は思わずテールから身を乗り出していた。

「ふ、復活って……！？ アレ、ゾンビか何かだったんですか！？」

「だったらそれだけよかった事か……ハア、あのねのび太。一応言っとくけど、サーヴァントっていうのは基本的に神話とか伝説とかの、名のある英雄が召喚されるのよ。マスターが誰であれ、ゾンビなんて間違っても呼び出さないわよ。それにあんな強力なゾンビがいる訳ないでしょ。モノにもよるかもしれないけど」

ずずず、とお茶を啜りつつ溜息を漏らす凜。

しかしそんな落ち着き払った凜とは対照的に、のび太は混乱の坩堝

にはまり込んでいた。

勿体ぶった語りのせいで、まるで事情の理解が追いつかないのだ。

倒したはずなのに復活した……その事実が示すものを、凜は未だ提示していない。

おそらく凜の性格が無意識的にそうさせているのだろうが……とはいえ、小学生相手に意地の悪い事ではある。

「じゃ、どうして……!？」

「結論から言うとな……アイツ、命を“十二個”持ってたのよ」

凜がズバリと告げた瞬間、のび太の顎が面白いくらいに『カクーン!』と落ちた。

「い、命が……十二個!？」

「そうです。あのバーサーカーの持つ宝具……『コッテ・ハンデ十二の試練』によって、確実に絶った筈の命が蘇りました」

「宝具……って、セイバーの持つてゐる見えない剣みたいなアレの事?」

「ええ。サーヴァントはそれぞれ最低一つ……あるいは多くて複数個、『宝具』と呼ばれる強力な攻撃手段を持っています。私は不可視の剣、あの晩いたランサーはあの紅い槍というように。そしてバーサーカーの宝具はその肉体……正確にはその中にある十二個の命だったという訳です」

「オマケにある一定水準以下の攻撃は全部無効化……それ以上の攻撃でも一度受けたものに対しては耐性がつく、つまり効かなくなるっていうデタラメなものよ。もっと正確に言うなら、たとえ死んでも十一回自動的に生き返るようになってるって事なんだけど」

「な、何ですかそれ……」

もはや言葉も出てこない。

そんな規格外すぎる相手と命のやり取りをしていたのかと思うと、改めて背筋に冷たい物が走る。

ゴクリと唾を飲み込むのび太であったが、士郎の漏らした言葉が何より大きい衝撃をこの少年に齎した。

「で、バーサーカーの正体なんだけどな、イリヤ……あのバーサーカーのマスターの女の子の話によると、『ヘラクレス』らしいんだ」

「……へ、『ヘラクレス』？　そ、それって……」

「うん……神話で出てくる、“あの”『ヘラクレス』だよ。のび太君が気を失った後、あの子が声高々に宣言していた。宝具の事も含めてな」

『ヘラクレス』

ギリシヤ神話最大級の英雄で、最高神ゼウスの息子。

自分の妻と子を自ら殺した罪を償うために十二の難業を為し、不死身の肉体を得た。

ゼウスの妻であるヘラによって謀殺された後はオリュンポスの神々の末席に加えられたという。

のび太でも知っている超ビッグネームだ。

度肝を抜かれたのび太は乗り出していた身体を引っ込め、放心したようにペタンと元の場所に座り込んでしまう。

「そ、そんな……それじゃ僕たち、『ヘラクレス』と戦ってたの？」

「そういう事よ。しかも狂戦士と化した『ヘラクレス』とね。元々バーサーカーというのは、力の弱い英霊を狂わせる事で英霊自身をパワーアップさせるクラスなんだけど、それが『ヘラクレス』なんて……“鬼に金棒”どころの話じゃないわ」

「しかもな、のび太君……これは心して聞いてくれよ。どうやらのび太君は——」

——バーサーカーに目を付けられたらしいんだ。

「……え？」

ユルユルと、士郎と目を合わせるのび太。

士郎の表情は、とても冗談を言っているような物ではなかった。

それどころか、眉をこれでもかとばかりに顰めたかなり厳しい物だ。

——ふうん……やるじゃない、バーサーカーを一度だけとはいえ殺すなんて。ご褒美として、今日はここで退いてあげる。

——あ、それから……バーサーカー、お兄ちゃんが抱えてる気絶しちゃった男の子が気になってるみたい。クスクス、起きたらよろしく言っておいてね。わたしも興味あるし。

「……そう、言ってたんですか？ あの子が？」

「ああ。口調は冗談を言ってるみたいだったけど、目は本気だった」

「その後、士郎がアナタを背負って全員でここまで戻ってきたって訳。これが昨夜の顛末よ。……のび太」

「は、はいっ!？」

突如、凜から真面目な視線を向けられたのび太はビクツと背筋を伸ばして反応する。

だが凜はそれを気にする風でもなく、射抜くような眼光をのび太に突き刺しながら厳かに告げた。

「改めて言うわね。もう、アナタは後戻り出来ない。たとえ『嫌だ』と言っても逃げる事は許されない。アナタに与えられた選択肢はたった一つだけ。この狂った戦争の真ただ中で、力の限り『生き延びる』事よ。この意味、解るわね？」

「——!？」

——このイカれた戦争のただ中で、誰よりも生き延びてみな。

フラッシュバックする、あの夜の見知らぬ“誰か”の言葉。

うすら寒いモノがのび太の背中に覆いかぶさり、全身がゾワリと粟立つ。

心臓が狂ったように早鐘を打ち始め、咽喉がカラカラに干上がっていく。

ジワジワと実感を伴って顕れてくる“死と隣り合わせの世界”に、のび太は逃げたしたいほどの恐怖を覚えた。

昨夜の精神状態ならばいざ知らず、今ののび太は平常運転。

自らが選んだ運命の過酷さを突き付けられて、底冷えするような怖気に苛まれるのも無理はない。

……が。

「……はい、解ります。それに僕はもうあの時、決めましたから。僕を『助ける』って言うてくれた、土郎さん達の力になりたいってだから……元の世界に帰るために土郎さん達と、この戦争の真つた

だ中を力の限り『生き延びて』みます」

それでも眼の輝きだけは色褪せず、のび太の決意は揺らがない。

誰よりも臆病で、弱虫で……しかし誰よりも優しい心を持つのがのび太。

自分自身の危機よりも、士郎達の危機こそがのび太にとって何よりの恐怖なのだ。

その恐怖を払拭するためならば、のび太はどんな困難でも……たとえ足が震え、怖気づいたとしても、なけなしの勇気を振り絞ってそこへ飛び込んでいくつもりだ。

(……それに、あの人)

脳裏をよぎる、あの晩の邂逅。

顔も姿も見せず、言いたい事だけ言い放って何もかもを煙に巻いて風のように去った、謎の人物。

言葉の真意を理解するには至らなかったが、きっと大切な事なのだという事だけは呑み込めた。

だからこそ、のび太は知りたかった。

あの声の主が告げた言葉が指し示すものを。

ドラえもん達のいる自分の世界への道のり、その行く手に待ち受けるものを。

そのためにも、逃げ出すつもりは毛頭なかった。

「——ふうん。のび太……アンタホントに小学生？」

「え？ はい、そうですけど……あの、僕、何か変ですか？」

「ん？ ああいや、そういう事じゃなくてね……セイバー、アナタなら解るでしょ？」

「ええ」

凜の言葉に、深々と目を閉じ頷くセイバー。

しかしのび太は訳が解らない。

疑問符を頭上に浮かべたまま、視線を横へとズラす。

「土郎さん。あの、どういう事なんです？」

「うん？ ん、まあ……のび太君は凄くなって事だよ。いつそ羨ましいくらいにさ」

「????」

頻りに首を捻るのび太に対し、三人はただただ薄い笑みを湛えてそれを見やっっているだけ。

（昨日といい、今といい……まったく、本当に君は勇気があるな。……いや、それどころじゃ済まないか。俺なんて最初から状況に流されるだけで、単に泡喰ってただけだったし……。でも君は、一度は逃げながらも戻ってきて、俺達のためにバーサーカーに立ち向かった。それだけでも常人離れしてるっていうのに……この歳で、あれだけの眼が出来るなんて、な。……“通りすがりの、正義の味方”、か）

「……ホント、眩しいくらいに羨ましいよ。のび太君」

ポツリと漏れ出た土郎の言葉は、この場にいる誰の耳にも届く事はなかった。

第十六話 「作戦会議とのび太の秘策」

「——それで、士郎さんと凜さんは協力する事になったんですか」

「そ。成行き上仕方なく、ね。ま、仮にアンタがいなかったら多分敵対してたでしょうけど」

「え？ それじゃあ……僕のため、なんですか？」

「……ふう、有体に言えばそうよ。まったく、我ながら甘い事だとは思うわ。正直、魔術師としては論外の結論よ。ただ、人として論外にはなりたくないだけ。どういう訳かアーチャーは若干乗り気だったけど、それが意外といえは意外ね」

「アーチャーさんが……？」

お茶を啜りながら語り続ける凜。

ちなみにお茶は二杯目である。

対象が小学生であるのび太のため、解りやすく語るのにここまで相

当な時間が費やされているという事だ。

現に口を全くつけられていない士郎のお茶はすっかり冷めきってしまっている。

そして話は、ここにいるメンバー構成員の現状へとシフトしていった。

「何でも『この際は、敗れた夢に再び挑むのも悪くはない。状況的にまだ融通も効くしな』とか何とか言ってたわ」

「『敗れた夢』？ 遠坂、アーチャーの夢って何なんだ？」

「さあね。聞いてはみたんだけど、はぐらかされたわ。ま、半分はどうでもいい些事だから、それ以上は追及しなかったけど」

「はぐ。サーヴァントにも夢ってあるんですね。あのバーサーカーにもあるのかな？」

妙な感心の仕方をするのび太。

と、その時セイバーが口から湯呑を離してのび太に視線を向け、口を開いた。

「ノビタ。前にも言ったかと思いますが、聖杯戦争に参加するサーヴァントには、基本的にそれぞれ目的があります。その目的を達成するため、召喚に応じるのです。正確には願いを叶える聖杯を手に入れ、目的を達成する訳なのですが」

「へえ。じゃあセイバーにも何か目的があるの？」

「……、ええ」

肯定の返事を返したその一瞬、セイバーは僅かに顔を歪める。

それに気づいたのび太はどうかしたのかと声を掛けようとするが、

「あゝ、もう論点が思いっきりズレちゃってるわね、とりあえず軌道修正！ のび太への状況説明は終わったから、今重要なのはこれからどう動くべきなのかって事！ まずそれを詰めてしまいましょ！」

凜からの横槍によって切っ掛けを折られ、結局何も言い出せずに終わってしまった。

「今の段階で接触したサーヴァントはランサーとバーサーカー。ここにいるセイバーとアーチャーを除けば残りはライダー、キャスター、アサシンね。ま、コイツらに關してはまだどうするもこうするも言えないか。全然接触もしてない訳だしね」

士郎が冷え切ったお茶を入れ替えた後、話は次のステップへと進む。

目下の議題は、敵サーヴァントの情報まとめだ。

「って事は、今は交戦したランサーとバーサーカーに焦点を絞るべきか。バーサーカーの正体は『ヘラクレス』って解ってるし、ランサーは宝具が『ゲイ・ボルク』だという事が判明してる。一度セイバーに対して使ったしな。そういえばセイバー。あの時の傷、大丈夫か？ 胸、貫かれてただろ？」

「ええ。既に修復は完了しています。バーサーカーとの戦いの時はまだ完治していなかったのですが、どういう訳か交戦後間もなくしてあつという間に治癒してしまいました。原因は何となく見当がついているのですが……理由が判然としません」

「——え？ ええ？ あ、あの、どうしてそこで僕の方を見るの？」

いきなりセイバーから視線を向けられたのび太は面食らってしまう。

……セイバーの傷が恐ろしい速度で完治した原因は、あの謎のパワーアップにあった。

急激な肉体の活性化と爆発的に高められた魔力……それらが槍によって付けられた傷にまで影響を与えた。

セイバーはそれを持ち前の常人離れした『直感』で本能的に悟っていたのだ。

しかし“原因”には思い当たっても、そもそも何故そんな事が起こったのかという“理由”までは見通せない。

戸惑うのび太の様子を見れば、本人としては思い当たる節などまったくないと判断していいだろう。

のび太から視線を外しフウ、とセイバーは息を一つ漏らすと、自分から話のベクトルを変更した。

「……いえ、まあそれは置いておきましょう。ここで大事なのは、宝具を使った事でランサーの正体が判明したという事です」

「正体……宝具が『ゲイ・ボルク』だというのは、間違いなくアイツは『クー・フリーン』ね」

「え？ く、く、ふーりん？ って、誰なんです？」

「って、そこで俺を見るなよのび太君……俺もよく知らないんだから。遠坂、『クー・フリーン』って？」

士郎・のび太の疑問の声に、凜は呆れたように息を吐きながらも口を開いた。

『この二人、妙に息があってるわね……』と頭の片隅で半ば投げやりに思いながら。

「『クー・フリーン』っていうのはケルト神話に出てくる英雄よ。日本ではマイナーな神話だから二人が知らないのも無理ないけど、ヨーロッパじゃ知らない人間はまずいないと言っていていいわね」

「そして彼の代名詞ともいうべき物が『ゲイ・ボルク』。放てば必ず心臓を貫くと謳われた、呪いの魔槍です」

「呪いの……そうか。セイバーが胸を突かれたのは、あの槍が“そういうものだった”からなのか」

「はい。もつとも、ギリギリのところで心臓を貫かれるのは避けられました。その点は幸運でしたね。おかげで本当の名……“真名”も判明した訳です。ですが……相手が『クー・フリーン』とは、

宝具を別にしたとしても厄介ですね」

眉間に皺を寄せ、唸るように呟くセイバー。

「そうねえ……はあ」

それに追隨するかのように、凜が瞑目しながら相槌を打った。

「あの……厄介って？」

それらの意味するところが解らなかったのび太。

疑問をそのまま二人にぶつけると、今度は二人そろって渋面になった。

のび太の問いは、頭の痛い問題をこれでもかばかりに、さらにドンと鼻先に押し付けるようなものだったからだ。

「『クー・フリーン』という英雄はケルト神話において最も代表的な英雄です。つまり、その強さは折り紙つき……申し分ないものであるという事」

「そ。それもおそらくは、日本での知名度の低さを補って有り余る

ほどこね」

「はあ。……ん？ 知名度の低さ……って何なんです？」

「簡単に言えば召喚された場所……この場合は日本ですが……そこでどれだけ有名であるかどうかがサーヴァントの強さに関わってくるのです。あくまである程度の範囲で、でしかありませんが。ギリシャ神話の英雄である『ヘラクレス』は日本でも有名ですから、強さも相応のものになっていると思われると思います。対して……」

「ケルト神話の英雄、『クー・フリーン』は日本ではドマイナーな存在よ。アンタ達二人が知らなかったのがいい例ね。つまりその分だけ力が弱くなってる筈なんだけど……あの様子じゃ、正直なところ微々たる物でしょうね。なんせケルト神話においては押しも押されぬ、言ってしまうえば『ヘラクレス』『クラスの大英雄だもの。元々の強さが並外れてるのよ。まったく、頭の痛い事ね」

つまり元々の強さ1000の相手が900になって現れているようなものである。

たかが10%強さが落ちたくらいでは、例えば200の強さしかない弱者が相手取る場合、大差ないに等しい。

この10%が生きてくるのは組み合わせるのが強者、加えて互いの実力がほぼ拮抗しているという条件が付いてくる。

もつとも強さをすべてひつくるめ、単純に数値に直して比較するという事は出来ない訳だが。

格下の相手に何の因果か、いともアツサリと敗れ去る……などという事も珍しくないのが勝負事の、ひいては聖杯戦争の常なのだから。とはいえ、相手が油断の出来ない強敵であるという点は疑いようのない事実である。

「まさか大英雄クラスと一夜のうちに二回も戦っちゃうなんてねえ……それとまともに渡り合うセイバーも大概だけど。実はセイバーも相当名の売れた英傑だったりするの？」

「禁則事項です」

さりげなく振られた追及をこれまたさりげなく躲すセイバー。

そしてそのまま話を自然に元の流れへと戻す。

「とにかく、ランサーこと『クー・フリーン』とバーサーカーこと『ヘラクレス』。この二名に対してどういう対処をすべきか、という事です……正体と宝具が判明しているという点で見ればこちらがアドバンテージを取れています」

「戦力の絶対数でもそうね……セイバーにアーチャー、あと条件付

きでのび太、と」

「え？ 僕も！？」

ごく自然に自分が戦力の頭数に数えられている事に驚くのび太。

凧はそれを見て『やれやれ……』と言わんばかりに頭を抱え、やがて徐にジト目でのび太を見据え口を開く。

「あのね、アンタ昨日自分が何したか解って言ってるの？ いくらトンデモアイテム使ってたからといっても、人間がサーヴァントと共同戦線張れるなんてはつきり言って前代未聞よ？ へっぽこ士郎はともかく、わたしですら何も出来なかったっていうのに……。こっちにはあまり余裕がないの。だからたとえ小学生であれ、使える者は躊躇なく使う。この戦争に勝ち抜くため、生き残るために……。少なくともわたしはそのつもり。それとも何かしら？ あの時の啖呵は嘘だった、とでも？」

「い、いやそういう訳じゃ……」

凧のあまりの押しの強さにタジタジになるのび太。

別に士郎達と共にサーヴァントに立ち向かう事に否やはない。

ないのだが……。凧のオブラートに包まない、どこまでも単刀直入で

剥き出しの物言いにはどうしても戸惑ってしまうのだ。

しかも凜の醸し出す、のび太にとってある意味で苦手な雰囲気はそれに拍車をかけてしまっている。

これが士郎かセイバーの言葉ならば配慮が行き届く分、また態度も違ったのだろうが……。

「……ま、安心しなさいな。あなたの手を汚れさせるつもりはないから。とどめを差す時は、わたし達でやるわ」

「????」

と、凜はやがてツ、とのび太から視線を逸らし、口元に湯呑を傾けながらそんな事を呟いた。

先程言った『条件付き』とは……つまりはそういう事だ。

のび太に“殺し”という重い十字架を背負わせるつもりは、いかに凜といえども毛頭なかった。

たとえそれが偽善で、罪の意識を誤魔化すためのものであったとしても。

無理矢理にでものび太を除外する事も出来なくはないが、緊迫した状況と何よりのび太の打ち立てた実績が不誠実ながらも期待を抱かせてしまい、それを許さない。

ならばせめて――。

『いよいよの時は自分達の手で、のび太を血には染めさせない』

セイバーも士郎も、そしてこの場にいないアーチャーも元よりそのつもりであつた事は言うまでもない。

……もつとも、自らが望んだ事とはいえ、のび太を殺し合いに駆り立てる事に内心、忸怩たる思いを噛みしめている事も言うまでもない。

隣に座る士郎の、隠そうとしても完全には隠し切れていない、その恐ろしく険しい表情が何よりの証左だ……。

「……ただ、どっちにしろそう簡単に勝てるような相手じゃない。特にバーサーカーはな。まあそれ以前に、正体が解つても居場所が解つてないから戦いを仕掛けようもない訳なんだが……」

決して内心を見せまいと無理矢理に無表情の仮面を被り、士郎は重

苦しく言葉を紡ぐ。

確かにアドバンテージがあっても、それを能動的に活かしきれなければ価値も半減してしまう。

先手必勝が全てにおいて有利とは必ずしも言えないが、主導権を握る事自体は有効ではある。

「そうねえ……バーサーカーに関してはまったくアテがない訳でもないけど、それも確実という保証はないし……ランサーに至っては完全にお手上げ。結局悉く受けに回るしかないのが現状なのよねえ……」

溜息交じりに愚痴る凜。

セイバーも難しい顔をして黙り込んでいる。

まさに状況は八方塞がり、……なのだが。

「えっと、居場所が解ればいいんですか？」

「……は？」

のび太の何気なく呟かれた言葉で、風向きが急に変わった。

「…………まさか…………出来るの?」

「はい、多分。なんでかだいぶ中身が減っちゃってるけど、たぶんあるハズ…………」

呆然と呟く凜を尻目にのび太はポケットから“スぺアポケット”を引っ張り出すと、ゴソゴソと掻き回すように漁る。

「えーと…………あ、あつた!」

やがて歓声と共に、ズボツと“スぺアポケット”から何かを引っ張り出した。

その手に握られていたモノは…………。

「…………杖、ですか?」

柄の部分に機械がくつついた、一本の杖であった。

「それでのび太君、その杖を……一体どうするんだ？　言われるがまま庭に出てきた訳だけど……」

所変わって衛宮邸の庭先。

そこには今まで居間にいた四人の姿があった。

のび太を中心に、士郎・凜・セイバーの三人がその周りを囲んでいる。

そしてのび太は右手に持った杖を持ち上げ、徐に説明を始めた。

「これは“たずね人ステッキ”って言って、これを地面に突き立てて離せば、探している人のいる方向に倒れるんです。これで他のサーヴァントの居所を探せます！」

「へえ……こんな杖が？」

疑わしげな表情でのび太から“たずね人ステッキ”を取り上げ、矯めつ眇めつ眺める凧。

機械をはじめとした科学とトコトン相性の悪い凧である。

昨夜のアレコレでひみつ道具の効力が実証されているとはいえ、やはり胡散臭さはぬぐえないのだろう。

「あ、もしかして疑ってるんですか？」

「……少しね」

「む……確かにドラえもんの道具の中には役に立たない道具もいっぱいありますけど……“夢たしかめ機”とか……でもこれはちゃんと役に立ちますよ！ ホントに！」

凧の様子に不満を露わにするのび太。

それでも凧は眉根を寄せたままの表情を崩そうとしない。

そんな凧を見て、ならばとのび太は身を乗り出し、こう口を開いた。

「解りました！　じゃあ一回試してみてください！　それで解るハズです！」

「試せ、って言われてもねえ……。うーん、ならとりあえず……対象はアーチャーでいってみましょうか。今霊体化してるから、試すには丁度いいかもしれないわね。……アーチャー、聞こえる？」

顔を上げた凜は虚空に向かって叫び、ついでに片耳を抑える。

霊体化し、見張り番をしているアーチャーと念話で会話しているのだ。

「アーチャー、今から霊体化したまま、そこから移動して。場所はこの家の敷地内ならどこでもいいわ。………何故って？　まあ言ってみれば実験よ。話は聞いて………なかったのね。もう、いいからとりあえず動いてさっさと隠れる！　三秒以内に！」

「遠坂……それ、短すぎないか？」

士郎の思わずこぼれ出たツツコミは華麗にスルーされ、“たずね人ステッキ”の効果実証実験が開始された。

「なんか凜さん、ジャイアンみたい……」

いや、まったく。

「……まさかホントに当たるなんて」

結果だけ言えば、一発的中。

庭の地面に“たずね人ステッキ”を突き立て手を離し、重力のなすがままに任せて倒す。

その先端の指し示した方向に、実体化して姿を現したアーチャーがいた。

……が。

「……なんでよりによって台所なんだよ、アーチャー。隠れるならもっと他に場所があっただろうに……土蔵とか、床下とかさ」

「……三秒で行けとの指示だったからな。元いた場所から遠くなく、且つ咄嗟に思い浮かんだ場所がここだった。それだけの事だ」

「律儀ですね……何とも。しかし妙ですね？ 何故貴方が台所に立つても、そう違和感を感じないのですか？ むしろそこにいるのが当然のように……」

「……何とでも言いたまえ。重ねて言うが、他意はない。偶々、ここしかなかったただけだ」

苦虫を噛み潰したかのような苦りきった表情。

どうやら言いたい放題言われて不貞腐れているようだ。

しかし下手に言い訳なんぞするから余計にその怪しさに拍車がかかっているのだ。

真に受けずにさらっと聞き流せばいいものを……。

「……ま、とにかくこの杖がのび太の言った通りのシロモノだという事は解ったわ。これならまあ……使えるかもね」

凜の降参宣言に、のび太は「どうだ！ 言った通りだっただろう！」とばかりに破顔する。

しかしそれも一瞬、話にはまだ続きがあった。

「もつとも、偶々当たった可能性も捨てきれないけど。なんせ試したのが一回だけなんだしね。一応聞くけど、これの当たる確率って何%くらい？」

「え！？ えっと……うーん、70%くらい……かな？ 偶にハズれるコトあつたし」

笑顔から一転、今度は戸惑いがちに答えるのび太。

数値としてはかなり心許ない。

「七割……か。うーん、悩みどころね。七割の確率をアテにして探し回るのもまだちょっとリスクと釣り合わない……それにこれはあくまで人物の方角だけだし……」

答えを聞いた凜はまた思案気な顔になる。

現状が現状なだけに、全てにおいて万全を期したいのだ。

確かにこの杖は役に立つ。

しかしはつきり言って、この杖だけでは片手落ちだと言わざるを得ない。

敵の方角だけが解つても仕方がないし、それ以前に成功確率が七割だ。

もう一つ、確實性を増加させる別のファクターがなければ、折角の“たずね人ステッキ”もただのヘンテコな杖でしかない。

「——あ、そっか！……つまり100%の保障があればいいんですよね？　凜さん」

「え？　……まあ、そうね。欲を言えばここから動かずに特定出来るのなら言う事はないんだけど」

「そうですか！　……よし、じゃあ“たずね人ステッキ”と併せて……あるかな？　……あ、あった！」

頭の上に豆電球を点灯させたのび太はポケットから“スピアポケット”を取り出すと勢いよく手を突っ込み、やがて二つの物体を取り出した。

果たしてその物体とは……。

「薄型テレビと……マルとバツ？」

「はい！ “○×占い”と、“タイムテレビ”です！！」

ニツと笑顔を浮かべながら道具の名前を告げるのび太。

しかしそれとは対照的に、残る四名は皆一斉に『？』マークを頭に掲げるのだった。

第十七話 「シークレット・アイテム・パニック！」（前書き）

カオスです。

第十七話 「シークレット・アイテム・パニック！」

場所を再び居間へと移し、テーブルの上に置かれた三つの物体を前に顔を突き合わせる四人……ではなく五人。

どうして再度庭へと出ずにここへ戻ってきたのかというと……実はのび太、今が二月であるという事をすっかり失念していたのだ。

当然の事ながら、二月の風は身も凍るほどに冷たい。

巷では“子供は風の子”とよく言われる……しかしながら、慣れない環境に放り出された小学生であるのび太の身にはやはりかなり堪える。

それでいながらのび太は事もあるうちに“たずね人ステッキ”の実演のために、わざわざ寒風吹き荒ぶ庭へと出て行ってしまった。

そしてアーチャーのいる場所である母屋へと入った時には、のび太の頬と耳と指先は真っ赤に霜焼けしてしまっていたのだ。

「……ズズッ」

オマケに鼻水まで。

……それを目ざとく見つけてしまった土郎の一言。

「なあ……わざわざ寒い庭で扱う事、なかったんじゃないか？ 家
の中であつたかいお茶飲みながらもよかつたんじゃない……」

「……………、あ」

と、まあこういう訳なのである。

大方杖は屋外で使う物で、建物の中では使わないから庭でやろうと
か考えたのだろうが、んなモン先を拭えばいいだけの話である。

アホかと言いたい。

閑話休題。

「それで少年。その三つの道具でどうするつもりなのだ？」

「その前にさっき出した道具の説明をしますね。その方が解りやすい。こっちの“○×占い”は質問した内容を○か×かで100%判断してくれるんです」

「100%？ 確実にですか？」

「はい。例えば……うーんと、あ……」

悩むのび太。

そしてその末に『あ、思いついた！』とばかりにポンと手を打つと……一言。

「『士郎さんは将来ハゲる』！』」

ビシッとのび太が指を立ててそう告げた瞬間、○印がひとりでフワツと浮き上がり『ピンポンピンポーン！』と機械音が甲高く鳴り響いた。

“大正解”のファンファーレ……つまり100%士郎は将来ハゲるという事だ。

……まあなんだ、ご愁傷様である。

というかのび太よ、言っに事欠いて命題がそれか……。

「ちょっと待った！ それは何かのイヤガラセかのび太君！？ 俺なにか悪い事したかい！？」

「アッハハハハハ！！ ナルホドねえ、士郎ってば将来ハゲちゃうんだ！ アハハハハ……あゝ、お腹痛い！」

「やかましい！ 笑うなそこお！ っていつかそれはきつとお前のせいだ、遠坂アー！！」

ちやぶ台をバンバン拳で叩きながら笑い転げる凜。

余程可笑しいのだろう、その眼には明らかに哀しみ以外の涙が滲みまくっている。

そして横のセイバーはと言えば。

「……、クッ！」

口元を手で押さえて顔を後ろに背け、プルプルと何かを堪えるように震えている。

どうやら笑いのツボにハマったらしい。

「……そうか。危ないところだったのだな」

だが一人だけ。

自分の髪の毛を大事そうに手で押さえながら、何やら意味不明な言葉を呟く長身の男がいた事は、このカオスと化した空気のせいで全員の視界の隅へと追いやられていた。

ちなみにこの後、流石に失言だったと悟ったのび太の『今から気を

付ければ将来、土郎さんはハゲない』との命題に、二度目の“大正解”のファンファーレが鳴った事で状況は程なく沈静化した。

どうもこのままだったらケアが足りずに“終わった”未来に100%分岐していたようである。

未来は常に不定形、“今”の行い次第でどうしても転んでしまう…故に、救いの道はまだ残されている。

“二重に”聞こえた安堵の溜息が、何とも痛々しく居間に響き渡るのであった……。

「あゝ、笑った笑った……くっ、くくっ！　そ、それでのび太、
○×占い”については解ったけどもう一つのそのテレビは何なの？」

湧き出る笑いを無理矢理押さえつけつつ、凧はのび太に促す。

その横で土郎がジト目で凧を睨みつけているが暖簾に腕押し。

直接的な原因はトンデモない命題を口走ったのび太だが、散々に大

笑いして精神に鉋かんをかけてくれやがったのは目の前の“アカイアクマ”なのだ、睨むのも無理はない。

ちなみにセイバーは既に平静を取り戻し平常運転、アーチャーはただ腕組みしてむっとりとして押し黙っている。

「あ、ああ、はい。これは“タイムテレビ”です。過去や未来を見るためのテレビで、どんな時代や場所でも見る事が出来るんです」

のび太はそう言うのと徐に“タイムテレビ”の土台部分に設置された計器に手を伸ばし、ガチャガチャいじり始めた。

「試しにちよつと画面に映像を出してみますね。どこか映して欲しいところとかないですか？」

「そうだな……じゃあ、桜の様子は見れるかな？ 今日家に来なかったらちよつと心配なんだ。いや、来てくれなくて助かったといえはそうなんだけど」

「桜……って士郎さん、それ誰なんですか？ なんか朝ごはんの時にそんな名前聞いたような気がするんですけど」

疑問符を頭上に浮かべたのび太が士郎を振り返る。

「ああ、桜は……フルネームは間桐桜っていうんだけど……俺の学校の後輩だよ。数年前から朝と夕方、家に飯を作りに来てくれるんだ」

「へえ……土郎さんの彼女さんですか？」

「アハハハ……。桜は妹みたいなもんだよ、そんな大層な間柄じゃないさ」

のび太の疑問に手をパタパタと横に振りながら笑顔で答える土郎。

その横では、

「あゝあ、桜も可哀そうに……」

と嘆息する凜がいたのだが、その小さな呟きは誰にも聞き取られる事はなかった。

「えーと、じゃあその桜さんの家を目標にして……あ。あの、住所とか解ります？ あと出来れば地図とか……」

「ん、ああそれなら……」

と、不意に士郎は席を立ち、奥へ引つ込むとやがて冬木全体のマップが乗った冊子を引っ掴んで戻ってきた。

そしてページを開き、地図のある一点を指さして件の住所を教えろと、のび太は“タイムテレビ”のダイヤルをいじって、画面に映し出された冬木のマップ上のその場所に正確に焦点を当てた。

“タイムテレビ”の使い方は、ドラえもんが使用した際のその計器のいじり方を見て既に習得しているようで、そつのない手慣れたものだ。

こういう事に関しては無駄に学習能力のあるのび太であった。

その英知をもっと別方面に活かせと言いたい……。

「よし、座標設定はこれでOK……士郎さん、時間はどうしますか？」

「ん……とりあえず七時から八時くらい？」

「じゃあ……間を取って七時半、っと。よし、じゃあいきますよ。それっ！」

すべての設定が入力し終わり、一同が“タイムテレビ”の画面へと

釘づけになる中、のび太が映像ボタンをポチツとな。

一瞬ノイズが走ったかと思うと、コンマ数秒もせずに画面に映像が浮かび上がった。

『……いつてらっしやい、兄さん』

『……ふん』

画面の中でそう呟くのは紫の長い髪をした、どこか儚げな凜と同じ年頃の少女。

どうやら画面の舞台は対象の家の玄関先のように、普段着でサンダル履きのその少女は青いクセ毛のこれまた士郎と同一年くらいの少年の見送りをしている。

しかしどこかの学校の制服を着たその少年の顔はひどく無愛想だ。

「士郎さん、この人が桜さんですか？」

「ああ、そうだよ。で、もう一人の男の方が間桐慎二……俺と同じ

クラスの友人で、桜の兄貴だ。これは……慎二が学校へ行くところ
みたいだな。けど、桜は学校へ行かないのか？ 制服じゃないし…
…それに顔色がちよっと悪いような？」

「……あの娘も学校を休んでるのかしら？」

それぞれの述懐を余所に、場面は進む。

妹の『いつてらっしゃい』にもすげない反応のまま、通学鞆を抱え
た慎二は玄関のドアノブを捻り、扉を開く。

そしていざ家を出ようとしたところで、急に慎二が妹の方を振り返
った。

『……おい、桜』

『……はい？』

『お前、どうして今日は衛宮のところへ行かなかった？』

『……その、少し具合が悪くて。先輩に迷惑はかけたくないから…
…学校にも今日はちよっと……』

『……チツ、悪くなかったら結局は行くつもりだったのかよ。まあ今日はいい……それから、ジーサンはどうした？ 今朝から姿を見てないんだけど』

『ツ！？ ……い、いえ、私もよく。部屋に行ったらなぜか姿がなくて。それでまだどこかにフラツと出掛けられたのかなと……』

『……ふうん。前も何回か似たような事があったな。じゃあ放つといていいか。……いっそのそのまま帰って来なきゃいいんだけど。あんな気味の悪い妖怪ジジイが居座ってたんじゃ、タダでさえ辛気臭いこの家をもっと辛気臭くなるし』

『……………』

その言葉を最後にボタンと閉じられるドア。

結局妹に『いつてきます』の一言もなく、言いたい事だけ言い放つて慎二は学校へと足を進めた。

「ちょっと、何なんですかあれ！？ 土郎さん、いくら兄妹でもあれはひどいですよ！？ どうして具合が悪いつて言ってる桜さんを心配してあげないんです！？ それにあんなにおじいさんの悪口を言つて……！」

「お、落ち着けのび太君！ し、慎二も悪いヤツじゃないんだ。ただ、昔から色々と難しいヤツでさ……！！」

このあまりにそっけない兄妹のやり取りにいち早く憤慨したのはのび太だ。

そもそものび太の周りにいた兄妹間の仲は比較的円満なものが多い。代表格なのはジャイアンとジャイ子の兄妹だが、すわジャイ子に何かあった時のジャイアンのパワーといったら、それはもう凄まじいものがあつた。

それにのび太はのび太の祖母が存命の頃は、かなりのおばあちゃんっ子だつた。

故にお年寄りに対する敬老精神もそれなりに持ちあわせている。

そんなのび太の目からすれば、今の慎二と桜のやり取りに怒りを覚えても不思議はないのかもしれない。

「どうどう……まあ、兄妹にも色々あるんだろうさ。正直言つてア

イツの場合は日常からしてあだから、俺もどうかとは思ってるんだけど……ここで怒ったってどうにもならないだろ？ 慎二には今度ちゃんと言っとくからさ」

「うー……それはそうですけど……って、あれ？ 桜さんがいない？」

士郎が宥めすかした事でどうにか平静を取り戻したのび太であったが、ふと視線を画面に戻すといつの間にか玄関から桜の姿が消えているのに気が付いた。

それに答えたのは、お茶と茶菓子のどら焼きを片手に画面に見入っていたセイバーだった。

「ああ、もう奥へと引つ込みました。どこへ行つたのかまでは解りませんが……しかし、本当にのび太の出す道具には驚かされますね。今更ですけど」

「えっ、そうなの？ あ、設定が場所を固定するモードになってる……それなのか。うーん、一応これで試した事は試した訳だし……士郎さん、どうします？」

「あー、やっぱりまだちょっと心配だからもう少し見ていたいんだけど……それにしても桜はどこ行つたんだ？ ……まさかいきなり倒れたりしてないよな？」

顎に手を当てて思案気に答える土郎。

何というか、実の兄よりも実に兄らしい反応である。

「画面か時間を切り替えてみたらどう？ 出来るんでしょうび太？」

「え？ はい出来ますけど……じゃあ、三十分時間を進めて……桜さんを追うような形で映像を出すようにして……と。よし、いけっ！」

チキチキと計器をいじったのび太が再びスイッチを押す。

……が、

「あ、あれっ！？ いきなり画面が真っ白になった！？」

「んんっ？ どうしたんだこれ。故障……って訳じゃないんだよな、のび太君？」

「待つてください。ええと……うん、故障はしてないみたいだ。おかしいなあ……？」

何故か白一色となった画面にのび太は首を傾げる。

素人見立てだが“タイムテレビ”には取り立てて故障個所など見当たらなかった。

特に変なボタンを押した訳でもない……というか、そんなのび太の
与り知らないようなボタンは“タイムテレビ”にはない。

疑問符を溢れさせながらも、どうにかならないものかとのび太は計
器をガチャガチャと操作してみる。

やがてそれが功を奏したのか、キリキリとダイヤルをいじっている
うちにパツとその全貌が画面に映し出された。

……だが次の瞬間、この場は再びの caos へと変貌する。

「あつ!? し、士郎、見るなあああああ!?!」

「えつ……ぐあああああつ!? 目が、目があああああああああ

ああっ！！？ な、なんて事するんだ遠坂ああああ！！？」

「うるさい！ とにかくアンタはしばらく目を開けたらダメ！ 理由は聞くな！ いいわねっ！！？」

「いきなり両目に指突っ込まれて見える訳ないだろ！？ というか理由は聞くなって、なんでさああああああ！！？」

「やかましい！！ 乙女の尊厳のためよ！！ これ以上はなし！！
……セイバー！！？」

「大丈夫です。ノビタの目は即座に塞ぎました。そしてアーチャーは映像が映る直前に剣で叩き伏せました。まさか私の『直感』がこんな形で役に立つとは……何とも複雑です」

「……わたしも迂闊だったわ。“タイムテレビ”がこういう代物だともう前の段階で解ってたんだから、こうなる可能性もあるって予測出来た筈なのに……まあ、拠点探索にこれ以上もってこいの物もないけどね」

「え？ え？ あの、結局いったい何が映ってたんですか？」

「のび太……ハア、アンタねえ。まさかこういう犯罪行為を日常的にやってた訳？」

「はあ？？？」

セイバーに両手で目隠しをされているのび太。

両目を押さえて悶絶しながら畳の上を転げ回る土郎。

頭のとっぺんから煙を一筋立ち上らせ、うつ伏せで轟沈しているアーチャー。

小学生であるのび太に対しては手心が加えられているが、他二名にはトコトンまで容赦がない。

それも致し方ないであろう、なにせ映ったモノがモノだ。

凜・セイバーが再び視線を向けた“タイムテレビ”の画面には……。

『はあ………』

桜の艶めかしいシャワーシーンがこれでもかとかばかりにクローズアップされていた。

年端のいかないのび太はともかく、男二名は撃墜されて当然である。“タイムテレビ”の画面が真っ白になったのは、風呂場にもうもうと漂う濃い湯気のせいであった。

『……ん』

シミ一つない瑞々しい肌の上を熱いお湯が抵抗なく流れていく。

そのほんのり紅く染まった様には、たとえ同性であろうとこう……グツと惹きつけられるモノがあるに違いない。

それに時折漏れる悩ましげな吐息は、男としての本能に何かしらを訴えかけてくるような妙な響きがある。

加えて凜やセイバーにはない、女性らしい豊かな肉付きが何とも扇情で「余計な事言うな!!」「……ハイ。

ともかく、ピンポイントでこのシーンを探り当てたのび太のこの妙な強運はいったい何なのだろうか。

ある意味では、のび太は女性の敵であると言えるかもしれない。

一見見逃されそうになるが、この行為は明らかに覗き……すなわち犯罪である。

しかも頭に“性”が付く方の、だ。

その線でいえば、のび太が過去に重ねた罪はいったいどれほどの物になるのだろうか……まあ法律上、小学生に犯罪も何もないのではあるが。

第一バレたり、問題として具体的に取り上げられなければ犯罪になりようがないのだし。

「もう！とにかく検証はここでお願い!! さつさと他のサーヴァントの居場所を探るわよ! のび太、この三つをどう……って、アンタらしい加減起きなさい!」

滾る激情のまま“タイムテレビ”の電源をブチッと落とす傍ら、未

だ再起動を果たせていない男二人に凜は容赦のない言葉を叩き付ける。

きつと凜の中では、乙女の肌をタダで拝もうとした不埒者（×2）なのであろう。

……いやまあ、思いつきり事故が巻き添えなのが実情ではあるのだが。

実際は不用意に“タイムテレビ”を操作をしたのび太こそ真の元凶である……がしかし、生憎と小学生に慈悲なく天誅を喰らわせられるような神経を凜はしていない。

それにそんな事をしようものなら、せつかく守った乙女の尊厳を再び持ち出さなければなくなる可能性も出てくる。

故に怒りの矛先は逸らされ、手負いの男二人は更なるとばっちりを喰らう事となったのだ……この二人、いったいどこまで幸が薄いのだろうか？

「う……うあ……あ、ああ、やっと視力が戻ってきた。ふう、まったく……いきなりなんて事するんだよ」

両目を真っ赤にした士郎が、滲んだ涙を拭いながらブチブチと文句を垂れる。

しかし凜はそれには答えず、セイバーの目隠しから解放されたのび太に向かって口を開く。

「で、のび太。改めて聞くけどこの三つの道具でどうやって居場所を探るつもりかしら？ まあ、大方の予想はつくけどね」

「そうですね。あれだけの前振りがあれば大体は……とりあえず、聞かせて貰えますか？」

「え？ あ、はい。えっと、まず最初に……」

いったいどういう状況なのかチンプンカンプンなのび太であったが、二人の要請に疑問符をとりあえず打ち捨てて自分の考え付いた手立てについて説明し始めた。

どうにか回復した士郎も、時折目頭を押さえながら耳を傾けている。

「……む、爺さん。久しいな、こんなところにいたのか……ああ、そう必死に手を振らずとも、今そっちへ行く。色々話したい事もあるしな……」

——残りの一名は回復どころかむしろ退場しかかっていたが。

というか、サーヴァントがその手の幻を見るってどうなんだ……？

第十八話 「サーヴァント探索作戦（仮）」（前編）「（前書き）」

（今回限りの）キャラ崩壊があります。

注意されまし。

あと、別作品と微妙にクロスしています。

第十八話 「サーヴァント探索作戦（仮） （前編）」

“たずね人ステッキ”で方角を特定して拠点の見当を付け、“タイムテレビ”でその様子を観察し、確認と疑問点を“○×占い”で洗い出し100%丸裸にする。

のび太の作戦は、つまりはそういう事だった。

“たずね人ステッキ”だけでは片手落ちだが、新たなファクターを組み込む事で確実性と範囲を劇的に広げた。

これならば居ながらにして敵の居場所と詳しい情報、そして様子を探る事が出来る。

それもこれも、魔術に真つ向からケンカを売っていそうな非常識の塊たるひみつ道具のなせる業……いや、業か？

そして何より道具の扱いに対して固定観念に囚われない、のび太の柔軟な発想によるものも大きい。

下手をすれば道具の本来の持ち主よりも道具の運用に長けているくらいなのだ。

「成る程ね……わたしの予想とほぼ同じ、か。というか、よくそんな運用法思いつけるわね」

「ええ。こういった強力な代物を扱う者は得てして応用を効かせるのが苦手なものです。なまじ強力であるが故にどうしても運用に対して“思い込み”が発生してしまいがちですから。その点でいえば、ノビタの拘りのない想像力は一線を画していますね」

「え、そ、そうかな？ エヘヘヘ」

珍しく褒められた事で照れるのび太。

顔を赤く染めながらモジモジとするその様子は、はつきり言って大人であつたら通報モノである。

のび太がまだ子供だから微笑ましく映りもするが、これをやっているのが例えばアーチャーであつたならば果たして……いや、まあそれはいい。

とにかく、こうして『サーヴァント探索作戦（仮）』の幕は切つて落とされた。

言うまでもなくターゲットはランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカーの五人だ。

まずは“ たずね人ステッキ ”を立てて倒す。

その後に“ ○×占い ”を使用して、その方角に確実にいるのかどうかを断定する。

この方法ならば的中率70%（のび太談）の隙間を埋める事が出来る。

そうしてターゲットの現在地点の方角を特定したら、今度は冬木の地図を広げそこから当たりをつける。

これは現地住民であり、冬木の地理に詳しい士郎と凜が担当する。

特に凜は冬木のセカンドオーナーであるため、敵主従が拠点にしそうな魔術的要素の強い場所を誰よりも熟知しているので頼りになる。

しかし必ずしもそういった場所にいるとは限らないので、比較的表側の地理に明るい士郎もやはり重要であったりする。

そして場所を絞り込んだら再び“ ○×占い ”でいるかないかを判断し、その後にいよいよ“ タイムテレビ ”でピーピング・ト……つまりのぞ……もとい、遠距離からの敵情視察を行う。

時間を巻き戻してここ数日の時間軸を調べるだけで、ただでさえ良くも悪くも目立つサーヴァントの事、対象はかなり絞り込める。

流石に霊体化していたのなら発見は難しいが、しかしながらまったく実体化しないという事はないだろう。

霊体化は隠密行動には適しているが、代わりに物理的干渉能力が失われてしまうのです。とそのままでは色々と不都合が生じやすい。

だから少なくともくつろぎやすい拠点では多少なり姿を現す……等。

そして対象が確実にサーヴァントであるかどうかを三たび“○×占い”で判断する。

ただ“○×占い”は『Yes』か『No』の判断しか出来ないのですが、質問内容はよく考えなければならぬのがネックといえはネックだが、それくらいならどうとでもなる。

「それじゃ、どこから当たるんだ？」

「そうね……とりあえずサーヴァント順通りに、まずはランサーからいきましようか。のび太、ステッキ」

「あ、はい。どうぞ」

『トン、……カラアン』と凜はステッキを立てて倒し、“たずね人ステッキ”はその身で以て方角を指し示す。

それを受けたのび太達はすぐさまテーブルに広げた冬木市の地図と向かいあう。

「この方角は……隣の新都方面ね」

「ただ中央部から大分ズレてるな……これは、海方面か？」

「みたいね……という事は、港にいるのかしら？」

「“○×占い”で確かめた方が早かるう、凜。『ランサーは今現在、港に存在する』」

アーチャーの声にすぐさま反応する“○×占い”。

丸印がヒュンと宙に浮き、『ピンポンピンポーン!!』と正解のファンファーレが鳴る。

「え、ホントに？ あそこは特に何かある訳でもない……のに、いったいどうして港になんて……うーん？」

「リン、まずは様子を確認してみましょう。悩むのはそれからでも遅くはありません」

「……そうね。のび太、お願い」

「はい、それじゃ港に位置を合わせて……時間設定は特にしないで……と。よし、いけっ!」

“タイムテレビ”の設定をし終えたのび太が、勢い込んでスイッチを押す。

……が。

『——よっしゃ、キタアアアア!……って、またサバかよ!?! もうサバは間に合ってたんだよ! ええい、クソ!』

『あらあ、お兄さん、いいの? せっかく釣り上げたのに海に返しちやって。しかしそんな勢いよく放り投げなくてもいいんじゃないの? サバが可哀想よ?』

『サバはもう見飽きたんだよ！　そもそも釣りを始めてからこつち、釣り上げるのがサバ、サバ、サバ……サバしかいねえって明らかにおかしいだろ！？』

『いやあ、そう言われてもねえ……まあ、ボウズじゃないんだから別にいいじゃないの。お兄さん、もう三十匹くらい釣ってるじゃないのお、大漁よ？』

『サバだけをな！　漁ならともかく、釣りでサバだけってのは面白みがねえよ！　おっさんはタイにヒラメにタコに……うげ、ブリまでいやがる！？　というか、この港いつたいどうなってんだ！？　釣れる魚が節操ねえし、季節感とか色々メチャクチャだぞ！？』

『聞いた話だと冬木港は大体いつもこんなカンジらしいよお？　春夏秋冬全部通して。そういえば前回来た時はヤマメ釣ったねえ』

『そりゃ川魚だろ！？　変だっと思わねえのかよ！？』

『冬木港だしねえ。ココ、かなりの穴場よお？』

『それで納得すんな!?!』

「……何だ、これは？」

「えっと……ランサーのお兄さん……ですよね？　なんかあの時と全然イメージが違いますけど」

「いや、うん……あー、その、なんだ。『クー・フリーン』って、こんなヤツだったのか？」

「まあ、彼の武勇伝や逸話は数多いのですが……流石にこれは……」

「……イメージぶち壊しね、ある意味で」

あまりの予想外の光景に呆気にとられる一同。

“タイムテレビ”の画面には、普段着姿のランサーが港に面した海をバックに気炎、いや奇声を上げていた。

その手にはリールのない釣竿が、足元には数個のバケツと缶コーヒ―が置かれている。

そしてランサーの隣にいるのは、下っ腹のでっぱりと肥えた丸顔の中年オヤジ。

かなりのベテランなのか、竿を操る一挙一動にそつがなくキャップにサングラス、釣り用ジャケットといったアングラーファッションもエラくサマになっている。

穏やかで人のよさそうな笑みが印象的だ。

そう、誰がどう見ても一寸の狂いもなく……槍の英霊たるランサーは、冬木の港で釣りに興じていた。

しかも偶々居合わせたと思われるおっさんと一緒に、どういう訳か意気投合しながら。

とても初対面とは思えない、掛け合いのコンビネーションがなんとも秀逸である。

「……………」

今この瞬間、ここにいる五人の心は一つになった。

すなわち……。

『なにやってんだコイツは？』

ズルルと脱力する五人を余所に、“タイムテレビ”からの中継は続く。

『……おっさん、釣りはベテランか？』

『んんっ？ まあ随分やってきたねえ……フッフ、日本中色んなところ釣りに行ったモンよお。今偶々会社の出張で東京からこつちに来ててねえ、空いた時間があつたからこつちまで足を伸ばしたみたのよお。こつちに来たのは今日で三回目かなあ？』

『そうか——頼む！俺に釣りを教えてくれ！』

『え、ええっ？いきなりどうしたの？』

『このままサバばかり釣ってたんじゃ面白くねえんだよ！おっさん、俺に一つ釣りの極意を伝授してくれ！この通りだ！！』

『いやいやいや、土下座はやりすぎだよ。うん、まあこれも何かの縁だし、時間もあるから“デンワッッ！デンワッッ！デンワッッ！” あらら？ちよつと待ってね……はいもし』

『ああ、ケータイか。“アイツ”も確か持ってやがったな……デザインは成金趣味全開だったけどな。正直、アレはないわ』

『あー、どうもお疲れ様です……はい？え、あの時間は確か二時からだと……え？その前に集合？スー……じゃなかった、社長ももうそちらに？ああ！これはどうも大変申し訳ございません

！　すぐそちらに向かいますので……はい。もうドモドモ、誠にすみません。それと、あの……ワタクシの名前なのですが、『ザ』ではなく『サ』と申します。……はい、『ザ』ではなくて『サ』です。はい、よろしくお願い致します……はい、失礼致します……ふう』

『どうしたんだ？』

『ゴメンね、時間間違えててさあ。急に戻らなきゃならなくなっちゃったのよお。仕事の予定がねえ』

『……あー、そうか。おっさん、勤め人だったか。仕事じゃしょうがねえな』

『いやホントゴメンねえ。あ、そうだ。教えられないお詫びと言ったら何だけど、ココでの釣りのコツをちよつとメモに書いておくからさあ、それで一回やってみなよ。ちよつと待っててね……はいコレ』

『おお！　すまねえおっさん、恩に着る！』

『お兄さん中々スジがいいから、ちょっとやったらすぐ身に付くと思うよお。ま、頑張ってね』

『おう！ 絶対サバ以外のヤツを釣り上げてみせるぜ！ おっさんも仕事頑張れよ！』

釣り道具とクーラーボックスを抱え、サムズアップしながら去りゆくおっさん。

その背後には、「よっしゃああ！ 待ってるよタイにヒラメにタコオオオオオ！！」と威勢よく釣竿を振り下ろすランサー。

……ケルト神話の大英雄としての威厳など微塵もない、ただの釣りバカ兄ちゃん^{アン}と化したランサーの姿がそこにはあった。

「……次、いきましようか？」

「……そう、ですね」

「……ああ」

「……はい」

「……うむ」

先日とは違う、ランサーのあまりのアレさに芯から吞まれてしまった五人。

脱力の極みに達して本拠地を探る事もマスターを特定する事も頭から完全にすっ飛び、状況判断もままならないままフラフラと次の標的への移行を決定してしまった。

勢い込んだ初っ端がこれでは無理もない。

……“タイムテレビ”の時間を巻き戻せば、根城もマスターもすぐさま判明していたのだが。

幸か不幸か、本人の与り知らぬところでランサー（+そのマスター）はひみつ道具の魔の手から辛くも脱出していたのであった。

とにかくにも、次の標的は騎乗兵のサーヴァント……ライダーだ。
“たずね人ステッキ”を立ててカラリと倒すと、とある方向を指し示す。

即座に“○×占い”でこの方角であっているかどうかを確認、そして正解と出たので再度五人は地図へと向かい合う。

「これは……新都じゃなくて深山方面ね」

「でも商店街からは少しだけズレてるし……あれ？ 待てよ……これって、まさか！」

突然、弾かれたように地図から顔を離した士郎。

四人が訝しむのも構わず、士郎は“○×占い”に飛びついて命題を口にする。

「『ライダーは……今、穂群原にいる』！」

そして鳴り響く大正解のファンファーレ。

途端、士郎の顔がサツと蒼白に染まった。

「やっぱりか！？ のび太君、今すぐ穂群原学園を映してくれ！」

「え、えっ！？」

「早く！！」

「は、はいっ！？ え、と場所は「ここっ！」あ、はい！！」

鬼気迫る表情をした士郎からの矢の催促に、のび太は内心焦りながらも“タイムテレビ”を操作する。

やがて“タイムテレビ”の画面に白亜の校舎と、いつもと変わりの教室での授業風景が映し出された。

その瞬間、士郎の口から大きな溜息が漏れる。

「よ、よかった……まだ何にも起きてないみたいだな。これは、リアルタイムか？」

「はい、いきなりだったもので……でも、本当にここにサーヴァントがいるんですか？ それらしい人は見当たらないんですけど……」

各教室を次々と流し見るように移行する映像を眺めながら、のび太は疑問を口にする。

教室内では教師が黒板にカツカツと板書をし、生徒はそれを受け、肅々とノートにペンを走らせている。

「“○×占い”によるとそのようですから、きっと今は霊体化しているでしょう。こうなると発見は困難ですね」

顎に手を当てたセイバーが唸るように呟く。

セイバーの言葉は的を得ている。

いかに“タイムテレビ”といえども、姿の見えない相手まで映し出す事は不可能である。

そもそもサーヴァントは特性としては幽霊に近い。

霊体化するという事はつまるところ幽霊状態になるという事とほぼ同義であり、当然ながらテレビが幽霊など映し出せる筈もない。

仮に映ったとしてもそれは精々、どこぞのホラー番組レベルが関の山であろう……どこことなくぞつとしない話だ。

オマケに……。

「誰がマスターかも特定出来ない……人の数が多いし、そもそも学校の中にいるのかどうか……可能性はくないけどさ」

『木を隠すなら森の中』。

人間を隠すのなら人間の中に隠す方がより見づかりにくくなる。

そこに目当ての人間がいようといまいと、だ。

教職員、生徒、事務員、用務員、その他諸々……とにかく学校という場所は人が大勢存在し、更に離合集散も頻繁に起こるため探索するにはかなりの難所だ。

何か一つヒントでもなければ、状況を打開出来そうにない。

「いえ、多分……いるわ」

「「え？」」

と、唐突に口を開いたのは凜だった。

“タイムテレビ”の画面から視線を外し、二人して首を傾げつつ顔

を見合わせあうのび太と土郎。

固い表情で画面を睨む凜から発せられたその言葉は、まるで確信があるかのように凜とした響きを持っていたからだ。

そしてそれに疑問を感じたのは傍らのセイバーも同じであつた。

「リン、何故そうだと言い切れるのですか？」

「アテがあるのよ……確証はないし、可能性に過ぎないけれど。アーチャーには前に話した事があつたかしらね？」

「いや、特に覚えはないが……ちなみに、その根拠はどこから？」

「冬木のセカンドオーナー……いえ、『始まりの御三家』からの物よ……」

凜はそつと瞑目すると、“○×占い”に向かってこう呟いた。

「『ライダーのマスターは、間桐慎二である』」

直後、肯定のファンファーレと共に丸印が浮かび上がる。

それを受けた凜は「やっぱりね……」と深々と溜息を吐いた。

「そ、そんな……慎二が……!？」

「え、えっ？ あ、あのワカメみたいな頭のお兄さんが!？」

「——ブフッ!？」

と、思っただけのび太の言葉で盛大に吹き出した。

押さえた手の隙間から漏れた飛沫がキラキラと宙に舞う。

のび太の表現が的確すぎたのか、どうやらツボにハマったらしい。

ブルブル震えながら必死に込み上げるモノを噛み殺すその様、口元の手を離せば大爆笑のフルコーラスであろう事は想像に難くない。

「……おい。遠坂、帰ってこーい」

悶える凜を前に驚愕の体もどこへやら、呆れすら混じった士郎から

の呼びかけに、喘ぎ喘ぎながらも凜は姿勢を整える。

しかしまだ時折ピクツ、ピクツと肩が上下している……そこまでか。
なんかもつ、色々と台無しである。

「……くつ、くつ……ふ……はぁぁ」

「落ち着いたか遠坂。で、どうして慎二がマスターだと解ったんだ？」

「あ、ああ……それはね、慎二が間桐家の人間だからよ」

「は？」

士郎の目が点になる。

凜の言わんとしている事が解らないのだろう。

のび太やセイバーもおおよそ似たり寄つたりの反応である。

その反応を半ば予想していたのか、凜はさらに自らを落ち着かせるように一息を漏らすと、徐に説明の口火を切った。

「間桐家はね、代々続く魔術師の一族なの。そして、この聖杯戦争を作り上げた一族の一つでもある」

「えっ……聖杯戦争を？」

「作り上げた？」

ポカンとする士郎とのび太に一つ頷いてから、凜は言葉を続ける。

「『始まりの御三家』って言ってね、今から二百年ほど昔に魔術師の大家である三つの家系の人間がそれぞれ協力して聖杯戦争を作り上げた。間桐家はそのうちの一つよ」

「……成る程、つまりはあの少年が主催者の家系の人間だからサーヴァントの……ライダーのマスターである可能性があった、と」

「そ。もつとも、間桐家は代を重ねる毎に魔術回路が枯れていつちやって、とうとう慎二には魔術回路が発現しなかった。つまり魔術師として完全に終わっちゃった訳なんだけど……」

「サーヴァントを召喚出来る下地くらいは残っているかも、という事か」

「アーチャー正解。腐っても『始まりの御三家』の一よ。没落したところで門外不出の魔術資料や希少な魔術具ぐらいは存在してるだろうっしね」

凜の言葉に互いに頷き合う一同。

“○×占い”の結果を鑑みれば、実に納得のいく話である。

「……あ、そういえば」

と、ふとのび太が思い出したようにポンと膝を打つと、凜の方に向き直った。

「あの、さっき凜さん『始まりの御三家』って言いましたよね？という事は、あと二つ家があるハズですけど……それってどこなんですか？」

「ああ、それ？ 一つはアインツベルン……昨日戦ったバーサーカーのマスター、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンの実家よ」

「え？ あの娘のか？」

「そうよ。で、最後の一つが……わたしの家よ」

「……、は？ 凜さんの？」

「遠坂家は、冬木の霊地を代々管理してきた魔術師の家系……だからこの名家であり、冬木のセカンドオーナーなのよ」

人差し指を立て、したり顔で告げる凜。

明かされた意外な事実にのび太も土郎も、感心と驚きでポカンと間の抜けた表情を晒している。

それに対し、セイバーとアーチャーだけは特に変わった反応も見せず、平静を保ったままであった。

「ま、それはともかくとして……問題はもう一つあるわね」

「もう一つ?」

「……士郎、まさかアナタ、学校で何も感じなかったのかしら?」

「はあ?」

眉間に皺を寄せた凜からそっと目を逸らすと、士郎は虚空に視線を彷徨わせる。

つい昨日まで自分がいた学校について、果たしていったい何を感じるというのだろうか。

そんな思考を脳裏に巡らせながらしばらくボンヤリとしていた士郎であったが、不意に視線を戻すとやや自信なさ気に呟いた。

「ええと……なんか、皆元気がなかったような……?」

至って普通の回答。

あまりにもありきたりすぎるそれ、絶対合っていないなと士郎は心の中で自嘲する。

しかし士郎には他に心当たりなどないのだ。

「土郎さん、それってすごい普通じゃないですか？」

「まあ、そつだよな……合ってる訳ないよなあ」

のび太のツッコミにうんうんと頷く土郎。

だが。

「……正解。よく解ったわねアナタ」

「「アララララッ!？」」「

予想を裏切るまさかの正解であった。

「合ってたのかよ……」

「まあ半分だけ、けどね。率直に言うと、学校に結果が張られているの。そのせいで学校にいる人間は生気がなくなっているって訳」

「けっ……かい？」

首を傾げ、疑問符混じりに復唱するのび太。

凧は頷きを一つだけ返すと、そのままスツと“タイムテレビ”を指差した。

「そんなものを張った犯人は……もう見当がつくわ。“○×占い”を使うまでもない。のび太、今からわたしが言う場所の映像を、高速で時間を巻き戻しながら映してちょうだい。百聞は一見に如かずよ」

「は、はあ……？」

疑問は尽きぬも、のび太は凧の指示通り“タイムテレビ”を操作する。

やがて画面に映し出されたのは、とある教室の一角であった。

……そして映ってから一秒と経たずに、今度はその映像が物凄い勢いで時の流れを逆走し始める。

ビデオの巻き戻しなどというチンタラしたものではない。

スロットマシンの高速回転並みの勢いである。

昼夜の明暗の切り替えもほんの一瞬だけ、人の移動などまさに刹那の間。

そんな具合に映像は目まぐるしく一日、二日、三日と時間を遡ってゆく。

そうして映像の中で何日間か巻き戻された頃に、

「ここっ！ のび太、止めて！」

「はっ、はい！」

画面を食い入るように見つめていた凜からの指示でのび太が巻き戻しをストップさせ、映像の流れが通常時に戻された。

ここにいる全員がかぶりつくようにテーブル上のモニター前に集合。操作するのび太を中心に、身を寄せ合うようにしながら画面に釘づけとなる。

「……やっぱりね。ビンゴか」

場面は今より数日前の黄昏時。

そこに佇んでいるのはたった二人の男女。

一人は先程、間桐邸の玄関先で見た間桐慎二。

そしてもう一人、女の方かというと……。

『……チツ、ここもか。ここまで基点を壊してくれちゃってまあ……腹が立つなあ。まあ、どうせやったのは遠坂辺りだろうけど……直せ、ライダー』

『……。はい、シンジ』

足元まで届く紫の髪。

黒いボディコンシャスな衣装。

女性にしては高い上背と、それに見合った女性らしい豊満な体躯。

何より異質なのがその両の目を覆う、禍々しい眼帯。

極め付きはその身に纏う、どこことなく常人とは隔絶した雰囲気……明らかに人間の放てるモノではない。

——彼女こそが騎兵の英霊、ライダーのサーヴァントである。

『——ブラッドフォート 他者封印・鮮血神殿アンドロメダ』

一歩進み出し、右手の人差し指を高々と天に掲げながら言葉を紡ぐライダー。

その瞬間、空間がほんの一瞬だけ瞬きを見せ、次いでコンクリートの床の上に奇妙な光る紋様がボンヤリと浮かび上がった。

……だがやがてそれも徐々に消えてゆき、後には元のひっそりとした静寂のみが残る。

『……終わりました』

『これでは三回目か……まったく、余計な仕事を増やしてくれるよ遠坂は。それで、破壊された基点はこれで全部か？』

『はい。しかしこれで結界の完成にはさらに日数が必要になりました』

た
』

『……ふん。発動自体は可能なんだろう？』

『……一応は。ただし効率は激減する上に時間もかかる事になります
が』

『まあ、今はそれで構わないさ……使う必要がないのならそれはそれでいいし、あくまでコイツは保険だからね。さて、用は済んだし……ライダー、霊体に戻れ』

『はい』

淡々と、唯々諸々と従う彼女。

やがてスウツとその姿が見えなくなったかと思うと、慎二は踵を返して教室から音もなく立ち去って行った。

「……ああ、予想通りの展開とはいえ、何となく後味が悪くなるわね。知人がこんな事してるのを直に見ると」

画面から目を離し、溜息交じりに呟く凜。

「慎二が……本当に……」

その横では、士郎がいまだ呆然とモニターに映る教室を見つめている。

そしてさらにその横ではセイバーとアーチャーが顎に手をやり、思索に耽っていた。

「あれがライダー……ですか。女性で、しかも眼帯をしている……むう。正体は、なんなのでしょうか……」

「……あれだけタチの悪い結界を仕掛けている以上は、十中八九『反英雄』だろう」

「タチの悪い……ですか？」

のび太の疑問の言葉にアーチャーはうむ、とひとつ頷いてから説明を始めた。

曰く、ライダーが張った結界は『吸収型』の結界であるという事。

曰く、『吸収型』の結界は軌道したが最後、結界内のあらゆる生物を魔力に還元してしまうものであるという事。

曰く、凜たち主従は数日前から結界の基点の一部を見つけてはこれを破壊し、結界の完成を妨害してきたという事。

「はぁ……でも生物を魔力にするっていったい……？ うーん、時間を進めたらどんなのか解るかな？」

今ひとつ理解の及ばなかったのび太が実際の物を見てみようという「タイムテレビ」の計器に手を伸ばす。

だがダイヤルに手が届こうとしたところで、アーチャーの腕がそれをガッシリと抑えた。

「止めておきたまえ少年、君には刺激が強すぎるだろう。賛同しかねる」

ゆっくりと首を横に振りながら諫めるアーチャー。

凜はそれを見て僅かに首肯する。

「夜中に魘されても知らないわよ？ いえ、それで済めばいいけどね」

「え……？」

「ドロドロにただれた皮膚、死んだ魚のような目、苦しみの絶叫と怨嗟の呻き……それが校舎のあちらこちらで。未完成で発動させたとしてもこれぐらいにはなるでしょうね。まさに地獄よ。拳句、数分後には学校内の全員が完全に溶かされて消化される……完全な物だと人間が一瞬で蒸発するわ。アナタそんなモノ見て平気？」

「い、いややややや！？ 無理です、無理ですそんなの！」

首をブンブンと高速で横に振りながら否定するのび太。

そんなB級ホラーも真つ青の場面を見せられれば、トラウマどころでは済まないだろう。

なにせのび太はホラー物に対しててんで耐性がないのである。

その必死な様子に凜は僅かに苦笑を漏らし、『それでいいのよ』とばかりに何度も頷きを返す。

「なら止めておきなさい。無駄にトラウマを作る事はないわ……もう既にバクダン一個こさえちゃってるんだし。それから一応言っとくけどこれから先、過去はともかく、未来の事はなるべく見ないようにするわ」

「え？ どうしてだ遠坂？」

凜の発言の意図が解らず、士郎はつい尋ね返してしまう。

あらゆる時間軸を見通す“タイムテレビ”ならば、未来を見る事などダイヤルを捻るだけで事足りる。

そして未来の情報は、間違いなくこちらを有利にしてくれる筈なのだ。

敵の情報は勿論、この戦争におけるターニングポイント、この先どのような危険が待ち構えているか、相手がどんな事を仕掛けてくるのか、ありとあらゆるすべてが詳らかにされる。

それはつまり常に相手に先んじて先手を取り続けられるという事と同義。

しかし凜はそれを敢えてしなと言い切った。

この言葉の示す真意とは一体……。

「前にも言ったかもしれないけど、未来は不定形……定まっていな

いの。私見だけど、“タイムテレビ”は現時点で最も行きつく可能性の高い未来を映し出すシロモノなんだろうね。確かに未来を覗く事によって得られるアドバンテージは計り知れない……でもね、デメリットもあるのよ」

「デメリット？」

「そう。一つは、言ってしまうえば『思い込み』による弊害よ。例えば“タイムテレビ”で見たある事柄……それが自分達に都合のいいものであって、その未来に沿うように自分達が動いたとする。けれど仮に一連の流れが“タイムテレビ”で見たものと僅かでも違っていた場合、多分『これはこうじゃなかった筈』、『あれはああだった筈なのに』と混乱するでしょうね……そうなると下手すれば全部がおじゃんになるわ。未来に振り回されるようになる可能性があるのよ。未来の分岐点はどこにあるのか誰にも解らないんだから、分岐予測なんてまず不可能。それならいつそ知らない方がいい」

「……む、う」

「まだ理由はあるわ。“タイムテレビ”がもし自分達にとって最悪の未来……例えばこの中の誰かが死ぬとか……そういった物を目にして『こうならないように何とかしよう！』と思えるならまだいいでも、思えなかったら？ 絶望に押し潰されたら？ ……先に心が折れたら間違いなく終わりよ。どれだけ身体が無事でもね。この過酷な状況下で心が折れる事はすなわち“敗北”と同じ。特にそうなりそうな人間がこっちにはいるしね」

「……………」

次々放たれる凜の言葉に士郎は何も言えなくなった。

確かにメリットの方にばかり目が行っていて、デメリットの方にはまったく考えが及んでいなかった事を士郎は今更ながら自覚する。

未来を知るという事は、『未来の情報』という固定観念が入り込むという事。

それを上手く扱いこなせれば問題はないが、それが出来るかと言えば全員首を横に振らざるを得ないだろう。

アドバンテージが大きすぎる故に、つついそちらに意識を引き込まれてしまうのだ。

のび太も、士郎もまさにそうであった。

ある意味では、メリットそのものがデメリットであるとも言えるのである。

「解った？ 未来を知るという事は何もいい事ばかりじゃないの、むしろメリットが大きければ大きいほど潜在的なデメリットも増す。未来を見ないと言ったのはつまりはそういう事よ」

「……むう。言われてみれば、筋は通ってる」

「それに、過去だけでもアドバンテージはそれなりにあるわ。過去は未来と違って既に固定されているからね。覆しようがないもの。そこから得られる情報だけでもこっちは断然有利に立てる。勿論相手を丸裸に、とまではいかないだろうけれど、警戒の指針を立てる事と能力確認、相手の真名を推測するくらいは出来る」

「成る、程……解った。のび太君も、セイバーも、アーチャーもそれでいいか？」

二度三度と納得したように首を上下させた士郎が三人を振り仰ぐ。

「私はそれで構いません」

「余程の無謀でない限りは、主の方針に従う。それに私も同意見ではある。吝かではない」

「僕もそれでいいです……あんまり意味は解らなかったですけど」

そうしてひみつ道具による探索は続く。

凜の警告により未来を覗かない事にした一同ではあったが……それ

は幸か不幸か、正解であつた。

何故ならば“タイムテレビ”の影には……。

『ほおお、未来は見ねえときたか……ハッ、オレの事がバレねえよう、道具パチった時にわざわざテレビの機能いじって返してやったつてのに、大半がムダになっちまったじゃねえか。まあ、仮に未来に時間軸を合わせたところで、改竄された欺瞞情報しか映らねえようになつてつから、いいカンしてやがるぜあの小娘！——オレがスポットを浴びるには、まだまだ時期が早すぎるからなあ。ケケケケケ……！！』

この『闇』の暗躍があったのだから。

第十九話 「サーヴァント探索作戦（仮） （中編）」

ライダーの探索に一区切りをつけ、さて次の標的はキャスターである。

“たずね人ステッキ”を倒し、方角を見て“○×占い”を使用したところ、肯定のファンファーレが鳴った。

そして地図へと向かい合う……最早パターンである。

「この方角は……お山の方だな」

「もしかして……柳洞寺!？」

ハッとしたような凜の声。

その顔にはどうしようもない危機感と焦燥感がありありと浮かんでいる。

「遠坂、どうした？」

「どうした、じゃないわよ！ ええと……っ！ 『キャスターは柳洞寺を拠点にしている』！」

何かに急ぎ立てられるように、凜はやや早口に“○×占い”に命題を告げる。

果たしてその答えは……予想に違わず、肯定。

「ッ！？ ……くっ、やられた。これは……ちよつとマズイわね」

ファンファーレが鳴り終わると同時、凜はどっと疲れたように肩を落とした。

「？ マズイって……何がまずいんですか？」

不思議そうに尋ねてくるのび太に、ユラリとやや億劫そうに顔を上げ、口を開きかける凜。

だが予想に反して、疑問に答えたのは発信源の傍らにいたセイバーであつた。

「……柳洞寺はこの冬木の地の龍脈の終着点。つまり、魔術師にとつてはこれ以上なく重要な場所という事です、ノビタ」

「はあ……龍脈？ えっと、セイバー、重要ってどういう風に？」

「そうですね……順を追って説明するなら、この冬木の街一帯には自然界の魔力の通り道がいくつか走っています。下水道をイメージして貰えれば解りやすいかと。それらが最後に行きつく場所がここ、柳洞寺なのです」

地図の一点、冬木市の最西端にある山の頂上に建てられた柳洞寺を指さしながらセイバーが訥々と語る。

のび太と、ついでに士郎は時折ふむふむと頷きながら説明を肅々と聞いている。

アーチャーは相変わらずの腕組みをしての瞑目……どうやらこの事情は凜から聞いたかしておおよそ知っているようだ。

「……………」

しかしながら……凜だけは一人、違っていた。

聞き入るでもなく、聞き流すでもなく——その表情は、ただただ訝しげに歪められていたのだ。

「魔力の通り道が最後に集まる場所……それはつまり、そこに莫大な量の魔力が集まる事を意味しています。そして魔術師は魔力を操り、力を振るう……もう解りますね？」

「……えつと？」

「成る程。上手くすれば魔力切れを気にする事なく、魔術を行使出来るって事が……」

首を捻るのび太に代わって、士郎がポツリと答えを口にする。

セイバーはそれに首肯する事で答えを返した。

「はい。特にキャスターは魔術師の英霊、こと魔力や魔術の扱いに長けています。鬼に金棒どころの話ではありません。さらに言えば柳洞寺一帯には自然霊以外を遮断する結界が張られています。唯一潜れるのは正門からのみ。サーヴァントにとってある種の鬼門なのです」

武器弾薬等の補給の必要などない要塞に立て籠もられたようなものである。

加えて防御に回ればおそらく鉄壁であるが故に踏み込むのも容易ではなく、不用意に突っ込めばあっという間に全滅であろう。

無尽蔵に近い潤沢な魔力エネルギーというのは、魔術師にとってそれだけで垂涎ものの価値のあるシロモノなのだ。

勿論、制御するのは並大抵の事ではないが、キャスターならば難なくやってのけるだろう。

「うーん、“無敵砲台”に立て籠もったスネ夫みたいなもんかな？」

「はい……？ まあ、そんな感じかと」

「いやセイバー、それ意味解って言ってるの「ちょっといいかしら？」……遠坂？」

と、突然会話の流れを遮って割って入ったのは凜。

眉間に皺をこれでもかと寄せ、セイバーにやや不躰な視線をぶつける。

「セイバー、アナタ……どうしてそんな事を知ってるの？」

「……そんな事、とは？」

「龍脈とか、結界の事よ。聖杯からの知識じゃないわね。アーチャ

「はわたしが話すまで知らなかったから。納得のいく説明、して貰えるかしら？」

「……………」

ほんの少しだけ、セイバーは逡巡した様子を見せる。

しかしそれも一瞬の事、やがてスツと視線を上げると、こつ口を開いた。

「…………私がこの時代に召喚されたのはこれが初めてではありません」

「え…………？ セイバー、それって「故に、記憶の中にその知識がありました。それだけの事です」…………成る程。それ以上は話さない…………いえ、話せないという事かしら？」

「…………、はい」

凜の追及を無理矢理に遮り、語りを終えたセイバー。

その表情は鉄仮面でも被ったかのような無表情…………内心を探り取らんとするにはいささか強固に過ぎる。

凜はしばらくの間、突き刺すような視線をセイバーに送り続けてい

たが……、

「……ふう。いいわ、今はそれで納得してあげる」

これ以上は無意味と判断したのか、溜息交じりに矛を収めた。

そんな凜に対し、セイバーは軽く頭を下げる。

「助かります」

「言つとくけど、いつかは話してもらうからね。利息として、アナタの真名も込みで」

「後半は承諾しかねますが……ともかく、語るには今は時期が悪い。時が満ちれば、必ずお話しする事を約束します」

「……そう、期待しないで待つ事にするわ」

そして僅かの沈黙。

シンと静まり返った居間の空気は、どこか居心地が悪い。

「……さて、変なところで脱線しちゃったから話を戻すわよ。のび太、柳洞寺の映像を出してくれる？ ……って、アンタらいつまで呆けてるの？」

凜はそんな空気を振り払うように視線を再び元へと戻したが、いまだポカンとしたままの士郎とのび太を視界に収めると呆れたような声を上げた。

「いや、だって……ねえ、士郎さん？」

「ああ……いきなり話が別の方向に行っちゃったし、元はと言えば遠坂が脱線させたんじゃない……まあ、いいけどさ」

顔を見合わせあい、ブチブチと何事かを言い合う二人。

しかし時間ももうそれなりに経っているのでそれ以上は何も言う事はなく、のび太は“タイムテレビ”を操作するため、画面と向かい合う。

「えーと……柳洞寺に座標を合わせて……時間設定はどうします？」

「……そうね。とりあえず、今現在の柳洞寺を映してくれる？」

「解りました……よし。これで……いけっ！」

のび太がスイッチを入れると、“タイムテレビ”の画面に荘厳な雰囲気のお堂と境内が映し出された。

真冬の平日という事もあり、これといった参拝客もおらず閑散としている。

そしてお坊さんの姿も特に見受けられない。

お堂の中に籠っているようだ。

「うわぁ、大きなお寺だなぁ……」

「結構な歴史のある寺だからな。……うーん、パツと見る限りじや特に異常はないみたいだな」

「いえ、キャスターなら人知れず何らかの処置を施す事も可能でしょう。中がどうなっているのか、まだ解りません」

「そうね……むしろ変わりがなさすぎるのが不気味ね」

「ふむ……少し時間を巻き戻してみてはどうだ？　まずはその辺りから探りを入れてみない事には始まらない」

「そうですね……じゃあ「なあ、のび太君」……はい？」

と、のび太が計器に手を伸ばそうとしたところで隣の士郎から声がかかる。

「ちょっと、俺がいじってみてもいいかな？ “タイムテレビ”」

「え？」

好奇心の混じった声で“タイムテレビ”を操作させてほしいと頼み込む士郎。

実を言うと、未来の道具を触ってみたいと士郎は今朝からずっと考えていたのだ。

その証拠に、視線はさっきから“タイムテレビ”の計器部分へとジツと注がれたままとなっている。

とりわけ士郎は機械いじりを趣味としているため、未知の機械に触れるという誘惑には抗いがたいものがあるのだろう。

気持ちは解らなくもない。

「あ、はい。いいですよ」

そんな興味感心丸出しの様子を見て取ったか、のび太はスツと立ち上がって、快く“タイムテレビ”の前を空ける。

士郎はのび太に『ありがとう』と軽く頭を下げると、“タイムテレビ”の前に腰を下ろした。

「操作の方法を教えますね。まずこのボタンは……」

「ふんふん」

のび太の説明に逐一頷きを返しつつ、士郎はテキパキと計器を操作して映像の時間を巻き戻していく。

そしてついでに視点も境内から別の場所へと変え、時間的に今日の早朝あたりになった頃に巻き戻し操作をストップさせた。

意外な事にのび太の教え方が的確で、要点をしっかりと押さえていたものであったため、特に操作に混乱するような事もなく終始スムーズであった。

「えーと……ここは離れの辺りだな」

映し出されたのは柳洞寺の奥まった場所、住人の生活する居住区画の傍にある井戸端。

昇りかけの朝日が薄明かりを射し始める時刻。

そこでは、今しがた起床したばかりと思われるお坊さんの姿がチラホラと垣間見られた。

歯を磨く者。

顔を洗う者。

ラジオ体操を行う者。

『ハツハツハツハ！ 今日も清々しい朝だ！』と諸肌脱ぎで快活に笑いながら物凄い勢いで乾布摩擦に取り組んでいる者……様々である。

「——って零観さん、アナタ朝っぱらから何やってんですか……。いや、まあ朝の行動として間違っではいませんけど、スゲエジグくさい……まだ二十代なのに」

「あの、このお坊さんとお知り合いなんですか？」

「クラスメイトのお兄さんなんだよ……あ、一成だ」

「……うげ」

と、画面横から新たに現れた眼鏡の少年に士郎と凜が反応する。

しかし、その声音と含まれるものについては随分と対照的ではあるが。

普段着姿で現れたその少年は縁側の石段にあつた草履を履くと、井戸端へと近づいて水を汲み、口を濯ぎ始めた。

「この人が士郎さんのクラスメイトの人ですか？」

「ああ。フルネームは柳洞一成って言ってな、全てにおいて真面目なヤツで穂群原の生徒会長も務めてる。ついでに言えば……あー、大きな声じゃ言えないけど……遠坂の天敵だ。顔を合わせる度によく喧嘩してる。今の遠坂の反応、聞いただろ？」

「凜さんとケンカ……？」

「ん。と言っても特に殴り合いとかはしないけどな。ただお互いに皮肉のマシンガンだよ。一成、遠坂の事を“女狐”だとか色々言ってるし……見てるこっちの肝が冷えるなあ、あれは」

「はあ……なんか意外ですね。この人、人の悪口を言いそうなタイ

プには見えないし……」

「本人達が言うには、お互いにムシが好かないらしい……っと、いや悪い。だからそんな睨むなって、遠坂」

ジトつと刺すような視線を感じた土郎、慌てて振り返ると眉間に盛大に皺を寄せた凜がいた。

『黙りなさい』とその据わった眼が訴えて……いや、命令している。おそらく“タイムテレビ”越しとはいえ不倶戴天の仇敵の姿を目にした事で、無意識的に気が立っているのだろう。

下手すれば殺気すら籠っていきそうな、不機嫌の極みに達したそれ……土郎の背筋に、人知れず冷たい物が流れた。

『どうやって機嫌を戻したものでろう……』と土郎が頭の片隅で割と必死に思索していると、

「——あつ！？　ちょ、ちょっとこれ見てください！！」

唐突にのび太の声が上がった事で、ジワジワと冷たくなっていた空気が一瞬で吹き散らされた。

「どうしたのび太君？」

「何か見つけたのですか？」

「あの、ここ！ この人！！」

皆が一斉にのび太の指差した方へと注目する。

視線が向かうは“タイムテレビ”の画面左側、そこに新たに映っていたのは……。

『——おはようございます』

『『『『おはようございます！』』』』

紫のローブを身に纏った、妙齡の異国の美女であった。

縁側から楚々と井戸端に降りるその女、その場にいた僧達が一斉に

挨拶をする。

女は軽く手を挙げる事でそれに応えると、井戸から水を汲みあげ始めた。

「……この女の人、怪しくないですか？」

のび太が振り返ると、皆一様に頷きを返した。

「……確かに、お寺にはミスマッチだよな。この人」

「修行僧や尼さんって訳でもなさそうだしね……」

「そもそも顔立ちが西洋系、髪の色も耳の形も特徴的ですし……何より纏う雰囲気は異質です。少なくとも一般人ではないようですね……おそらく、この女性が――」

「――キャスターのサーヴァント、か。……む、一成とやらが女に近づいていく……」

アーチャーの指摘に映像が二人を対象にクローズアップされ、再び皆の視線が“タイムテレビ”の画面へと集まる。

全員が一言一句聞き漏らすまい、一挙手一投足すら見逃すまいとでも言わんばかりの気の傾けよう。

画面に穴が開くのではと思ってしまっただ。

『おはようございます』

『あら、おはようございます。……お早いですのね』

『いえ、いつもこの時間には起床しています。寺住まいですので、自然と朝が早くなるのです。零観兄などはああして皆より少し早く起床して、冬の日課である乾布摩擦をやっています』

『……そ、そうなのですか。健康的ですわね』

「あれって日課だったのかよ……」

深々と脱力する士郎。

画面に映る女性…… キヤスターもやや表情が引き気味である。

画面から外れた遠くの方から『うむ、もう一セットいくか！ ハッハッハッハ！』と威勢のいい声が聞こえてくるのが更なる脱力を誘う。

しかし、そんな些事にも一切頓着する事なく、映像は淡々と流れ続ける。

『……そういえば、宗一郎兄はまだ起床されていないのですか？』

『いえ、宗一郎様は既に起きていらつしやいます。何やら学校関係の書きかけの書類があるとかで、三十分ほど前に起床されて文机に向かつておられます』

『そうですか…… ふむ、今は何かと忙しい時期ですからね。宗一郎兄は生徒会顧問を務められておりますから、仕事が中々に片付かないのでしょう。生徒会長として、何か手伝える事があればよいので

すが……』

「生徒会顧問？　って事は、一成の言ってる『宗一郎兄』って……」

「——倫理の葛木先生でしょうね。他に該当者がいないもの。……でも意外。あの人柳洞寺に住んでたのね」

「……えっ、と、士郎さんと凜さんの知ってる人なんですか？」

「ん？　ああ、うちの学校の教師だよ」

士郎と凜の通う穂群原に務める倫理担当教諭、葛木宗一郎。

寡黙で朴訥、何事においても生真面目すぎるくらいに真面目にこなす、ある意味穂群原の名物教師である。

その固い為人ひととなから変わった逸話も多く、代表的な物では試験中にも拘らず、プリントに不備が見つかったので試験を突如中止にしてそれを回収した、といったものがある。

「ふわぁ、変わった先生なんですなあ。僕の担任の先生も真面目でカタブツだけど、こうはいかないや。……でも、試験を中止にするなんて……なんていい先生なんだろう！」

士郎の説明を聞き、まだ見ぬ葛木教諭に尊敬の念を送るのび太。

どうも『テストを中止にした』のくだりがのび太の琴線に触れたようだ。

何しろのび太の担任の先生をして試験を中止にさせるには、真面目にひみつ道具の力を借りなければならぬほどなのだから。

それと比べれば多少の不備程度で試験を中止にする葛木の方が、のび太にとってよほど理想的に映ったとしてもおかしくはない。

別にのび太も担任を嫌っている訳ではないのだけれども……なんだかんだでいい先生なのだから。

おいおい、と苦笑する士郎。

しかし次の瞬間、その微妙に緩んだ空気が一変した。

『——いいえ、心配には及びません。宗一郎様が無理をされな
いよう、私が常に目を光らせておりますので。何しろ——
——私の、愛する婚約者なのですから』

「「「「「!?!?!?!」」」」」

ギリ、と場の空気が固まる。

『婚約者』と……『愛する婚約者』だと、確かに聞こえた。

この意味するところ……まともに受け取れば何の変哲もない惚気
であるが、この女がサーヴァントであるのなら……それは、一つ
の可能性を示唆する物となる。

皆を代表するかのよう凜が“○×占い”の方に顔を向けると、—

言呟いた。

「『キャスターのマスターは……葛木宗一郎である』」

浮き上がる。印、そして響くファンファーレ。

……ここに一つの結論が出た。

「葛木先生が……マスター」

呆然と呟く士郎。

何の因果か顔見知りが次々と己が敵になっていく、その事実打ちのめされた表情を晒けだす。

……しかし、傍らの凜の反応はやや違っていた。

やや訝しげに、何かおかしいとでも言うように画面をジッと見据えている。

彼女の勘にピンと引っ掛かるものがあったのだ。

「……、でもおかしいわね。葛木は魔術師じゃない。偶然魔術回路が発現した訳でもなさそう。なのにキャスターを従えている……どういう事？」

「え？ あの、それって何か変なんですか？」

のび太の問いに対し、凜は渋い顔で頷く。

「サーヴァントを召喚出来るのは魔術師だけなのよ。召喚術自体が魔術……それも大魔術に分類されるものだから。逆に言えば、魔術師でなければ召喚を行えない。その点から言えば慎二も魔術師じゃないから本当は不可能なんだけど、家が家だもの。低確率ながらも可能性を持ってるし、実際にそれを拾ってるみたいだから、これは例外ね」

「へえ……あれ？ でも葛木先生って魔術師じゃないんですよ？
じゃあどうやってマスターになったんですか？」

「それが解らないから悩んでるのよ……いえ、実は一つだけ、見当はついてるんだけどね」

「へ？ それっていったい……」

『何なんです？』とのび太が言おうとしたが、その言葉が続く事はなかった。

キャスターの発言を聞いてからこつち、沈黙を保っていたアーチャーが閉じていた目を開き、口を開いたからだ。

「……『はぐれサーヴァント』、という事か。凜」

「……、でしょうね」

「はぐれ……サーヴァント？」

聞き慣れない言葉に首を傾げ、聞き返してしまうのび太。

それに対し凜は呆れの溜息を押し殺しつつ……表情には僅かに滲み出てしまうが……説明のために口を開く。

この短いスパンで、この手のやり取りも鉄板と化してしまっている。

あとは士郎がチラホラ似たような反応を返す……両者共に知識に乏しいので、仕方ないと言えば仕方のない事ではある。

とはいえ事ある毎にこれでは、説明役たる凜にとってツライものがあるのかもしれない。

「『はぐれサーヴァント』っていうのは、簡単に言えばマスターのいないサーヴァントの事よ。何らかの理由があつてサーヴァントとマスターの繋がりが切れてしまった場合、そこには主のいないサー

ヴァントが一人出来上がる。本当ならそのまま消える筈なんだけど、ほんの少しだけ自前の魔力で存在する事が出来るの。これが『はぐれサーヴァント』って訳。サーヴァントが存在するには依代となる人間が必要だから、『はぐれサーヴァント』は自分が完全に消える前に新しいマスターを探す事となる。この場合は……」

「キャスターが『はぐれサーヴァント』となっていて、こういった経緯では解りませんが魔術師でないクズキと新たに契約を交わし、主従となった……という事でしょね」

セイバーの合いの手に同意するように凜は頷く。

そして今度は“タイムテレビ”の方へサツと視線を送る。

場面は丁度一成との会話を終えた女性が屋内へと戻ろうとしている最中であつた。

すると凜は突然キシシ、と底意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「折角だから、“タイムテレビ”でその経緯までジックリと見てみましょうか。さっきの様子を見る限りじゃ、あの言葉も満更嘘って訳でもなさそうだしね」

「おい、遠坂……それ、無茶苦茶シュミが悪いぞ」

「あら何よ、これは立派な諜報活動よ。相手の内情に探りを入れる事は謀の定石だし、考えつく限りの打てる手は打っておくべきだしね」

しれつと言い返す凜に、士郎はゲンナリとする。

しかし言っている事自体は間違っていないので、“タイムテレビ”で内情調査を行う事に否やはない。

ただ、言いだしつぺたる凜のその下心丸出しの魂胆と態度がいただけないだけだ。

「とはいえ……そうなると場所はどこを映せばいいんだ？」

「……柳洞寺の正門辺りがいいかと。柳洞寺を囲む結界の張られていない唯一の場所がそこですから。キャスターが柳洞寺内にまともに入ったとすれば、侵入口はそこでしょう」

「そうか……じゃあそこに視点をセットして、と。ボタンはこれだよかったんだっけ？」

「はい。あ、いやそこはそうじゃなくてこのボタン。で、ダイヤルを……」

のび太のアドバイスを受けつつ、士郎は“タイムテレビ”の計器を操作し、目的の場所に焦点を当てる。

そしてライダーの時より高速で巻き戻し操作を行い、ほんの数瞬で昼夜が入れ替わる山門の映像を食い入るように観察していた。

「……む？」

と、画面を注視していたセイバーとアーチャーが突然、二人そろって怪訝な表情となった。

何事かと同じく画面を見つめていた残り三人が振り返るが、二人は一瞬だけ顔を見合わせると、後でいいと巻き戻し作業を促した。

そうして画面内の時間で十日近くが経ったある地点で巻き戻し作業をストップ。

通常スピードに戻った“タイムテレビ”の映像には、目あての光景が克明に映し出されていた。

『……うう……あ』

『……………』

微かに呻き声を上げる女を両の手に抱え上げ、山門へと続く石段を登る長身の男が一人。

深緑のスーツを着たその男……葛木宗一郎はこちら側に背を向けており、どういった表情なのかは判別出来ない。

一方、頭のフードが外れ外気に晒されたその女の顔は見るからに蒼白で、血の気がすっかり失せきってしまったている。

目も虚ろであり、その身に纏う紫のローブはどういう訳かベッタリと赤黒い血潮に染まり、まるで血のシャワーでも被って来たかのようだ。

そしてダラリと下げられたその手には異様な形の短剣が一振り、握られていた。

短剣としてまともに機能し得ないだろうその稲妻状の歪な刃も、やはり紅い血潮に濡れていた。

この尋常ではない有様から連想出来る事はただ一つ。

この女、キャスターは……今しがた、人を殺めたばかりだ。

「ヒイ……ッ!？」

凄惨な女の姿に尋常でない怖気を覚えるのび太。

見かねたセイバーはフウ、とひとつ溜息を吐くと、その両の眼にそつと自分の手を当て、のび太の視界を遮った。

丁度その直後に、女は糸が切れたかの如く目を閉じ、男にその脱力しきった身体を完全に委ねる事となった。

『……………』

曇っていた空が関を切ったように泣きだし、冷たい水の滴が身体を容赦なく叩くが男はそれを気にする風もなく、ただ僅かに身じろぎし、そのまま石段を登り続ける。

やがて男は山門へと辿り着き、いまだ開かれていたその門を潜ろうとする。

だがその直前、男は徐にその場に足を止めると、雲と雨の支配する虚空へ視線を送りポツリと、こう呟いた。

『——命を奪いこそしたこの身だが、まさか命乞いをされるとはな。解らんものだ……渴ききったこの私に、施せる物などありはしないというのに』

その言葉に何が込められているのか、この場の誰にも理解する事は出来ない。

しかしながら、その言葉は男の全てを語っているように感じられた。そして男はそのまま止めていた足を進め、柳洞寺の中へと消えて行った。

「……もういいわよ。目隠しを外しても」

「はい。……大丈夫ですか？」

凜の指示を受けたセイバーはスツとのび太の両目から手を放す。

いまだ恐怖の抜け切れていないのび太であつたが、画面に件の女の姿がない事を認めるとあからさまに安堵の溜息を漏らした。

「は……、はああああ怖かったあああ……。ううう、夢に出てきそう……」

「まあ……気持ち解るよ。血塗れでナイフを持った女なんて確かにゾッとしなないよなあ……」

士郎もそれに同意するように頷きを返し、背中をポンポンと叩く。

そんな二人の横では凜とセイバー、アーチャーが今の映像から得た情報を基に、推測を働かせていた。

「映像から察するにキャスターは前のマスターを殺した後当て所もなく彷徨い歩き、偶然クスキに拾われたようですね」

「そうね、その線が濃厚か。——なぜ前マスターを殺したのか、は……まあ、正直なところ、どうでもいいわね」

「同感だな。少なくとも、自ら召喚したサーヴァントに殺意を抱かれたような人間だ。理由も大方見当がつく。……そしてキャスターは主殺しを行い死にかけた結果、偶然とはいえ柳洞寺という霊地と葛木宗一郎という愛しの主を手に入れたという事か」

「向こうはそれでハッピーでしょうけど、こっちにとってはアンハッピーよ。よりによって、どうしてこんな穴だらけの大バクチに勝つのかしら…… 幸薄そうな顔してるクセに」

ブスツとした顔で愚痴る凜。

あまりにド直球な物言いにセイバーもアーチャーも苦笑を漏らす。

しかしそれも一瞬の事。

すぐにセイバーとアーチャーの表情は一変し、眉根を寄せた険しいものへと変化する。

「とはいえ…… マスターであるクズキも油断なりません。確かに魔術師ではありませんが…… かといって一般人でもありません」

「え？ セイバー、それってどういう事？」

意表を突かれたように凜がパツと視線をセイバーへと移す。

セイバーはそれには応じず、確認を取るようにそのままアーチャーへと視線を移した。

「……アーチャー、貴方も感じ取れたと思いますが」

「ああ……。あの男、かなりの手練れだ。歩法から推察するに、おそらくは徒手……拳法か？ とにかく、相当に使う。あの言葉も、まんざら嘘という訳でもなさそうだ」

「……“命を奪いこそした”、っていう？」

「うむ……」

重々しく、アーチャーは頷きを返すとそのまま目を閉じる。

顔見知りである凜の手前、敢えて断言はしなかったが、アーチャーはあの言葉が真実であるという確信を抱いていた。

葛木の背中から、明らかに命を奪った者特有の“何か”が滲み出ているのを見て取ったからだ。

そしてそれはセイバーも同じであり……無論アーチャーも同じである。

英霊とは、基本的に他者の命を糧として、己が身を一段上の高みへと昇華させている。

“色”や立場こそ違えど、その背に背負うものは同じなのだ。

ある意味で、二人は葛木と同類なのである……故に感じ取れた、そういう事だ。

そして……アーチャーには気になる点がもう一つ、ある。

あのキャスターの手に握られていた短剣だ。

(……“ルールブレイカー破戒すべき全ての符”。魔術的なつながりを打ち消す破戒の短剣、だと?)

自身の持てる“能力”により、アーチャーはあれがキャスターの切り札……『宝具』である事を見抜いていた。

その名称から、特性、効果……その細部に至るまで。

契約だけに留まらず、あらゆる魔術的效果を初期化キャンセルする。

マスターとの魔術的契約によって現界するサーヴァントにとって天敵である『宝具』。

この情報を知ると知らないのでは天と地だ。

無論、危険を減らすためにもこの事実をアーチャーは報告するべきなのだが……。

(……いや、まだだ。まだ、告げるべき時ではない。当初の目的を捨て去った訳ではないのだからな)

アーチャーは敢えてそれを行わなかった。

あらゆる要素を鑑み、熟慮した末での結論である。

アーチャーにはある“目的”がある。

英霊となって尚抱く……いや、英霊となったからこそ、抱いた“目的”。

アーチャーがこの戦争での召喚に応じたのも、全てはそれに集約される。

アーチャーはその“目的”に対し、並々ならぬ執念を抱き続けてきた。

たとえ英霊として過ごしてきた膨大な年月によって、己自身がすり

減ろうともそれが摩耗する事はなかった。

この事実を告げるという事は、すなわちその絶対の“目的”が潰える覚悟をしなければならないという事なのだ。

それだけは、何としても避けたかった。

だからこそ、アーチャーは沈黙を保つ。

魔術師のサーヴァントの警戒レベルを引き上げ、常に注意を配る事のみを肝に銘じつつ。

まだ、この中の誰も欠けてもらっては困るのだから。

第二十話 「サーヴァント探索作戦（仮）（後編）」（前書き）

ついネタに走ってしまった……。

でもちよつとスッキリ（笑）。

第二十話 「サーヴァント探索作戦（仮） （後編）」

「……そういえばさ」

「はい？ なんでしょうかシロウ？」

「いや、“タイムテレビ”巻き戻してた時、なんか言おうとしてなかったか？」

恐怖状態であつたのび太の震えが収まってきたところで、士郎はたつた今思い出した事をセイバーに尋ねてみる。

セイバーはふむ、と宙に視線をやったかと思うと、何かに思い至ったかのようにああ、と二度三度頷いた。

「いえ、途中で妙な物が映り込んでいたように感じましたので。といつても、ゼロコンマ一秒ほどもないノイズのような物でしたが」

「ノイズ？ どういう具合に？」

「む、そうですね……」

セイバーは顎に手を当てると目を閉じ、記憶の奥底からその時の光景を引っ張り出すかの如くほんの少しだけ、眉根を寄せる。

「シロウは巻き戻しの際、ノビタが操作した時よりさらに高速で行いましたね？ 後の方で緩めていましたが。件の物が映り込んだ時のスピードは大体一日およそ0.8秒くらい……ですか。映る映像は人の往来が大半だったのですが、その中の夜の時間帯に、ほんの少しだけ引っ掛かる色……と言っべきでしょうか？ そんなものが掠めたのです。アーチャーにも見えていたようですので、私の勘違いではないと思います」

セイバーが隣のアーチャーに視線を向けると、アーチャーは先程からの瞋目を保ったまま、同意するように首を縦に振った。

士郎はうーん、と唸りながら頬をカリカリ搔くと、もう一度“タイムテレビ”の前に鎮座する。

「0.8秒って……よく見つけれんなそんなモン。……で、それはどの辺りなんだ？」

「そうですね……四日ほど前でしょうか」

「四日前だな」

復唱し、キリキリと“タイムテレビ”のダイヤルをいじる。

巻き戻る映像、ただしスピードは先程とは違ってかわってラットローラー並に緩やかである。

やがて士郎達の眼前に、その四日前の夜の山門が映し出された……その瞬間。

「……え!？」

「ちょっと、これって!？」

「え? これっ、バーサーカーと……誰?」

俄かにざわめきが広がった。







































スピーカーから聞こえてくるのは甲高い金属音と鼓膜が破れんばかりの咆哮……そして、感心するような涼やかな声。

柳洞寺の山門の前、石段の上段と下段にそれぞれ人の姿があった。

下段の方にいる一人は……果たして“一人”と換算していいのかどうかは疑問だが……狂戦士のサーヴァント、バーサーカー。

相も変わらずの理性の輝きのない瞳で、大気を突き破らんばかりの雄叫びを上げながら滅多矢鱈に岩の大剣を振り回している。

そしてもう一人……上段に位置し、山門の前に立ち塞がるように存在しているのは、

『……惜しいな。そなたが狂わず、理性を保ったままであったのなら、もう少し心躍る戦舞を演じられたものを』

「……侍？」

群青の着物を身に纏い、己が背丈ほどもあるつかという長物を振るう優男であった。

のび太の口から漏れ出た言葉は、まさにこの謎の男を端的に言い表している。

膝まで達しようかという青い長髪を一つに束ね、袴を靡かせながら草鞋履きの足で的確に立ち回る。

右手一つで操るは、目測でも百五十センチは下らないだろう鰐のな
い日本刀。

鈍い光を湛えながら宵闇の空間を自由自在に、目まぐるしく駆けまわり、瀑布のように迫り来る武骨な神速の凶刃を右へ左へ、時折火花を散らしながら的確に捌いていく。

線香花火のようなその光が両者の顔を一瞬照らしだす……その様子はどこか幻想的で、儚いものであるかのように感じられた。





























































『……フツ。だが、これはこれで悪くない。少なくとも、刹那の戯れにはなろうという物だ』

しかし浮かび上がるその表情は、決して儚げなものなどではない。

一方は阿修羅の如き狂相、もう一方は叫び出しそうなほどの昂ぶりを秘めた薄い微笑み。

その両者の間で交わされるのは、まごう事なき刃と刃の鎬の削り合い。

まさしくこれは……死闘であつた。

「凄い……バーサーカーの攻撃をあんな刀で全部捌いてる。並の技量じゃないわ」

「……ああ。一体何者なんだ？ この侍」

呆然と画面に見入る一同。

士郎と凜の呟きは、この場の全員の心境を余すところなく代弁していた。

セイバー・アーチャー・のび太の連携で漸く渡り合っていたバーサーカーと、たった一人で互角に剣を交えているのだ。

舞台が山門前の石段の上であるという事、バーサーカーが階下にいるという事を差し引いても、十二分以上のお釣りが返ってくる。

侍の尋常でない力量の程が、嫌でも伝わってくるというものだ。

「……疑いの余地なく、サーヴァントでしょうね」

画面の侍を見据えつつ、呟くセイバー。

その深緑の瞳の奥には静謐に、だが進らんばかりに猛る炎が陽炎のように揺らめいている。

獲物と剣技こそ違うが、同じ剣を扱う士として意識しているのだろう。

「……とするならば、該当するのは残りの一席……アサシンか。だが、随分アサシンらしからぬアサシンだな。それに何故アサシンが柳洞寺にいる？」

訝しげに首を捻るアーチャー。

確かにおかしな事ではある。

ここ柳洞寺はキャスターのテリトリー。

戦闘が行われるとしたら、一方は必然的にキャスターとなる筈だ。

しかし戦っているのはキャスターではなく、アサシンとバーサーカーだ。

階下にいる事から見ても、バーサーカーは侵入者であろう。

マスターである白の少女は映っていないものの、戦闘の邪魔にならないよう近くに潜んでいるものだと思われる。

一方柳洞寺の門前に陣取っているアサシンは……侵入者であるとは到底思えない。

むしろバーサーカーの侵入をその身で防いでいるようにさえ見受けられる。

そう……まるで柳洞寺の門を守護する、番人のように。

「……もしかして、キャスターとアサシンは、裏で繋がってる？」

「え？ 遠坂、それって……？」

ポツリと漏れ出た凜の予測に、残る四人が一斉に振り返る。

「この状況、どう見ても山門の防衛戦よ。バーサーカーが柳洞寺に無理矢理踏み入ろうとしていて、アサシンがそれを防ごうとしている。そしてお膝元の騒ぎにも拘らず、キャスターが姿を見せていない。つまり、キャスターとアサシンは敵対しておらず、互いに協力し合っているって事よ。もっとも、この場合はマスター同士が協力し合っていると言った方が正しいんでしょうけれど」

そう考えれば納得がいくわ、という凜の言葉には説得力があった。

確かに、むしろそうとしか考えられない状況ではある。

「ま、とりあえず確認してみましようか。……『キャスターとアサシンのマスターは互いに協力関係にある』！」

自信満々といった感じで凜は“○×占い”に向かって命題を告げる。
しかし返ってきたのは……、

「——え！？ ま、間違い！？」

使用後初となる、命題の否定を示すNG音。

『ブブー！！』と×印が空中に浮かび上がり点滅、凜の予想に真つ向から『間違いである』の返答を突き付けた。

「な、なんで……！？ 一番可能性があるのはそれなんだし……いったいどういう……？」

まさかの回答に凜は啞然とするもすぐに頭を切り替え、思考に没頭し始める。

「おい、遠坂……？」

と、やや心配そうに覗き込む士郎の存在もアウト・オブ・眼中だ。

キャスターとアサシンは繋がっている。

それはきつと間違っていないだろう。

しかしそうなるかといった如何なる関係で繋がっているというのだろうか？

最も可能性が高いのはマスター同士の同盟による協力関係。

魔術師の英霊であるキャスターは直接戦闘能力が他サーヴァントより低いというのが相場であるので、それを補うため同盟を組むというのは理に適っている。

実際、自分達も同盟を組んでいるのだし……しかしそれは否定された。

ならいったい……、と思考がループしかけたところで、

「——あ！　もしかして……」

突然のび太が何かに気づいたように声を上げた。

その声に思考の腰を折られた凜は一旦考えるのを止めると、やや不機嫌な眼差しでのび太を見る。

「……なに、のび太？」

「あの、ちょっとその前に確認、というかちょっと質問が……。キヤスター”って魔術師のサーヴァント、ですよな？」

「……そうよ」

『何を今更』といった感じで凜は億劫そうに首肯する。

のび太はそうですか、と頷きを返した後、

「で、魔術師だけがサーヴァントを召喚出来る………んでしたよね。さっきの話だと」

更にもう一つ質問を重ねた。

またしてもの今更な質問。

本格的に面倒くさく感じてしまい、凜は声で返答しない代わりに首を縦に振るうと……

「——ん？」

して、ピタリと動きを止めた。

ループしかけていた思考ルーチンに、何かが引っ掛かった。

そしてまるで新しい歯車がはめ込まれたかのように、ガチリガチリと枠が広がっていく。

それは固定観念の柵を破壊し、袋小路に嵌まり込んだ思考の迷路に新たな道を創り出す。

そうして凜の頭脳は再び高速で回転を始めた。

（キャスター……魔術師……サーヴァントを召喚し、使役するのは魔術師……魔術師のサーヴァント……、ッ！？）

——繋がった。

もう一つ、あり得る可能性が……あまり考えたくはない可能性ではあるが……凜の脳裏に浮かび上がる。

チラリ、と一度だけのび太に視線を送ると、凜は“○×占い”に再度向かい合い、命題を口にした。

「——『アサシンはキャスターが召喚したサーヴァントである』」

瞬間、。印が宙に浮き、点滅するとともに景気よくファンファーレを鳴らす。

「——……はあああああ」

と、その時凜は肺の中の空気を空にするかの如き、大きな吐息を漏らした。

「成る程……盲点だったわ。考えてみればそっちの方が可能性、あったかあ。同盟なんてある意味保障があつてないような約束、相手がその気になれば即座に破棄され、最悪の場合は裏切られて背後からブスリ。それなら自分がマスターとして、枠がすべて埋まる前にサーヴァントを召喚してしまえばまったく問題ない。魔術師の英霊であるキャスターなら裏ワザ的に可能だろうし、多分時期的に都合が良かったから……にしても、まさかのび太が真っ先に気づくなんてねえ」

脱力しきりの状態のまま首だけを動かし、のび太の方を見やる。

のび太は恐縮そくに頬を掻きながら、

「え、あの……だって、凜さんが『サーヴァントを召喚出来るのは魔術師だけ』だって言ってたから……じゃあキヤスターも出来るのかなあ、って」

実に単純な論理に基づいた推測であつた事を告げた。

のび太の考え方はその手の知識に乏しいせいで、凜のそれと比べて果てしなく短絡的である。

しかし今回の場合は逆にそれが幸いした。

下手な先入観がなかったおかげで、正解をすんなりと導き出す事が出来たのだ。

「何という暴論だ……だが、今回に限って言えば僥倖か。しかしキヤスターめ、平然とルールを破るとは……」

アーチャーの顔が苦々しげに歪む。

いくら常識や不条理がまかり通る聖杯戦争とはいえ、全くルールがないという訳ではない。

アーチャーは割に秩序を守るタイプであるようだ。

殺気混じりのその視線は部屋の壁を越え、その向こうの柳洞寺へと叩き付けられていた。

「今更言っても仕方のない事です。大事なはこの状況を踏まえ、どう動くべきなのか。そのみです」

そんなアーチャーを窺めるセイバーであつたが、目だけはいまだ画面内で続く命の削り合いを食い入るように見つめ続けている。

おそらくアサシンの剣筋を読んでいるのだらう。

足の運びから腕の振り、重心の位置、体捌き……セイバーはその一挙一動を余すところなく、脳裏に転写していく。

と、そこで画面内部に動きがあつた。

『——バーサーカー、もういいわ。戻りなさい』

山門に響き渡る、ソプラノの声。

バーサーカーのマスターである、イリヤスフィールのものだ。

その命に従い、バーサーカーがアサシンの剣を大きく弾くとすぐさま階下へ後退し、距離を取る。

そしてその巨軀が陽炎のように歪み始めたかと思うと、やがて画面から忽然と消え去った。

霊体化したのだ。

『——ふむ、バーサーカーの主殿か。声からして随分と幼い童のようだが。それはさておき、急に退くとは……はてさて、如何なる腹積もりか？』

相手が消え去り、手持無沙汰にダラリと下げていた長刀を肩に担ぎつつ問うアサシン。

つい先程まで死闘を演じていたとは思えない程の涼しげな笑顔で。

しかも驚くべき事に、汗の一筋すら流れていないときている。

『別に。用が済んだから帰るだけ。ここに来たのは単なる様子見のつもりだったのよ。深入りする気は最初からなかったわ』

『……成る程。この地はあの女狐が狂喜する程の霊地。解らぬでもない……しかしながら、こちらとしてはいささかつまらぬ幕引き。』

まさにこれから、という時におあずけを喰らわされたのでは堪らぬよ』

『アナタの都合なんて知らないわよ。それじゃ、アナタの飼い主……キャスターによろしく言っておいてちょうだい』

『——、まあよからう。そなたが事、確と伝えおく。……ああ、そうだ。まだそこにバーサーカーは存在するか、否か？』

『……いるわよ、それが何？』

イリヤスフィールの返答にアサシンはク、と口の端を吊り上げる。

そしてクルリと踵を返し、山門の方へと身体を向けると徐に視線を空へと投げ朗々と、まるで歌うように口を開いた。

『水を差されたとはいえ、互いに剣を交わした縁^{えにし}。このようにしこりを残したまま去られては、私の沽券に係わる……故に』

一瞬、アサシンは口を閉ざす。

そしてちょうど一呼吸分の間を置いて、微かに歓喜の混じった声音でこう告げた。

『——せめて仮初の役柄などではなく、我が真の名を名乗ろう。
我はアサシンのサーヴァント……“佐々木小次郎”』

そしてバーサーカーと同じように、アサシン……佐々木小次郎はその場から姿を消した。

イリヤスフィールの気配も、既がない。

後には、僅かにそよぐ風に揺られる山の木々と、ひっそりと佇む山門のみが残されていた。

「佐々木……小次郎？」

無人となった画面をいまだ見つめ続ける一同。

その表情は、一人の例外もなく呆氣に取られたものとなっていた。

『佐々木小次郎』。

二天一流の開祖、宮本武蔵と巖流島で決闘を行ったとされる、日本ではあまりにも有名な剣豪である。

『佐々木小次郎』の特徴として挙げられるのは、何といってもその身の丈ほどもある長刀と、代名詞たる秘剣『燕返し』。

後者はともかく、前者はアサシンと見事合致している。

「この人が……ホントに？ あの『佐々木小次郎』……なの？」

「……おそらく、真実でしょう。バーサーカーの斧剣を悉くいなしでいた、あの技量は相当な物。加えて、己が剣と名に懸けるプライドも高い。だからこそ、剣を交えたバーサーカーに敬意を表し、名乗りを上げた……」

「それは解るけど、まさか自分から真名をバラすなんて……」

「アサシン……佐々木小次郎にとって、自らの名を告げる事は名を隠す事以上のものだという事です。そして、真名を明かした程度で揺らぐ実力ではない……あの宣言はその自負の表明、という事でしよう。そんな男が、キャスターの僕とは……」

固い表情で言い切るセイバー。

その背中には、ほんの微かな焦燥の念が影のように揺らめくのであった……。

さて、残るはいよいよ最後の一人、バーサーカーの居所だけとなった……の、だが。

「……ところでのび太君」

急に真面目くさった表情で、士郎はのび太に語りかける。

「はい？　どうかしたんですか、士郎さん？」

探査を始めてからこれまで結構な時間が経っている。

小休止とばかりに用意されていたお茶とどら焼きに齧り付いていたのび太が顔を上げた。

それを感じ取った士郎はスッ、と指をある一点へと向け、

「——これを見てくれ。コイツをどう思う？」

まさに切れ味鋭い真剣のような眼差しをのび太に送り、そう問うた。
思わず身構えたのび太であったが、士郎の指の先にある“モノ”を
見た途端、

「！」

爛々と瞳の輝きが増し、眼鏡の奥の両の目が段々と大きく見開かれていった。

「すごく……大きいです……」

どこか陶然とした声で、のび太は答える。

その威風堂々とした風格。

そのズシリ、と擬音が響き渡るかのような重厚感。

その度肝を抜かんばかりの迫力。

そして何より――ある種の幻想的な美しさまでも兼ね備えた、その巨大な佇まい。

のび太は、降って湧いたような感動に全身を打ち震わせていた。

「――、一応聞くけど……城が、よね？」

「「え？」」

やや表情の強張った凜からの指摘に、二人は同時に振り返る。

何を隠そう、士郎が指の先にあるのは………面前に鎮座する“タイムテレビ”。

その中に映し出された、白亜の古城であった。

まるでヨーロッパからはるばる海を越えて直接日本に持ってきたかのような、石造りの西洋城………鬱蒼とした森の中にひっそりと、だが厳然と佇むその様は、まさに『壮観』の一言。

この城こそが、アインツベルンが聖杯戦争の際に使用する冬木での拠点………通称“アインツベルン城”である。

冬木の郊外にある森。

そこにある城をアインツベルンのマスターは代々拠点として使用しているらしい、という凜からの情報の下、士郎は“タイムテレビ”でそれを発見。

画面に投影されたその非現実的な威容を目の当たりにし、のび太と二人して息を呑んでしまったという訳である。

現に凜に向き直った二人の表情は『それ以外に何かあるの?』と言わんばかりだ。

「……はあ」

凜は溜息を吐いた。

そして数瞬の間も置かず、

「「いだっ!!?」」

振りかぶりざま二人の頭長部目掛け、実に流麗な正拳を叩き込んでしまった事を誰が責められよう。

「……あの、リンは何故あのような事を?」

「……、解らんのならそれでいい。君はそのままの君でいてくれたまえ、セイバー」

「はあ……?」

——そもそも二人の『アッー!』など、
いったい誰得であろう
か。

閑話休題。

『ただいま。セラ、リズ』

『おかえりなさいませ、お嬢様』

『おかえり、イリヤ』

シャンデリアが明々と照る、異様な程だっ広い玄関ホールに三つの声が木霊する。

一人はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン……言うまでもなく、この城の主。

一人は白青基調の本格的なメイド衣装に身を包んだ、生真面目な雰囲気
の女性。

一人は白黒基調の同じデザインのメイド衣装を纏った、ややつかみどころのなさそうな印象の女性。

服装と一連のやり取りからして、二人はイリヤスフィールの付き人なのだと解る。

『どうでしたか？ エミヤシロウは』

『そうね…… 最初から最後までオタオタしてただけだったわね、お

兄ちゃんは『

やはり……』

『セラ』と呼ばれたメイドが、これ見よがしに溜息を漏らす。

どういう訳か、魔術師として半人前以下である土郎の实力を知っていたようだ。

改めて落胆した、といったような吐息であった。

『でもイリヤ、嬉しそう。なにかあった？』

と、もう一人の『リズ』と呼ばれたメイドが片言で尋ねてくる。

セラとは違う、まるで表情を作る事を知らないような無表情で尋ねるその様には、どこことなく違和感を感じてしまう。

しかしイリヤスフィールはそれを気にした風もなく、

『ちよつとね。なんでか知らないけどリンとお兄ちゃんが協力体制を組んで、セイバーとアーチャーと……あと一人、知らない男の子と三人がかりでバーサーカーに立ち向かってきたの。それで、バーサーカーが一回殺されちゃった』

さらに、何でもない事のようにのたまった。

その瞬間、二人のメイドの眉がピクリと跳ねあがる。

もつとも興味の対象は、それぞれ別であつたようだが。

『バーサーカーが……殺された？』

『ええ。武器を破壊されて、セイバーが首に一撃。ほぼ即死だったわね』

そこまで聞いてセラの顔が俄かに驚愕に彩られる。

『ヘラクレス』であるバーサーカーを一度とはいえ仕留めた、その事実はやはり重いのであろう。

たとえサーヴァント複数人がかりであつたとしても、命があと二ヶ

夕残っていたとしてもだ。

『男の子……って、誰？』

『え？ ……うーん、名前は確か、『ノビ・ノビタ』って言ったかしら？ 眼鏡の、あんまりパツとしない感じの子だったんだけど……一回逃げて、でも戻ってきて、バーサーカーを吹き飛ばしたり、空を飛んだり、動きを止めたり……』

『……スーパーマン？』

無表情のまま、抑揚のない声で呟くりず。

……あながち間違ってはいない点がスゴいと言えばスゴい。

『まあ、色々ヘンな道具を使ってたから。小さい銀色の大砲とか、プロペラとか……そのまま立ち向かってきた訳じゃないわよ。見た目はわたしと同じくらいだったかしら？ 中身も年相応ぽかったけど……度胸と、射撃の腕前だけは英霊並ね。アーチャーも真っ青』

足震えてたけど、とイリヤスフィールはクスクス笑いながら述懐する。

その言葉に、セラはますます表情を険しくした。

『……いったい何者なのですか、その子供は？』

『さあね。『通りすがりの正義の味方』とか言ってたけど、よく解らない。でもセイバー、アーチャーとそれぞれタッグでバーサーカーを悉く邪魔してきた。バーサーカーを殺した一撃をアシストしたのもその子。そのせいか、バーサーカーがその子に御執心みたい』

『そう……。イリヤ、これからどうするの？』

『とりあえず今日はもう休むわ。バーサーカーの話だと、なくなった命が元に戻るにはちよつと時間がかかるみたい。セイバーの一撃がかなり効いたんでしょね。二十四時間は必要だそうよ。これからの事は……そうね、起きてから考えるわ』

『そうですか……かしこまりました。寢室の用意は既に出来ております』

『ありがとうございます。それじゃ、行きましょうか』

『うん、イリヤ』

主の下知に頷く二人のメイド。

イリヤスフィールはやや後方について歩く二人を引き連れ、そのまま城の奥へと消えていった。

画面から人影が完全に消え去ったところで、全員が“タイムテレビ

”から視線を外し、互いに顔を突き合わせる。

いよいよ大詰め段階、これからの方針決めに状況がシフトした。

「……成る程ね。さて、各サーヴァント事情のおおよそが掴めた訳だけど……」

「ええ。まだ欠けている部分はありますが、現時点では我々の方が敵の誰よりも情報のカードを持っていると考えていいでしょう」

「まあ、そのアドバンテージを有効に扱えねば話にならんがな。とりあえず、私からは“先手必勝”を提案するが……」

「えっ？ それって相手のところに乗り込むって事ですか？」

「そうだ。受けに回らず、逆にこちらから相手を攻める。要は殴り込みだ。敵の大半が情報を揃えきれていないだろう今なら、先手を打つ事が出来る。もっとも、仕掛けるにしてもそれは夜になってからだが」

「ちょっと待てよアーチャー。言ってる事は解るし正論だけど、いたい誰に？ どいつもこいつも一筋縄じゃないようなヤツらばかりだぞ？」

「あら、そんなの決まってるじゃない」

「「え……？」」

あっさりと言いつつ凜に思わず向き直るのび太と士郎。

凜の顔に浮かぶのは、何とも大胆不敵な微笑み。

その表情の下にある意図が皆目読めない二人は、つい互いに顔を見合わせてしまう。

「……確かに。現段階で先手を打って仕掛けるのならば、選択肢はほぼ一つに絞られますね」

「うむ。居所も判明していて、尚且つ情報のカードがほぼ出揃っている。骨は折れるが、それ以外になかるう」

「「……え、えっ？」」

首肯混じりに呟かれた英霊二人の言葉に、のび太と士郎はますます訳が解らなくなる。

混乱の坩堝に嵌まり込んだ二人に、凜は何度目になるか解らない溜

息をそつと吐くと、

「……知らないなら教えてあげるわ」

チラリと英霊二人に視線を送り、答えを提示した。

「バーサーカーよ」

第二十一話 「午後の一幕」(前書き)

お待たせいたしました。

二十一話、更新です。

第二十一話 「午後的一幕」

「――お、ドラえもんだ。おい、ドラえもん!」

「にゅふふふ、ミィちゃん……ん?」

お使いからの帰り道、空き地の前を通りかかったドラえもんは誰かに呼び止められ、声のした方に首を向ける。

「おい、こっちだこっち!」

空き地の土管の上にどつかと腰を降ろし、手を振っているのはジャイアン。

その横にはしずかとスネ夫が立っていた。

（ああ、もうこんなところまで来てたのか）

ドラえもんはカリカリと頭を掻く。

つい今の今までミィちゃんとのひと時を思い返していたせいで、空き地辺りまで進んでいた事も、いつものメンツの存在にも気づかなかったのだ。

このままなのも何だ、とドラえもんはスタスタと空地へと入っていく。

そして皆の下へと辿り着いた時、しずかが口を開いた。

「ドラちゃん、何かいい事でもあったの？ 笑ってたみたいだけど……」

「大方ガールフレンドのネコの事でも考えてたんじゃないの？」

「——え！？ べ、別にい！？」

スネ夫の言葉に思わずどもってしまふドラえもん。

そんな反応を返してしまつては、『その通りです』と自ら白状しているようなものである。

図星だと悟つたスネ夫は浮かべていたニヤニヤ笑いをますます深くした。

「やっぱりそうなんだ！ わっかりやすいなあ、ドラえもんは！」

「だからオレ達に気づかなかったのか！　こゝんな近くに来てたのにさああ！」

ワハハハハ、と大爆笑するジャイアンとスネ夫。

『笑っちゃダメよ二人とも』と窘めるしずかも、やや口元がヒクついている。

（ああ、穴があつたら入りたい……）

つい数秒前の自分を蹴り飛ばしてやりたい衝動を堪えつつ、ドラえもんはただ只管、バツが悪そうに小さくなっているしかなかった。

と、そんな時。

（……あれ？）

唐突に、目の前の違和感を覚えた。

何かが足りないような、そんな違和感を。

そしてそれがいったい何なのか、すぐに思い至った。

「……そういえばのび太君は？」

そう、のび太の姿が見当たらないのだ。

のび太は基本的にしずか、ジャイアン、スネ夫と一緒に行動する事が多い。

まあ、後者二人の場合は理由がマイナス方面である割合が大半なのだが、今はそれはさておく。

とにかく、この面子ならばのび太がいなければおかしい。

ただでさえこの空き地はのび太の行動範囲であるのだし、あまりにも不自然だ。

「ああ、それがさあ……」

ドラえもんの疑問に答えたのはジャイアン。

何となくバツが悪いのだろう。

後頭部をバリバリ掻きながらポツリポツリと、つい数十分前の出来事を掻い摘んで説明し始めた。

……そしておよそ一分後。

「――アーサー王!？」

「そうなんだよ。スネ夫が『アーサー王は存在しない』って言った
ら急にのび太が怒りだしてさあ、『アーサー王がいたって証明して
やる!』って言って飛び出して行っちゃったんだよ」

「多分家に戻ったと思うんだけど……ドラちゃん知らない？」

「ううん、全然。僕がドラ焼きを買って帰ってきた時、のび太君、
部屋にいなかったもの……入れ違いになった、なんて事はなさそう
だし……ううん」

「そういえばドラえもん、買い物力ゴ持ってるけどそれってお使い
?」

「うん、のび太君の代わりにね。ママさんものび太君を見てなかつ
たから、代わりに僕にお使いを頼んだんだろうし……何かイヤな予
感がする。とりあえず、急いで戻ろう」

そう言つとドラえもんは即座に踵を返し、駆け足で空き地の入口へ
と向かう。

まるで言い知れぬ“不安”に突き動かされるように。

「待つてドラちゃん、あたしも行くわ！」

その後を追いかけるようにしずかが続く。

「スネ夫、オレ達も行ってみようぜ！」

「あつ、待つてよジャイアン！」

そして残った二人も、当然のように後をついていく。

果たして四人は、真実に辿り着く事が出来るのか……。

さて、その頃ののび太はというと。

「「「いただきます」」」

「はい、召し上がれ」

号令一下、ランチタイムと洒落込んでいる最中であつた。

メニューは鮭の切り身、大根の煮付け、キンピラゴボウと炊きたてのご飯の四品目である。

「うーん！ やっぱり士郎さんのごはんはおいしいなあー！」

「あはは、そこまで喜んでくれるなら作つた甲斐があるな」

キンピラゴボウをシャクシャクと頬張っていたのび太が心からの賛

辞を送ると、士郎は面映ゆそうに頬を掻く。

基本的に魚や野菜の好き嫌が多いのび太であるが、士郎ほどの料理上手が作るものならば特に気にする事なく食べられるようだ。

わざわざ余所様に作ってもらったのに好き嫌いを持ち出せるほど、のび太が恥知らずでない事も要因としてはあるのだが。

「……わたしより上手いわね。この大根の味付け。なんか腹立つ……」

凜は批評をブツブツ交えながらも、とりあえず行儀よく食している。

「シロウ、おかわりをお願いします」

「はいはい……って、これで三杯目……」

そしてセイバーはというと、空になった茶碗をそつとどころか勢いよくズビシと士郎に突き付けていた。

皿の上の鮭も大根もゴボウもキレイサッパリと消え失せ、目下士郎の皿から善意的に副菜が緊急出動している有様である。

恐るべき健啖、恐るべき消化器官。

炊飯ジャーの底が現れるのも時間の問題である。

のび太達が方針を決め終えた頃には、時計の針はちょうど十二時を指していた。

腹の虫も、士郎とセイバーを筆頭にいい感じに泣き始めていたので、自然に流れは昼食へと傾いていったのである。

そして士郎は台所へ、残りは一旦奥へと引っ込み三十分ほどで料理は完成。

再び奥から皆が集い、食卓の前で両手を合わせる事と相成った。

……ところで気づいた方はおられるだろうか？

「いただきます」の際、挨拶の音が“四つ”あったという事に……。

「……風味が弱いな。みりんが少しかり足りなかったと見える。味の染みもまだまだ、とはいえこれは時間の都合上、責められ……いや、それならそれでやり様はある。やはり減点だな。キンピラは……」

「——おい、難癖付けるくらいなら食うな。流石に気分が悪くなってくるぞ」

「ふむ？ ……ああ、気に障ったのなら謝罪しよう。なに、これは癖みたいなものだ。このように、色々和惜しい料理を前にしてつい、な……」

「惜しいってなんだよ？」

「文字通りの意味だが？ 成る程、確かにこれだけ出来れば上出来

の部類に入るだろう。並の料理人では早々太刀打ち出来まい。それは断言しよう。しかしながら、これでは二流に勝てはしても一流には及ばん。つまりはそういう事だ」

「……解った。俺の料理の腕が未熟だというのは受け入れる。けどな、その言い方だとお前の方が上手く作れるっていう風に聞こえるんだが？ どうなんだ——アーチャー？」

ジロリと睨みを乗せたその言葉に対し、向けられた本人はフン、と心底皮肉げな薄ら笑いを浮かべた。

そう……なんとアーチャーが昼食のテーブルを囲む一員として茶碗を抱え、大根の煮物をつづいているのだ。

「なにを当然の事を……貴様如きに負ける気など微塵もせん」

本来、サーヴァントに食事は必要ない。

サーヴァントが存在するために必要なのは食物ではなく、魔力だからだ。

だからこそ、アーチャーははじめ昼食を辞し、歩哨兼見張りとして屋根上へと移動しようとした。

……したのだが。

『……ええっ、アーチャーさんお昼食べないんですか？ みんなで食べた方が楽しいのに……』

物凄くがっかりした表情で呟くのび太を前にしては、前言を撤回するのにさして時間は必要なかった。

いかに歴戦の兵といえども、子どもが相手ではそこまで強くは出られないのだ……このアーチャーという男は。

……しかしながら、紅い外套を纏った長身の男が食卓に着いて巧みに箸を操り、吟味するように大根を咀嚼するその光景は、違和感がありありである。

「……シロウ、おかわりはまだなのですか？」

ちなみにセイバーが何のてらいもなく昼食を貪り食っているのは、食物でもごく僅かながら魔力を回復させる事が出来るからだ。

不完全な召喚のツケで、セイバーはマスターである士郎から魔力の供給を受けられない。

そのためたとえ少しでも残存魔力を増やそうと、周囲が軽く引くくらい量のご飯を食べているのだ……。

……いや。

「シロウ……」

……追加が来ない事にまだ茶碗を突き出したままの、おあずけ喰らった子犬のようなその表情を見るに、

「……まだなのですか？」

——ただ食うのが好きなだけなのかもしれない……。

ちなみにおかわりは、この時点で累計六杯目である事をここに追記しておく。

それはともかく。

「……ほおおう？ まさか英霊がハツタリをかますなんてな」

「ハツタリ？ ……フン、なにを世迷言を。 厳然たる事実だ。 英霊とは、あらゆる経験を永い年月をかけて蓄積し続けてきた存在。 無論例外もあるが……ともあれ、断言しておこう——
貴様程度の経験値では、私には遠く及ばん」

——瞬間、士郎の目に剣呑な光が宿った。

「……言ってくれるな、若白髪が」

「嘴の黄色い小僧が囁^{ささ}るな、滑稽でしかないぞ？」

眼光鋭く、メンチを切り合う両者。

身長の低い士郎が見上げ、上背のあるアーチャーが見下ろすといった構図となっているが、飛び散る火花が尋常ではない。

一方はまるで親の仇を殺すような目つきで以て睨み上げ、もう一方は思い上がった未熟者を嘲るかの如く冷え切った視線を眼下に叩き付ける。

まさしくここはキューバ危機。

核弾頭の発射ボタンを握り締め、相手の出方を殺気混じりの視線で窺いながらの膠着状態。

……しかしまあ箸と茶碗を持ちながらの睨み合いなぞ、実に緊張感が削がれるというものである。

「あ、あの……ケンカは止めた方が……」

のび太がおずおずと仲裁に入るが、二人はそれをキツパリと無視す

る。

あうあう、と次第にのび太の目に涙が滲んでいくが、それでも二人はガン無視だ。

……いや、きつと視界にすら入っていないのであろう。

そして。

「シロウ、ご飯……」

「……食い下がるわね、セイバーも。っていうかアーチャー、アンタ記憶なかったんじゃないの……？」

めげずにおかわりの茶碗を差し出し続けるセイバーに対し、凜は呆れとも感心ともつかないような呟きを漏らしつつ、相棒の大人げない姿に深々と脱力するのであった。

「……フン」

と、突然アーチャーが士郎から視線を逸らしたかと思うと、徐に踵を返した。

その行動の不可解さに、士郎の眉が訝しげに歪む。

「おい、どこ行くんだよ？」

「なに、“論より証拠”を示してやろうというだけだ。その身……いや、その舌で以て厳然として存在する“差”という物をとくと思いはいるがいい。……ああセイバー、そんな物欲しそうな顔をせずとも、もうしばし待て。今食したモノ以上のモノを堪能させてやろう」

自信漲るその言葉に、セイバーはそつと茶碗を降ろすと、

「……期待していますよ、アーチャー」

「ちよつ、おいセイバー!？」

清々しいほどのサムズアップをその屈強な背中に送った。

己が従者にあっさり掌を反された士郎。

あまりのショックにガックリ膝を突きそうになるものの、そこは何とか最後の意地でグツと堪えた……表情はこれでもかとはかりに苦りきってはいたが。

そうこうしているうちに、アーチャーは冷蔵庫の前へと辿り着く。

「ふ、衛宮士郎よ。“格の違い”を見せてやろう……」

まだ調理すらしていないのに勝ち誇ったような声で背中越しに告げるアーチャー。

その過剰なまでの自信満々っぷりにイラッとする士郎であったが、

(……あれ、待てよ？ 確か……)

アーチャーが冷蔵庫の取っ手に手を掛けたところで、“ある事”をハタと思い出した。

そしてガチャリと冷蔵庫の扉を開いた瞬間、

——ギシリ、とアーチャーの身体が銅像のように固まった。

「――材料、全部切れてたんだった……」

「なん……だと……」

絶句するアーチャーの見た光景。

そこにはわさび、からし、酢、みりんなどの数種類の調味料と……

空間のほとんどを占める空白地帯。

肉も、野菜も果物も、一切が集団脱走でも敢行したかのように影も形も存在しない。

“スッカラカン”という形容がこれ以上ないほど当てはまる、見事なまでのもぬけの殻であった。

言うまでもなく冷凍庫も、野菜室も全ての部屋が、である。

「きつ……貴つ様あああああつ！！ 料理人が材料を切らすとは何事かあああああああ！ 調味料と『の。たま』しかないではないかあああああつ！！」

瞬間移動でもしたのかというほどの勢いで取って返し、土郎の胸倉を掴み上げる紅い男。

その豹変ぶりと息苦しさに目を白黒させながらも、土郎は喘ぎ喘ぎ言葉を返す。

「い、いや……だつ、て、昨日、と今日で、食い、扶持が……急に、増え、た、からッ！ 買い置、きが、今ので……切れたん、だよッ！！」

士郎は一人暮らしだ。

それ故、冷蔵庫に食料品を多く備蓄している訳ではない。

朝・夕に間桐桜と“もう一人”が食事をしに来るが、それでも頭数は三人だ。

やはり備蓄量はたかが知れている。

しかし今現在の衛宮邸の人口は五人、つまりそれだけ冷蔵庫の中身の減るスピードは相対的に早くなる。

さらに本来ならば昨日買い出しに行く予定だったのであるが、聖杯戦争のドンパチのせいであえなくその機会も潰れてしまっていた。

そしてトドメはセイバーの、その尋常ならざる食事量である。

今もそうだが、朝食の際もそれはもう凄まじいの一言で全てを語れるほど。

かくして士郎の作った昼食を最後に、冷蔵庫の中身は見事空になってしまったという訳である。

「……………」

ズルリ、と士郎の襟から手が滑り落ち、アーチャーはその場に膝か

ら崩れ落ちる。

如何に腕の優れた料理人であっても、食材がなければただの役立たずである。

「ケホッ……ま、まあ、そういう訳だから、諦める。あれだけぶち上げておいてこのオチってのは、俺もあんまりだとは思っけだな」

士郎はそんな役立たずを、ただジッと冷めた目で見つめ続けていた。いきなり八つ当たり気味に締め上げられたのだから、無理もない。

……しかし、それでは納得出来ない人間もここにはいる訳で。

「……あの、つまりもう料理は出来ない、のですか？」

「あ、いや……まあ、うん。そうだな……悪い、セイバー」

バツが悪そうに謝りの言葉を入れる士郎。

その途端セイバーは目頭を歪ませ、今にも泣きそうな表情を浮かべた。

「そ、そんな……」

「……すまん、セイバー。この小僧が材料を切らしたせいで……もういいです。この役立たず」ぐはっ!？」

立ち上がりかけたアーチャーを言葉の刃で真っ向から斬り伏せると、セイバーは殊更沈鬱な表情で顔を伏せる。

散々期待を持たされた……とは言い難いかもしれないが、セイバーにとっては十分な前フリだったのだろう……上での前言撤回は、セイバーに思った以上の深刻な精神的ダメージを与えていた。

既に全員の皿の上には一品たりとも料理は残っておらず、ご飯もとうに食い尽くされてジャーの中には取り損なった米が数粒へばりついているのが関の山。

士郎はセイバーのお代わりをよそわなかったのではない……よそえなかったのだ。

生米だけは辛うじてあるが、今から炊いたのでは昼食の時間を逸してしまっし、それ以前に白米だけ食すのもどこか空しい感じがする……まあ『の。たま』が残っている分、その辺りはまだマシかもしれないが。

とにかく、セイバーの切なる願いは無情にも届く事なく、材料切れによって強制的にラストオーダーとなってしまうた……筈だった。

「——セイバー、まだご飯食べたいの？」

蚊帳の外で、内心冷や冷やしながら状況を静観していたのび太の、この一言がなければ。

「その……はい」

「ええ！？ あれだけ食べたのに！？ ご飯大盛りで何杯もおかわりして、士郎さんから鮭を半分貰って、凜さんから大根分けて貰って、アーチャーさんのキンピラを横から奪い取って、僕からは……なんにも取らなかつたけど。それでも足りないの？」

「魔力を得るためにはそれだけ食べなければなりませんし……この時代の食事はどれも肌理細やかで、大変美味です。私の時代の食事とは、比べるまでもありません。ですので恥ずかしながらつつい、箸が進んでしまつて……」

「あ……そうなんだ」

うーん、と腕組みし、考え込む事数秒間。

やがて考えが纏まつたのか、

「……ん、よし！」

パチンと指を鳴らしてポケットに手をつ突っ込むと白い袋を引っ張り出す。

そしてさらにそこに手をつ突っ込み、中からバサリと“あるもの”を引っ張り出した。

そう……やたらと大きい、それこそ目の前のテーブルをスッポリ覆えそうなほどの四角形の布を。

「セイバー、これをテーブルの上に広げてくれる？ あ、凜さん。食器とかすの手伝ってください」

「は、はあ……？」

「え、なによりきなり？」

いいからいいから、と面食らう二人を置き去りにいそいそと食器を下げ始めたので、二人は首を傾げながらも言われた通りに行動する。

そしてテーブルに布が広げられ、改めて二人は着座した。

「で、これでどうするつもり？ のび太」

凜の問いかけに対し、のび太は軽く微笑み返すとセイバーに向き直り、口を開いた。

「ねえセイバー。今食べたい物ってなに？」

「はい？ それは……どんなメニューが食べたいかという事ですか？」

「うん」

「はあ……。そうですね……」

ふむ、とほんの少しの間セイバーは考え込む。

やがて考えが決まったのかコクリ、と一つ頷いた。

「朝、テーブルの上に置かれていた雑誌に書いてあったのですが……『カレーライス』、という物を食べてみたいです」

そう告げた瞬間、

「「「——えっ！？」「」」

のび太を除く四人が一斉に自分の目を疑った。

「フフツ、はいセイバー。カレーだよ」

何故なら目の前に『カレーライス』が、まるで最初からそこに置かれていたかのように出現していたからだ。

テーブルクロスの上で白い湯気を立ち上らせるカレー……その横にはご丁寧にスプーンと水の入ったコップまである。

たった今作られたばかりのような芳醇な香辛料の匂いが食欲を誘い、思わずゴクリと生唾を飲み込んでしまいそうだ。

だがしかし、いったい何がどうなってカレーが現れたのか、さっぱり理解が追いつかない。

「ノ、ノビタ。これはいったい……？」

「うん。まあ説明は後でするから、とりあえず食べなよ、カレーライス。おいしいよ？」

「は、はい……」

勧められるままにセイバーはスプーンを手に取り、おそろおそろといった感じでカレーを掬い上げ、口へと運ぶ。

そして口の中からスプーンを抜き取ると、二回三回と咀嚼。

「……おいしいです」

ほう、と感嘆の溜息がセイバーの口から漏れた。

その表情は、まるで『我が至福の時』と言わんばかりに緩められている。

その後はそのままスルスルとハイペースに、だが丁寧にスプーンを動かし始め、ものの二分であつという間に皿の上が綺麗になった。

「……ふう。このスパイスの辛さが何とも絶妙な……むう。この味があれば、あと二十年は戦えたものを……」

「満足したみたいだね、セイバー」

どことなく満ち足りた表情のセイバーに、のび太はニツと笑う。

「はい、まあ。しかし、いったいどうやってカレーライスを？」

「ああ、それは……これだよ」

のび太はそう言って、テーブルクロスを指差す。

わざわざ敷いたくらいだ、タネは多分コレだろうなと思っていたセイバー達であったが、しかしまだまだ認識が甘かったと言わざるを得ない。

「これは“グルメテーブルかけ”って言ってね、名前を言えば料理が何でも出てくるんだ。さっきはカレーを出した訳なんだけど他に

も、例えば……『スパゲッティ・ナポリタン』だったり」

のび太の言葉に呼応するように、ポンッと現れるナポリタン。

「『ハンバーグ』だったり……」

続いて香ばしい香り漂う、熱々のハンバーグが出現。

「『ラーメン』だったり……」

さらに今度は湯気の立つ、醤油ベースだと思われるラーメンが眼前に。

「こんな感じで、いつでも、どこでも、何でも、いくらでもリクエストすれば出す事が出来るんだ」

「「「「.....」」」」

二の句が告げない、とはこの事であろう。

目の前で起きた出来事が信じられないといった様子で、四人は見事に硬直している。

そんな中、真っ先に再起動を果たしたのはやはりと言つべきか、

「.....ノビタ、頂いてもよろしいですか？」

「うん、いいよ。僕はどら焼きとお茶を貰うから。というか、まだ食べるんだ.....」

食欲に忠実なセイバーであつた。

フルフルと僅かに震える手でナポリタンの器を自分の方へと寄せ、手元にあつたフォークを突き立てる。

「……ッ！」

その味わいに下手すれば涙すら流しそうなほどに瞳を潤ませ、セイバーはただ黙々と眼前の料理に取り掛かる。

やがて、数分足らずで見事三品とも綺麗に完食。

コトリとハンバーグを突き刺していたフォークを置いたその直後、セイバーは徐にピンと背筋を伸ばしたかと思うと、流れるような動作でのび太の方に向き直り、

「——ノビタ。私のために、毎朝味噌汁を作っただけですか？」

三つ指をついて、何やらトンデモないセリフを言い放った。

というか、何故そんな言い回しを知っているのだろうか？

「はあ？ えーっと……僕、いいとこインスタントしか作れないんだけど。士郎さんをお願いしたら？」

そして当然……と言わなければならないと言わべきか……のび太はそれに對して何とも見当外れな答えを返すのであった。

「あ、凜さんもよかったらどうぞ」

「……ホント、いったい物理法則はどうなってるのかしら？　これって明らかに質量保存の法則を無視してるし、下手したら“第一魔法”……って、ああもう！　やめやめ！　とりあえずケーキッ！」

深く考えた時点で負けだとも思ったのだろうか、凜は自棄気味に頭をグシャグシャと掻き毟ると“グルメテーブルかけ”に向かって命令する。

すると一秒と経たずにポンツ、と目の前にイチゴの乗ったショートケーキが、紅茶と共に現れた。

凜はそれを一瞥すると、電光石火のスピードで傍らのフォークを手にとってケーキを掬うと一口。

「……美味しいわね、これ。けど……やっぱりなんか納得いかない……！」

釈然としない表情で、まによまによとフォークを口に含んだまま何やら唸っていた。

そして。

「……なあ、アーチャー」

「……何だ、小僧？」

「俺達あの争いってさ……結局、なんだったんだろうな？」

「……さて、な」

部屋の隅で、黄昏たようにポツリポツリと言葉を交わす二人。

背中が煤けて見えるのは影に入っているから、ではないだろう。

「……美味しいよな、この大根とキンピラ」

「……ああ。下手すれば、私よりもな」

向かい合わせで、味比べのため“グルメテーブルかけ”から出した大根の煮物とキンピラゴボウを口へと運んだその瞬間……二人には何かがガラガラと崩れる音が聞こえたような気がした。

——美味しい筈なのに、どこか塩辛い味がした事を、二人は気のせいだと思いたかった。

その後、衛宮邸にある凜の私室にてもう一騒動起こるのだが、それは“別のところ”でも。

そして今宵。

五人は、狂戦士へと戦いを挑む。

第二十一話 「午後的一幕」 (後書き)

次回、二度目のバーサーカー戦。

構想はすでに固まっているのですが……執筆の時間が、時間が……！

ちなみに理想郷の方ではこの話の別バージョンを載せています。

第二十二話 「対決！ 狂戦士（その1）」（前書き）

お待たせいたしました。

バーサーカー戦突入でございます。

第二十二話 「対決！ 狂戦士（その1）」

「準備はいいわね？」

「……ああ、大丈夫。出来るだけの事はした」

衛宮邸の道場。

その中央に佇むは、のび太・士郎・凜・セイバー・アーチャーの五人。

「勝算はおよそ五分五分……といったところでしょうか。もつともこんな目算などあまりアテにはなりませんかね」

「ああ、結果は実際にぶつかってみなければ解らん。そもそもからして、聖杯戦争の闘いすべてが絶対未知数の代物なのだからな。とはいえ、ここまで“事前対策”が整う事など通常ではありえん。その点は少年に感謝せねばな」

「い、いやいや！　そこまで大した事はしてませんし……というか、ほとんどドラえもんの道具のお蔭ですし……！」

「まあ、贅辞は素直に受け取っておきなさいな。道具は借り物かもしれないけどアイデア自体はアンタの物なんだし、大したものだと思うわよ」

凜はそう言ってグシャグシャとのび太の頭を乱暴に撫でると、自分の隣に鎮座する“ピンク色のドア”に目をやる。

“どこでもドア”。

一種のワープ装置のようなものであり、目的地を音声や思念などで入力した上で扉を開くと、ドアの先がその目的地に繋がるという道具。

これを使ってアインツベルン城へ殴り込もうというのだ。

普通なら樹海を踏破していかなければならないが、これならばそんな必要もなく一瞬で、しかもダイレクトに辿り着ける。

「じゃ、のび太。お願い」

「は、はい」

凜に促され、のび太は“どこでもドア”の前へと立つ。

退くも地獄、進むも地獄……ならば前進するだけだ。

「……行きますよ！」

そしてドアノブを捻り、ゆっくりと“どこでもドア”が開かれた。

——そこで五人が目にしたモノは。

「——えっ……？」

「な……あ……っ!？」

「……………」

白い霧。

高温の熱風。

湿り気を帯びた空気がドア側に吹きつけ、一同の頬に潤いを与えていく。

しかし肝心なところではない。

ピチヨーン、という水音がいやに大きく響き渡った。

そう、ここはアインツベルン城の……『風呂場』である。

「い——いやあああああああああああああつ
!?!」

「お、お嬢様ッ!？」

「…………覗き？」

絹を裂くような悲鳴を上げ、両腕で身体を隠すように掻き抱きながら蹲る少女。

主に駆け寄り、要所を腕で隠しながらも主の身を護るように立ち塞がる従者の片割れ。

そしてその豊満な肢体を隠そうともせず、ただただ茫洋とした視線を闖入者達へと向けるもう一方の従者。

先程までの張り詰めた空気はどこへやら、ドアを潜ったこの場はもはやただのカオス空間と化している。

「ちよっ……………なんでまたこんなオチなのよおおおおおおお
!!!？」

拳を握り締め、天に届けとばかりに吼える凜。

その足元には、

「「「
.....」」」

頭から煙を立ち上らせる、三人の男の生ける屍が横たわっていた。

「
.....、ハア」

凜に撃墜された男性陣を横目で視認しつつ、今までの緊迫感に満ちたやりとりはいたい何だったのだろうかとセイバーは一人、頭を抱えながら溜息を漏らすのであった。

「『大変申し訳ございませんでした』」

「……もういいわよ。気にしてない……訳じゃないけど、こっちも油断してたのは事実だから」

所変わって、ここは城の応接間。

シャンデリアや色鮮やかな絵画で彩られた豪華絢爛な一室の床において、深々と土下座をする三人の男の姿があった。

半ば事故とはいえ風呂場に突入し、嫁入り前の乙女の柔肌を見てし

まった事を誠心誠意、眼前の城の主とその従者へ謝罪している最中なのである。

三人の頭部に形作られたコブからはいまだ煙が一筋立ち上っており、その様は痛々しさよりもむしろ滑稽さを感じさせる。

なお、先頭を切って“どこでもドア”の扉を開いたのび太はともかく、凧とセイバーの後ろにいた土郎とアーチャーに関しては湯気と前二人の背中に阻まれ、次いで電光石火の早業で凧に墜とされたためその全容を目撃出来た訳ではない事を追記しておく。

「まったく……“タイムテレビ”の時といい、どうしてこう道具を使う度にお風呂場に辿り着いちゃうのよ」

「ア、アハハハハ……」

横でブチブチと苦言を呟く凧に対し、顔を上げたのび太はただ曖昧に笑う事しか出来ない。

そんなのび太の様子に、凧はほんと疲れたように眉間によった皺を揉みほぐした。

「それはそうと、貴方がたはお嬢様に勝負を挑まれに来たのですか？」

と、主の座る席の横に控えていたメイドの片割れ……セラが確認するように口を開いた。

表情がやや硬いところを見ると、主が許したとはいえ風呂場での一件についてまだ納得がいていないのだろう。

ちなみにそれぞれの位置関係は、縦に長いテーブルを挟んで上座にイリヤスフィールとその傍らにメイド二名、向かい側の下座にのび太達五人が着席しているといった形である。

あんな最低な来訪であつたにも拘らず、一応は客として扱われているようで五人の前には紅茶を張ったソーサー付のカップが置かれていた。

きつとそうでもない何ともならないような、甚だ微妙な空気だったのだろう。

「……一応、ね」

「正確には殴り込み……といった形になるのですが、ね。思わぬ事態にほぼ頓挫してしまいました」

「殴り込み……。『オジキのカタキじゃあ、生命^{タマ}取つたらあ』？」

「……リーゼリット、アナタどこでそんな言葉を覚えたのですか？」

「テレビ」

「……………、コホン。それはともかく」

やや天然の入ったメイド……『リズ』ことリーゼリットによって再び弛緩しそうになる空気を誤魔化すようにセラは咳払いすると、

「お嬢様、いかがなされますか？」

己が主へと視線を向けた。

イリヤスフィールはほんの少しだけ宙に視線を投げると、

「そうね……まさかこんなに早くお兄ちゃん達が仕掛けてくるとは思わなかったけど、丁度良かったかも。いいわ、勝ったらお兄ちゃんを貰うわね」

「はあっ？」

にこやかな顔でそんな事を告げてきた。

当然、いきなり身柄を貰い受けると言われた士郎とのび太の目は点

になる。

「ちょっと待て。なんでそんな話になるんだ？」

疑問をぶつける士郎に対し、イリヤスフィールは笑みを崩さぬまま口を開く。

「わたしが聖杯戦争に参加した理由のひとつがお兄ちゃんだもの。だからあの時も死なないように、忠告してあげたの」

「『あの時』？ …… あつ、もしかして何日前、家の近くで早く呼び出せって言った子は……！？」

「そう、わたし。 …… って、今頃気づいたの？」

呆れた、と言わんばかりの表情を晒すイリヤスフィールに、士郎はバツの悪そうな顔をする。

一応言い訳させて貰えるのならば、あの時はまだ何も知らなかったのだ。

聖杯戦争の『せ』の字すらも。

察しろという事自体、無理な話である。

「……すまん。でもどうして俺の身柄なんて欲しがるんだ？俺と君にはなんの関わりもない筈なのに「あら、関わりならあるわよ」……え？」

虚を突かれたように士郎はイリヤスフィールに下げていた視線を向けるが、その途端、妙な悪寒に襲われた。

士郎を見るイリヤスフィールの視線が、どこかしら寒々しく、また異様な揺らぎのあるものに変わっていたからだ。

「お兄ちゃんがエミヤキリツグの息子だから、関わりはあるわ。それも、物凄く近い関係が」

「……爺さんの息子、だから……だって!？」

目の前の少女から父親の名前が出てきた事に、士郎は混乱した。

何故ここで衛宮切嗣の名前が出てくるのか、皆目見当もつかない。

動揺に突き動かされるまま、士郎の口は勝手に言葉を紡ぎ出していた。

「それっ、どういう意味なんだ!？ どうしてそこで爺さん……親

父が！？

「フフ……さあ、どうしてかしら？——知れたかったらシロウ、わたしのモノになりなさい」

底冷えするような眼力と共に、イリヤスフィールは士郎に命令を叩き付ける。

見た目はのび太と同じくらいの子供……しかし放たれる威圧感はある意味英霊と遜色ないと言えるほどの物だ。

「……ッ！？」

もはや先程までの弛緩しかけた空気は微塵もない。

例えるなら冷淡にして妖艶……そんな妙な二面性を帯びたプレッシャーに士郎は一瞬気圧される。

年端のいかない身であるにも拘らず、いったい何をどうすればここまで凄まじい物が身につくのか、士郎には解らない。

しかし、士郎にも譲れない物があるのだ。

「――断る！俺はのび太君と約束をした！その約束を果たすためにも、イリヤスフィール……いや、イリヤ！君の要求は飲

めない！ 君こそ、聖杯戦争から降りるんだ！」

「……へえ。どうしてわたしが聖杯戦争から降りないといけないのかしら？」

プレッシャーを跳ね除け、この戦争から降りろと告げた士郎にイリヤスフィールは眉を顰める。

どういった意図でそんな事を言うのか……イリヤスフィールにはおおよそ見当がついていたが、それはあまりにも自分をバカにしているように映ってしまう。

言った本人は大真面目かつ本気なのだろうが、しかしイリヤスフィールとて伊達や酔狂でこんなイカれた戦争に首を突っ込んでいる訳ではないのだ。

「君みたいなら……良くも悪くも真っ白な子が、こんな事をしているのは間違ってる。だから、出来るなら令呪を破棄して、この戦争から降りて欲しい」

「……それ、隣にノビタがいるのに言えるセリフかしら？」

「ッ！？ そ、それはっ……」

痛いところを突かれ、士郎は言葉に詰まる。

確かに小学生であるのび太が参加しているのに言えた義理ではない。

しかも のび太は事情があるとはいえ、本来ならマスターどころか魔術師ですらない生粋の一般人なのだ。

どちらの言葉に説得力があるのか、火を見るよりも明らかである。

……しかしそこに、

「——あ、あの！……出来れば僕も、降りて欲しいかなあって、思ったり、思わなかったり」

他ならぬ のび太が口を挟んだ。

すかさずイリヤスフィールの細められた目が のび太に向かって突き刺さる。

若干それに怯えを見せつつも、 のび太は自分の意思を口にする。

「その……あの時は必死だったから何も感じなかったんだけど……
改めてこう、向かい合ってみると……なんか、しずかちゃんとケン
カしてるみたいで、イヤなんだ」

「……シズカって、誰？」

「僕の友達」

「……………」

イリヤスフィールの眉間の皺が、先程よりもやや深くなった。

無理もない。

ガールフレンドとケンカしているみたいだから争いたくないなどと、
あまりにもふざけている。

士郎の言葉でただでさえ冷え始めていた空気がこのやり取りで一気
に凍り付き、張りつめた糸のような緊張感がこの場を支配する。

「……………」

「……………」

テーブルを挟んで火花を散らす、イリヤスフィールと士郎……あと一応のび太も。

凜とセイバー・アーチャーは静観を決め込んで口を挟まず、セラとリズは意思を主に委ねきっているのか沈黙を保ったまま主の隣に控えている。

空気が軋み、物音一つしない沈黙が息苦しさを誘う。

……しかしこの極限の状況は。

「——ハア、まあいいわ。それじゃこうしましょうか」

白の少女の妥協によって、唐突に終焉を迎えた。

「勝負に勝った方の言い分を採る……元からお兄ちゃん達は闘つつもりでここに来たんでしょう？ それでいいわね？」

その有無を言わさぬ眼光に、士郎は悟った。

これ以上のやり取りは無意味であると。

「……やっぱり、それしかないのか。まあ、イリヤが戦争から降りるには、悪いけどバーサーカーには退場して貰わなきゃいけない訳なんだし……解った、そういう事にしよう」

再び場所は変わって、城の外にある森。

森といっても葉が鬱蒼と茂っている訳ではなく、季節の関係で葉の落ちた巨木があちらこちらに乱立している、所謂枯れた森である。

魔術師の大家であるアインツベルンが城を建てている事からして昼間ですら、ある種の魔境と言っても差し支えない程の妙に薄気味悪い森なのだが、時刻が夜ともなればその異様さには更に磨きが掛かっている。

そんな城からさほど離れていない森の只中に、二組の陣営が佇んで

いた。

無論、イリヤスフィール主従とのび太達である。

「さて、準備はいいかしら？」

「……質問に質問で返すのも何だけど、アナタはバーサーカー一人なの？ こっちはマスター含めて五人いるんだけど」

凜の疑問にイリヤスフィールは首肯する。

己がサーヴァントである狂戦士に全幅の信頼を寄せた笑顔で。

「……後ろの二人は？」

「見物させてるだけよ。あのまま城の中に残しておくのも何だし、戦闘能力も一応あるけど手出しは一切させないから。必要ないもの。いいわねセラ、リス？」

「お嬢様の仰せのままに」

「うん」

主の左右数歩後ろで下知に頷く従者二名。

そんな二人を見やったまま、凜は更に言葉を繋げる。

「わたし達はここにいる全員で掛かるけど、文句はないわね？」

「ええ。でも実際、戦力になるのってセイバーとアーチャーと、あとヘンな道具を使ってるノビタくらいかしら？ リンの宝石はバーサーカーには効かなかったし、お兄ちゃんの問題外なもの」

「……その余裕がいつまで続くかしらね？」

イリヤスフィールに聞こえないくらい小声で凜は呟くと、背後に佇むアーチャーに目をやり、視線で指示を出す。

弓兵は無言のまま首肯すると踵を返し、そのまま後ろへ向かって走り出した。

そして約十秒後、アーチャーからの念話が届いた凜が残る陣営のメイツに向かって首を縦に振った事で、おおよその前準備が整った。

「もういいみたいね。じゃあ……バーサーカー！」

「――■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■――！！！」

命令とほぼ同時に、彼女の左前方に現れた狂戦士・バーサーカー。

虚空に向かって気炎を上げるその様は、バーサーカー自身の血の猛り具合を表しているかのようだ。

早く戦いたい、殺し合いたいと。

「……いい気迫ですね」

「そうね」

しかし“この程度”で去勢されている場合ではない。

これは勝負の前の、いわば軽いジャブのような物だ。

このくらい軽く流せないようでは、このバケモノと闘い合う事など到底不可能である。

「……くっ!？」

「……うっ、やっぱりちょっと怖い……!？」

「……アンタらねえ、もう少しシャキッとしなさいよ。特に土郎、色々と力入りすぎよ」

——いやまあ、一部例外もいたりはあるが。

言い訳させて貰えるなら、単にコイツらはエンジンが掛かっていないだけである。

初めてバーサーカーと対峙したあの夜も一応土郎は平静を保てていたし、のび太に至っては言わずもがな。

スイッチが完全に切り替わっていない今は、とりあえずこんなモノである。

「さて、相手は誰からかしら? やっぱりセイバー? それとも一

度にかかってくる？」

したり顔でそう言ってみるイリヤスフィールであったが、やはり最初はセイバーが来るのだろうなと頭の片隅で考えていた。

セイバーが先鋒で組み合い、アーチャーが後方から援護射撃を行い、のび太が道具を使ってその間で遊撃を行う。

あの夜と同じ、スリーマンセルの戦闘方式。

戦術的にも戦力的にも、それが最も効率がいい。

だから今回も、おそらくその手で来るだろうとイリヤスフィールは予測していた。

人間的にあと二人ほど余っているが、はっきり言って士郎と凜はほぼ戦力外だ。

特に士郎はあらゆる意味で役立たず。

魔術の一つもロクに扱えない半人前以下の魔術師であるし、この場にいるにはあまりに場違いすぎて逆に異彩を放っている。

そういった点で見ればのび太も違和感ありありなのだが、あの夜の活躍を目にしまっている以上はそこまで奇異には映らない。

いや、見た目魔術師で知らない、ただの小学生でありながらバーサーカーと渡り合うという点で言えば奇異どころかむしろ異常なのだが……。

(……やっぱり、どうにも読みきれない存在なのよね、あのノビタって。バーサーカーが警戒するのも解る。ある意味未知数の塊だもの)

肝は言うまでもなくあの正体のよく解らない、不思議な道具類。

いったいあれらがどういったシロモノなのか、イリヤスフィールは非情に興味がひかれたが敵である以上は特A級の警戒対象でしかない、今は意識を割り切っている。

バーサーカーもそれを重々承知しているようであの夜以来、本来なら取るに足らない存在である筈ののび太に対して、本能的な警戒心と執着心を抱いていた。

戦闘において、判断のつきかねる不確定要素ほど厄介な物もないからだ。

きつと主からの戦闘開始の下知が下れば即座に不確定要素を潰さんと、真つ先にのび太に向かって呐喊していく事だろう。

(……ま、それはともかく今は目の前に集中ね。『狂化』状態のバーサーカーなら、あの時のセイバーでも絶対に負けない)

そう意気込むイリヤスフィールの目の前で、凜とのび太が距離を取り始めた。

「……いいわね、手筈通りにいくわよ」

「は、はい」

「……了解です」

そして当初の予想通り、セイバーが先鋒として前方へ……。

「——え？」

出てこなかった。

なんとバーサーカーと真つ先にぶつかり合うと思われたセイバーが、凜・のび太と一緒に後方へと下がり始めたのだ。

これにはイリヤスフィールも面食らった。

「——えっ！？　ちょっと、どうしてセイバーも下がっちゃうの！？」

「……これも作戦よ。大丈夫、アンタの戦術予測は大体あってるから……じゃ、頼むわよ？」

意図が解らず混乱するイリヤスフィールを余所に、凜がそんな言葉を口にする。

そして一歩一歩、バーサーカーへと近づいてきたのは……。

「えっ——「冗談でしょ？」」

「——冗談なんかじゃない。バーサーカーの相手は俺だ、イリヤ」

戦力として論外である筈の、士郎であった。

歩み寄る士郎を視界の中央に収めながらも、イリヤスフィールの思考はますます混乱の色合いを増す。

アーチャーがこの場を離れ、遠くへ移動した……弓兵である以上、それは理解出来る。

凜達が距離を取った……これも解る。

だがセイバーが前面へと出ず、代わりに士郎がアタッカーとして突出するというのはどう考えても解らない。

凜の言葉の込められていたものや士郎の様子からして、これがブラフだという線はおそらくない。

本気で士郎はバーサーカーと組み合わせつつもりなのだ。

(……でも、そんな事出来る筈がない)

士郎は一つの魔術すらろくすっぱ扱えない魔術師で、再三言つがその力などまずお話にならないレベルだ。

そもそもからして、人間が英霊に挑む事自体、^{マスター}狂気の沙汰以外の何物でもない。

バーサーカーとまともにぶつかり合えば、数秒と持たずにミンチに

される事請け合いである。

それは向こうも解っている筈。

ならば何故……、と思考が堂々巡りを始めようとしたところで、

「……馬鹿みたい」

イリヤスフィールは葛藤を切って捨てた。

考えたところで何になる。

自分はただ、己がサーヴァントの圧倒的な力を信じるのみ。

『ヘラクレス』を召喚したあの時、そう決めたではないか。

「狂いなさい、バーサーカー」

バーサーカーの巨軀が、煽られるように仰け反った。

直後にドウウンツ、という重く鈍い振動が広がり、渴いた地面から砂塵がもうもうと舞い上がると二つの人影を中へと覆い隠す。

[.....]

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

- - - - - ! !]

砂煙の中で、バーサーカーは即座に崩された体勢を元に戻すと一旦距離を置くため、バックステップを踏んで煙を抜け、後方へと下がる。

そして士郎は、

「ふう。何とか、上手くいったか。よっ、と」

煙の中で踏み出していた足を戻し、どこかホツとしたような声でそんな事を口にした。

サア……ッ、と一陣の風が吹き、土煙を吹き散らすと同時にガシャッ、と鉄が何かにぶつかるような異音が響き渡る。

そこには、

「これで冗談じゃないって解っただろ、イリヤ。――さあいくぞ、バーサーカー！ お前の相手は俺だ！！」

――二メートルは優に超えようかという『大剣』を肩に担ぎ、その全身に闘志を漲らせ佇む士郎の姿があった。

両の手にはゴムで作られたような『手袋』を身に着け、右の肩に乗せた『大剣』は空に向けた片方のみが、片刃剣特有の優美な弧を描いている。

士郎が“スピアポケット”から居合の如く抜き放った、およそ常人には到底振り回し得ない程の巨大な片刃剣。

バーサーカーを仰け反らせた事からして、狂戦士の持つ岩の斧剣と遜色ないほどの重量と質量を持つであろうことは想像に難くなく、またそれは確固たる事実でもある。

そんな斬馬刀の如き異形を成した剛剣の銘を、のび太達は便宜上こう呼称している。

『大・電光丸』と。

第二十二話 「対決！ 狂戦士（その1）」（後書き）

斬馬刀・斬艦刀は漢オトコのロマンです。

絶賛、『毎日デス・マーチが死の行進』状態……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0015t/>

ドラえもん のび太の聖杯戦争奮闘記

2011年11月13日22時55分発行